

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第120集

上中・西屋敷遺跡

2004

財団法人愛知県教育サービスセンター

愛知県埋蔵文化財センター

序

濃尾平野のほぼ真ん中に位置する稲沢市は、古代の尾張国の中心施設である国府や国分寺が作られるのを始め、中世には守護所が置かれた下津城や鎌倉街道の宿駅が設置されるなど、古代より現在に至るまで交通・政治の要衝として当地方において重要な位置を占めてきました。

今回発掘調査を実施した上中・西屋敷遺跡では、古墳時代前期から奈良時代にかけての竪穴住居や、中世の墓墳である方形土坑、江戸時代の屋敷跡・池状遺構や、江戸時代の街道であった八神街道の一部がみつかっています。本書はそれらの成果をまとめたものであり、今後学術的な資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に対してご理解、ご協力を賜った関係諸機関並びに地元の皆様、発掘調査や資料整理に参加協力していただきました多くの方々に厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成 16 年 8 月

財団法人 愛知県教育サービスセンター

理事長 古池 庸 男

例 言

1 上中・西屋敷遺跡（遺跡番号 09216：『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』1994による）は、愛知県稲沢市北島町上中及び西屋敷に所在する遺跡である。

2 本書は、愛知県建設部道路建設課一宮土木が進めている県道須成七宝稲沢線建設に伴う事前調査にかかる発掘調査報告書である。発掘調査は愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3 発掘調査は、平成12年4月から12月にかけて4600㎡の面積で行われ、服部信博・宮腰健司・織部匡久・蔭山誠一・洲崎和宏が担当した。

4 発掘調査ではコンテナ159箱の遺物の出土があり、平成15年度に報告書作成のための整理事業を実施した。整理作業は宮腰が担当した。

5 調査にあたっては本センター理事・専門委員をはじめ次の各関係機関のご指導とご協力を得た。
愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、稲沢市教育委員会、愛知県建設部道路建設課

6 調査区の座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。ただし、旧基準の「日本測地系」で表記している。

7 遺構は以下のアルファベットによる分類記号と、各調査区毎で調査時に使用した表記をそのまま使用した。

S K：土坑、S D：溝、S T：水田、S E：井戸、S X：その他の遺構、N R：自然落ち込み、
S F：道路

本遺跡の調査区表示は00 A区～00 I区となっているが、単年度の調査であるため、本文中では該当年度を表す00を省略しA区～I区とした。

8 本書の執筆は下記のとおりである。

第4章第1節 鬼頭剛・小野映介
第4章第2節 森 勇一・上田恭子
その他は宮腰が執筆している。

9 遺構の写真撮影は調査研究員が行い、遺物の写真撮影は福岡栄が行った。

10 発掘調査及び整理については、発掘調査補助員である山田琴美、調査研究補助員である阿部佐保子の他、多数の発掘作業員・整理作業員・整理補助員の皆様のご協力を得た。記して感謝する次第である。

11 本書をまとめるにあたり、本センター専門委員を始め、次の各氏のご指導・ご協力を得た（敬称略）。

城ヶ谷和広・中野晴久・北條献示・森 勇一

12 調査記録（図面・写真資料・日誌等）は、本センターにて保管している。

13 出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方 802-24 TEL 0567-67-4164

目次

第1章 序章	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 調査の概要	1
第3節 遺跡の概要	5
第2章 遺構	6
第1節 A区	6
第2節 B区	6
第3節 C区	7
第4節 D区	10
第5節 E区	12
第6節 F区	16
第7節 G a区	17
第8節 G b区	19
第9節 H区・I区	20
第3章 遺物	21
第1節 土器・土製品	21
(1) B・C区SX03	21
(2) B区遺構内出土	26
(3) C区遺構内出土	29
(4) B・C区遺構外出土	29
(5) D・E・F区遺構出土	29
(6) D・E・F・G a・G b区遺構外出土	38
(7) G a・G b区遺構出土	39
(8) H・I区出土	46
第2節 瓦	47
第3節 製塩土器・土錘	50
(1) 製塩土器	50
(2) 土錘	50
第4節 加工円盤	54
第5節 石製品	56
第6節 木製品	56
第7節 金属製品	56
第4章 自然科学分析	61
第1節 濃尾平野中央部、上中・西屋敷遺跡における堆積環境	61
第2節 昆虫化石にもとづく環境考古学—上中・西屋敷遺跡	71
第5章 まとめ	79
第1節 古墳時代	79
第2節 中世	79
第3節 江戸時代	79

図版

写真図版

挿 図

- 第 1 図 上中西屋敷遺跡位置図
- 第 2 図 上中西屋敷遺跡と周辺の遺跡
- 第 3 図 上中西屋敷遺跡調査区位置図
- 第 4 図 方形土坑 B 区 SK12・SK13
- 第 5 図 B 区セクション
- 第 6 図 C 区セクション
- 第 7 図 D 区 SB01・SB02
- 第 8 図 D・E 区セクション
- 第 9 図 E 区 SB01・SB04
- 第 10 図 E 区 SB02・SB03
- 第 11 図 E 区 SK05
- 第 12 図 F 区セクション
- 第 13 図 F 区北壁セクション
- 第 14 図 F 区 SD01・SU01
- 第 15 図 G a 区・G b 区セクション 1
- 第 16 図 G a 区・G b 区セクション 2
- 第 17 図 G a 区 SK58
- 第 18 図 H・I 区 S セクション
- 第 19 図 B 区 SX03・SU01 一括 (1)
- 第 20 図 B 区 SX03・SU01 一括 (2)・SU02 一括
- 第 21 図 C 区 SX03・SU01 一括
- 第 22 図 B・C 区 SX03
- 第 23 図 B・C 区遺構内出土
- 第 24 図 B・C 区遺構外出土
- 第 25 図 D・E 区遺構内出土 (1)
- 第 26 図 D・E 区遺構内出土 (2)
- 第 27 図 D・E 区遺構内出土 (3)
- 第 28 図 E・F 区 SX01
- 第 29 図 F 区遺構内出土 (1)
- 第 30 図 F 区遺構内出土 (2)
- 第 31 図 F 区遺構内出土 (3)
- 第 32 図 F 区遺構内出土 (4)
- 第 33 図 D・E 区遺構外出土
- 第 34 図 D・E・F・G a・G b 区遺構外出土
- 第 35 図 G a 区遺構内出土 (1)
- 第 36 図 G a 区遺構内出土 (2)
- 第 37 図 H・I 区遺構外出土
- 第 38 図 B 区 SX03・SU01 一括出土瓦 (1)
- 第 39 図 B 区 SX03・SU01 一括出土瓦 (2)
- 第 40 図 D・E・H 区出土瓦
- 第 41 図 F 区 SU01・SK03 出土瓦
- 第 42 図 製塩土器
- 第 43 図 土 錘
- 第 44 図 加工円盤 (1)

- 第 45 図 加工円盤 (2)
- 第 46 図 加工円盤 (3)
- 第 47 図 加工円盤 (4)
- 第 48 図 石製品 (1)
- 第 49 図 石製品 (2)
- 第 50 図 木製品 (1)
- 第 51 図 木製品 (2)
- 第 52 図 金属製品 (1)
- 第 53 図 金属製品 (2)
- 第 54 図 上中・西屋敷遺跡における深掘調査地点図
- 第 55 図 上中・西屋敷遺跡 00E 区の深掘柱状図
- 第 56 図 上中・西屋敷遺跡 00I 区の深掘柱状図
- 第 57 図 上中・西屋敷遺跡 00E 区の珪藻分析結果
- 第 58 図 上中・西屋敷遺跡における南北模式層序断面図
- 第 59 図 三角州における環境模式図
- 第 60 図 濃尾平野中央部における堆積環境模式図
- 第 61 図 古墳時代遺構分布図
- 第 62 図 中世遺構分布図
- 第 63 図 江戸時代遺構分布図
- 第 64 図 北島村絵図
- 第 65 図 推定「八神街道」と G b 区 SF01
- 第 66 図 加工円盤分布図

表

- 表 1 上中・西屋敷遺跡 00E 区・00I 区の放射性炭素年代測定結果
- 表 2 濃尾平野、ハンドボーリングによる放射性炭素年代測定結果
- 表 3 上中・西屋敷から産出した昆虫化石 (水洗浮遊選別法)
- 表 4 上中・西屋敷から産出した昆虫化石 (ブロック割り法)

挿図写真

- 写真 1 F 区調査状況
- 写真 2 G a 区調査状況
- 写真 3 地元説明会
- 写真 4 石製品 (3): 火打石 (18～21)
- 写真 5 上中・西屋敷遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡

図 版

- 図版 1 00 A 区遺構平面図
- 図版 2 00 B・C 区遺構平面図
- 図版 3 00 D・E 区遺構平面図
- 図版 4 00 E・F 区遺構平面図
- 図版 5 00 G a 区遺構平面図
- 図版 6 00 G a・G b・H・I 区遺構平面図

第1章 序 章

第1節 調査の経緯

今回の上中・西屋敷遺跡の調査は、県道須成七宝稲沢線建設に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じた委託事業として行ったものである。道路建設予定地には『愛知県遺跡分布地図Ⅰ（尾張地区）』（愛知県教育委員会 1994）に記載されている、上中・西屋敷遺跡が存在することが認識されていたが、さらに詳細に遺跡範囲を決定するために、平成9年3月に稲沢市教育委員会、県教育委員会文化財保護室および県埋蔵文化財調査センターにより予定地内の試掘調査が行われた。この結果、調査範囲を4600㎡の面積に設定した。調査期間は平成12年4月から12月にかけてである。またその後、平成15年度に整理作業を行っている。

第2節 調査の概要

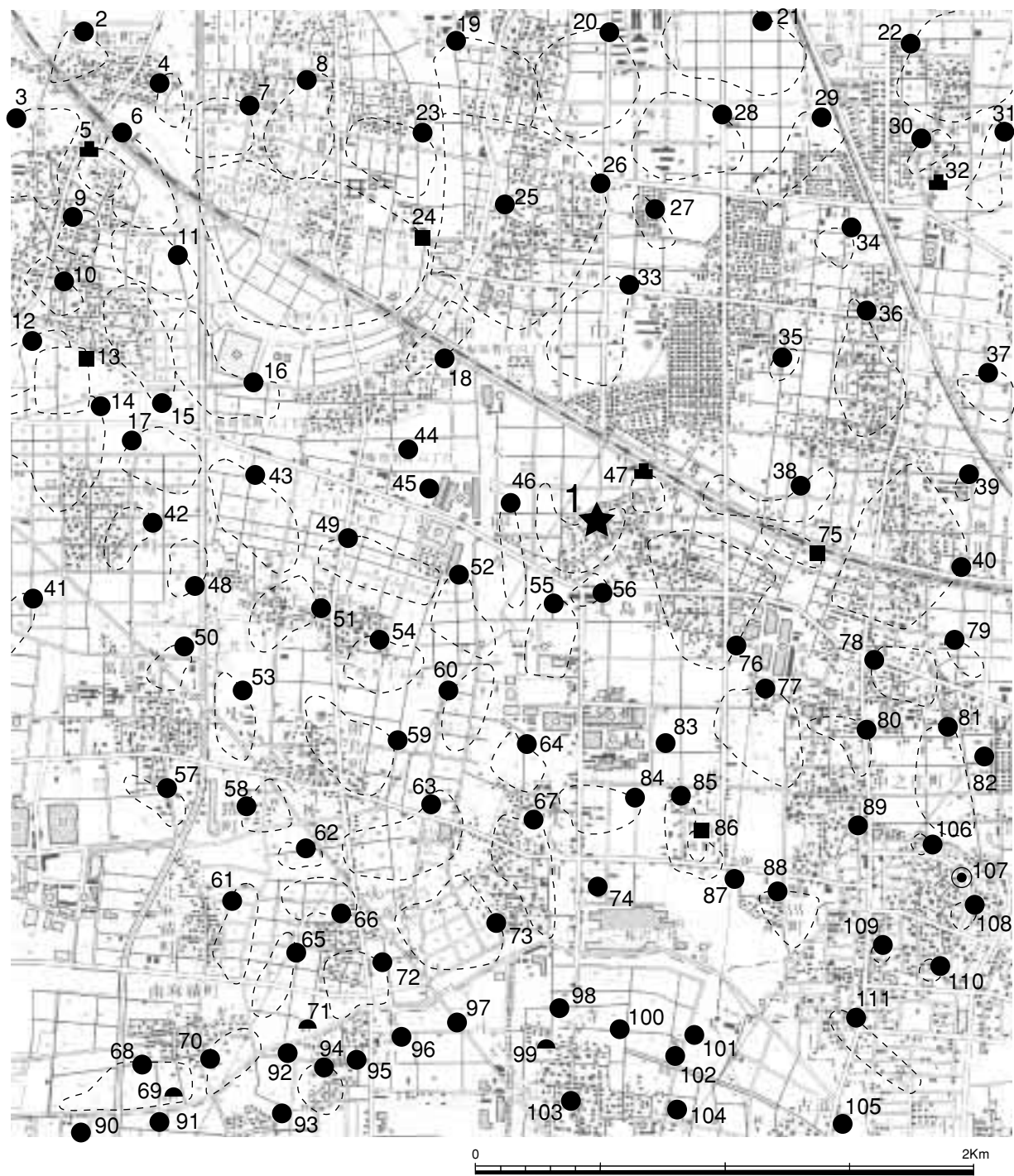
調査は廃土置き場や現道の関係で、A区～I区まで10調査区（G区はG a・G b区の2調査区）に分けて行なった。調査の順番は、A→B→C・D→E→G a→F→G b・H・Iである。また、平成12年11月12日に北島上中公民館とF区において地元説明会を行い、40名の参加を得た。

A区 調査区北側の大半が深くまで攪乱を受けており、南端の現道下にあたる部分でのみ地山面と遺構が確認している。

B区 北側で一部攪乱がみられたが、ほぼ全面にわたり遺構を検出した。上面の遺構は、にぶい黄橙色砂を掘削した後、褐灰色砂上面で検出した。さらに約20cmの厚みをもつ褐灰色砂を掘削し、明青灰色砂（地山）で下面の遺構を検出した。下面の遺構としては、南東部で江戸時代後期に埋没した大型の落ち込みであるSX03が確認された。落ち込みは東側に向かい深くなっていくが、1.5m程



第1図 上中西屋敷遺跡位置図



- | | | | | | |
|-------------|------------|-------------|--------------|------------|------------|
| 1 上中・西屋敷遺跡 | 21 古海道遺跡 | 41 野崎北出遺跡 | 61 麻畑遺跡 | 81 元屋敷遺跡 | 101 五反地遺跡 |
| 2 船橋前田遺跡 | 22 長東北浦遺跡 | 42 建地遺跡 | 62 上塚遺跡 | 82 堤畔遺跡 | 102 五反地遺跡 |
| 3 三島屋敷遺跡 | 23 辻惣山遺跡 | 43 高町畑遺跡 | 63 附島・大矢遺跡 | 83 長島遺跡 | 103 屋敷遺跡 |
| 4 船橋市場遺跡 | 24 平野・小寺遺跡 | 44 環浦遺跡 | 64 北浦遺跡 | 84 寺脇遺跡 | 104 鬼田A遺跡 |
| 5 矢合城跡 | 25 大塚古墳 | 45 阿古根遺跡 | 65 込野花ノ木遺跡 | 85 セツ寺屋敷遺跡 | 105 古道遺跡 |
| 6 矢合城跡下層遺跡 | 26 大塚遺跡 | 46 棒田・セツ田遺跡 | 66 榎戸遺跡 | 86 セツ寺跡 | 106 北浦遺跡 |
| 7 小市畑遺跡 | 27 松葉添遺跡 | 47 北島城跡 | 67 大矢町遺跡 | 87 地藏前遺跡 | 107 オシャゴシ塚 |
| 8 横地熊野遺跡 | 28 町長遺跡 | 48 橋介遺跡 | 68 富士社古墳周辺遺跡 | 88 堀田浦遺跡 | 108 四反畑遺跡 |
| 9 矢合市神前遺跡 | 29 蓮池遺跡 | 49 砂畑遺跡 | 69 富士社古墳 | 89 中之庄辻畑遺跡 | 109 下西浦遺跡 |
| 10 辻初遺跡 | 30 長東島居先遺跡 | 50 大福寺遺跡 | 70 南麻積郷前遺跡 | 90 礼掛遺跡 | 110 寒屋遺跡 |
| 11 七々代遺跡 | 31 中曾根遺跡 | 51 焼餅畑遺跡 | 71 築山古墳 | 91 杉ノ木遺跡 | 111 森南遺跡 |
| 12 矢合高畑遺跡 | 32 長東正家館跡 | 52 敷代・越門堂遺跡 | 72 郷中遺跡 | 92 寄附遺跡 | |
| 13 尾張国分寺跡 | 33 五万出遺跡 | 53 欠鳥遺跡 | 73 浄土寺遺跡 | 93 廻間遺跡 | |
| 14 堀之内花ノ木遺跡 | 34 天目寺遺跡 | 54 高土井遺跡 | 74 三篠田遺跡 | 94 西屋敷遺跡 | |
| 15 縄境遺跡 | 35 長角・大門遺跡 | 55 流遺跡 | 75 中花の木遺跡 | 95 西屋敷遺跡 | |
| 16 鈴置・道相遺跡 | 36 神ノ木遺跡 | 56 北島四屋敷遺跡 | 76 北島町遺跡 | 96 伊豆明遺跡 | |
| 17 琵琶戸遺跡 | 37 北喜路寺遺跡 | 57 浜西遺跡 | 77 中之庄・北島遺跡 | 97 薬師寺跡 | |
| 18 唐人遺跡 | 38 北島天神遺跡 | 58 芳野遺跡 | 78 九重遺跡 | 98 東高須賀遺跡 | |
| 19 大塚塚畑遺跡 | 39 円蔵坊遺跡 | 59 柳前遺跡 | 79 横枕遺跡 | 99 ニツ寺古墳 | |
| 20 大塚東屋敷遺跡 | 40 奥田町遺跡 | 60 全木田遺跡 | 80 清水遺跡 | 100 上長遺跡 | |

国土地理院発行1/25000地形図「清州」を使用している。

第2図 上中西屋敷遺跡と周辺の遺跡 (S=1/25,000)

掘削した時点で湧水が激しくなり、底面まで掘り進むことは断念している。また全面で方形土坑が検出されている。

C区 調査区の西半がB区で確認された落ち込みSX03になる。ここでもA区同様湧水のため底面まで掘削できなかった。東側ではにぶい黄橙色砂を除去後、高まりとなる部分を検出した。この高まり面はSX03に向って徐々に落ち込んでいき、部分的に地山の上に盛土を施し作られている。また高まり部分では、井戸や銭貨を出土する連続土坑が検出されている。

D区 大きな落ち込みは見られず、地盤の安定した部分となっている。ただ、南東側には家屋に伴うと思われる大規模な攪乱がみられた。遺構は、にぶい黄橙色砂やその下層の褐灰色砂を除去した明青灰色砂面（地山）で、古墳時代の竪穴住居、江戸時代の井戸を検出している。

E区 調査区の北半はD区から続く基盤の安定した部分となっているが、南半は緩やかに落ち込み、低地となっている。表土及びにぶい黄橙色砂を除去した褐灰色砂面で、江戸時代の溝・土坑・不定形土坑などの上面遺構を検出した。その後褐灰色砂を除去した下面の明青灰色砂面で、古墳時代の竪穴住居や土坑を検出している。

F区 北側1/3がE区から続く低地となり、南側1/2が近世以降の水田と廃棄土坑となっている。わずかに高まりとなっている中央部分では、表土及びにぶい黄橙色砂を除去した上面の褐灰色砂面で、江戸時代の溝と廃棄土

坑、埋設された常滑甕を検出した。下層の明青灰色砂面ではわずかな土坑・溝が検出されたのみである。

G a区 E区より続く低地にあたり、もっとも安定していたD区との比高は約50cmとなる。上面では近世以降の水田・井戸・溝・土坑を、下面でも同時期の溝・土坑を検出している。

G b区 表土を除去した1面目の灰色砂面では近世以降の水田を、さらにそれを除去した2面目の明緑灰色砂面では道路遺構を、3面目では水田と土坑を検出している。

H区・I区 緩やかに南にいくに従い低く傾斜していた地形が、急に落ち込んでいく部分となる。上位では近世以降の水田が作られ、下位では鉄分の堆積が顕著に見られた。



写真1 F区調査状況



写真2 G a区調査状況



写真3 地元説明会

第3節 遺跡の概要

上中・西屋敷遺跡は、北東—南西に延びる、標高2～3mの微高地上の西端に立地し、西側に向かってゆるやかに傾斜していく。今回の調査区は南北方向に長く設定されたため、南北にわたる詳細な地形が確認された。調査で確認できた基本的な地形は、D区とE区の北半を最高位とし、南北両方向に向かうに従い低くなっている。北側ではC・B区部分がやや低く、B区北端で急激に落ち込んでいる。南側では、E区の南半とF区北半に落ち込みがあり、F区南半からG b区にかけてやや低い部分があり、H区・I区南半で急激に落ち込んでいく地形が形成されている。

調査区北側では、表土を除去した時点で検出できた黄褐色砂上面で江戸期以降の遺構を確認し、さらにそれらを除去した後、明青灰色砂上面において中世の遺構を確認した。中央のD区とE区の北半では、黄褐色砂と明青灰色砂の間に、20～30cm程の厚さをもつ褐灰色砂がみられ、古墳時代から中世にかけての堆積層であると考えられた。南側では、南にいくほど黄褐色砂層は薄くなっており、古墳時代から中世の遺構はほとんど見られなくなる状況であった。

周辺には錯綜し複雑な流路を形成する河川が幾本も流れており、それら河川が作り出した微高地上にいくつかの遺跡が立地する。稲沢市内では縄文時代以前の遺跡は少なく、まとまった遺物は下津遺跡で縄文時代後期から晩期の深鉢・鉢が確認されているのみである。次の弥生時代以降、遺跡は増加し、弥生時代前期には野口北出・大塚・清水遺跡が、中期には一色青海・野口北出・大塚・寺脇遺跡が、後期から古墳時代初頭にかけては塔の越大塚・堀之内花ノ木・琵琶戸・流・寺脇・込野遺跡が見られる。古墳時代では、大塚古墳や南約2.2kmにある美和町二ツ寺古墳などの古墳や、中花の木・流・寺脇遺跡など多く遺跡で遺構・遺物が確認されている。古代になると、北約3.6kmにある尾張国府、西約2.4kmにある尾張国分寺や北西約3.8kmにある尾張国分尼寺などを中心に、正楽寺跡・東畑廃寺などの古代寺院が建立され、市内各遺跡でも多くの遺物の出土が認められるなど、本地域が尾張の中心地として発展していたことが伺われる。さらに中世になっても守護所が下津遺跡に置かれるなど、引き続き行政的に重要な位置を占めていたことが推定されている。

第2章 遺構

第1節 A区

A区の北部の大半は攪乱で、遺構は現生活道路部分でのみ確認されている。

SD01・02 現生活道路に沿って、北東—南西方向に延びる幅40～70cm・深さ10～25cmの溝で、SD01はSK02部分で途切れ、SD02へと続いていくように見える。SD01の時期は江戸期以降になる。SK01～04 SD01・02の線上に掘削された土坑で、時期は江戸期以降になる。

第2節 B区

方形土坑 (SK07・09・10・11・12・13・14・15・16・17・19・45・54) 2～20cmの中～大型ブロックで構成される斑土にみられる方形の土坑である。その中で長径が3mを超すSK10・11・12は短径1.3～2mと長方形を呈し、長径軸線も西北西と同じ方向を向く。SK17も長方形であるが、ひとまわり小型で、軸線方向も東西からやや西北西を向く。これとは別に長径が1～2mの大きさで、方形を呈するSK07・16・19があり、軸線方向は東西からやや西北西を向く。また方形または円形と不定形なSK13や、長方形であるが長径が2m以下のSK45・54がある。SK09・14・15は規模・形状とも不明である。遺構の切り合いが確認できるものは、SK10・11→SK09、SK12→SK13、SK15・17→SK16で、SK17とSK45は不明確であった。このことから、小型で方形を呈するが土坑の方が新しくなる可能性が指摘できる。時期を特定できる遺物は出土していないが、室町期以前の遺物しか出土していないことや尾張低地部で検出される同様の遺構群からみて、室町期を中心とした中世になると考えられる。

SK01 調査区の南東角で検出された径2.8m以上・深さ90cmの大型土坑で、埋土には炭化物・木片を含んでいた。時期は江戸後半以降。

SK04 調査区南西部で検出された径2m以上の土坑で、検出面より1.2m程掘削したが、湧水のため底面は確認できなかった。

SK05 径1.5m以上の土坑で、検出面より1.4m程掘削したが、湧水のため底面は確認できなかった。中～上層より須恵器・江戸時代後期遺物がまとまって出土している。

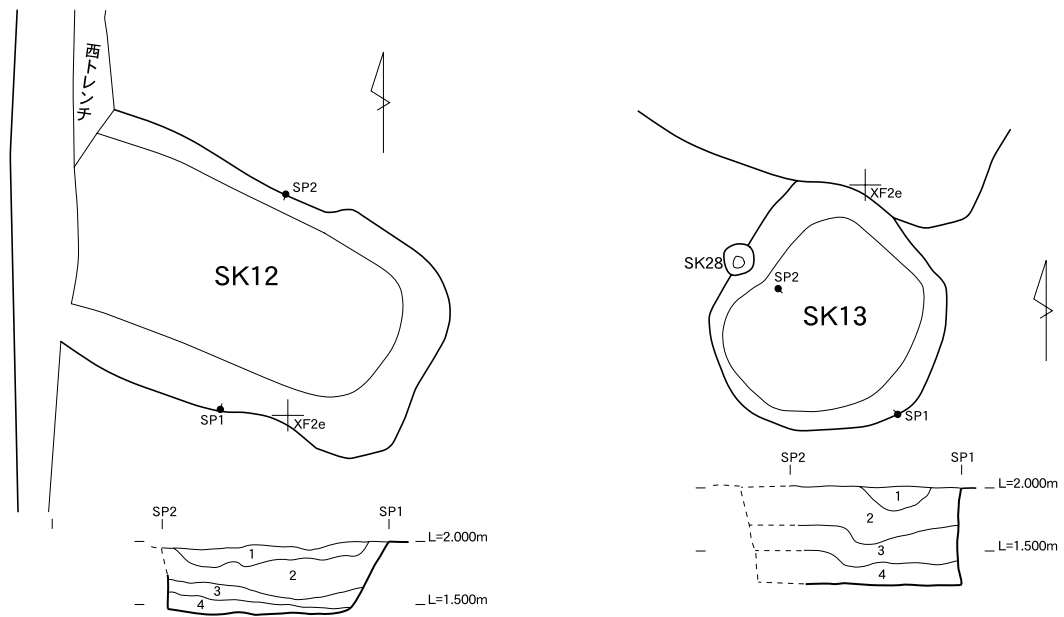
SK08 SK19の北東で検出されたごく浅い土坑で、SK19・42に切られている。

SD01 調査区中央部を北西—南東方向に走る、幅2.8m・深さ約0.8m・断面形がV字状を呈する溝で、再掘削された痕跡がみられる。またSX03との切り合いは明瞭ではなく、連結していた可能性が高い。先に掘削された溝の埋土には粘質土が堆積しているが、再掘削の溝埋土には砂とシルトの互層がみられ、水流があったことが伺われる。下層より完形の16世紀後半の天目椀(119)が出土している。また溝北肩に沿ってSK49・50・51が並ぶ。

SD02 SD01の北側をほぼ平行して走る幅1.3m・深さ0.7m・断面形が逆台形を呈する溝で、18世紀代の皿や瓦片が出土している。

SX01・02 SX01は調査区南西部で、SX02は北東部で検出された浅い落ち込みになる。

SX03 調査区南東部で検出された深さ1m以上の不定形な落ち込みであるが、湧水のため底面まで掘削できなかった。そのため重機により深掘を行い、標高1.2mが底面であると確認した。埋土は基本的には平行に堆積しており、上層がにぶい黄橙色砂などの砂質土、下層が褐灰色粘質土などの粘質



B区SK12セクション
 1. 5BG6/1青灰色砂+青灰色砂（粗砂）主体+5Y5/1灰褐色シルトブロック(1-3cm)を含む
 2. 灰褐色シルト（粘質強い）(5-20cm)+青灰色砂(10-20cm)主体+青灰色砂（粗砂）
 3. 青灰色砂+青灰色砂（粗砂）（青灰色砂（粗砂）多い）
 4. 3.+灰褐色シルトブロック(2-5cm)を含む（青灰色砂（粗砂）多い）

B区SK13セクション
 1. 5BG6/1青灰色砂（粗砂）+青灰色砂主体+5Y5/1灰褐色シルトブロック(3-5cm)を僅かに含む
 2. 灰褐色シルト（粘質強い）(5-10cm)+青灰色砂（粗砂）+青灰色砂
 3. 青灰色砂（粗砂）+青灰色砂主体+灰褐色シルトブロック(3-5cm)を少量含む
 4. 青灰色砂（粗砂）+灰褐色シルトブロック(3-5cm)を僅かに含む

第4図 方形土坑 B区 SK12・SK13 (S=1/60)

土で、下層の一部に水流痕がみられる。東壁際の中位より江戸時代後半のまとまった遺物群 SU01（1～26）が、さらにそれより下位で SU02（27・28）がみられ、その他多くの遺物が中位から下位にかけて出土している。

第3節 C区

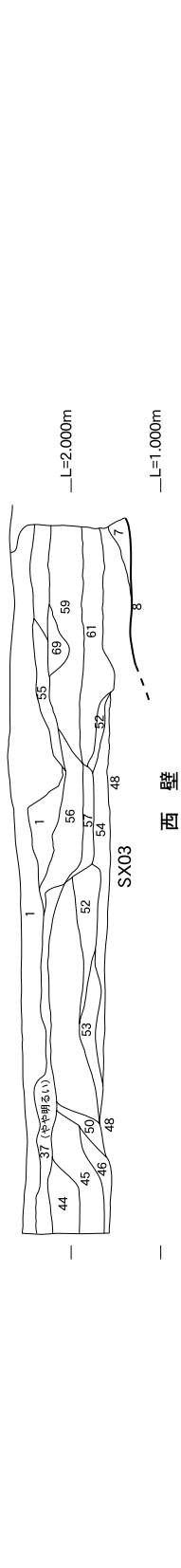
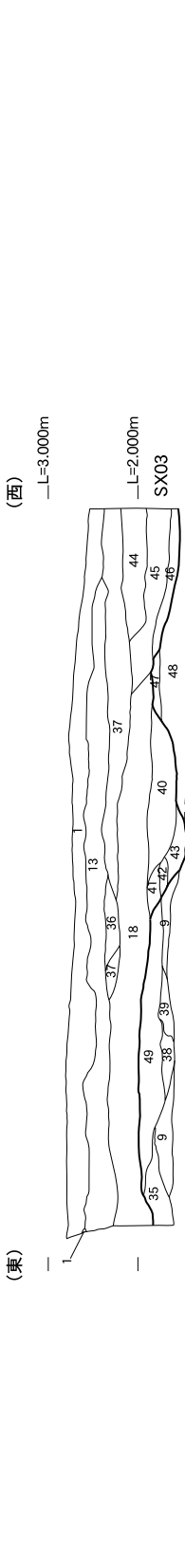
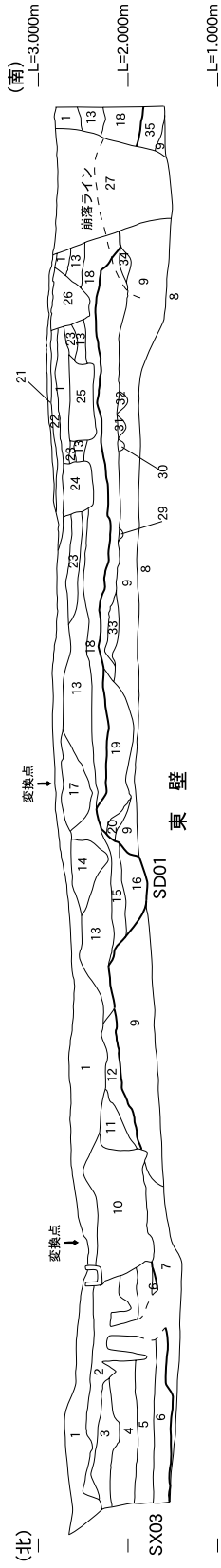
調査区の西半はB区より続く落ち込み SX03 の続きで、東半が高まりとなっている。高まり部分は、SD04 の南東と SD02 の屈曲部で段差をもって SX03 に落ち込んでいる。また中央部に SD01 がある。**SK03・04・05・06・07** 高まり部分の東側では、連続して並ぶ長径 30～50cm・深さ 7～15cm を測る円形及び楕円形の土坑が検出され、南東端の SK07 の中位より **11 枚の中国銭** が重なって出土している。全体の掘削順は、途中で SD02 があるため不明だが、SK03 → 04、SK05 → 06 → 07 と北から南となっている。

SK08 長径 2.3 m・短径 1.9 m・深さ 0.92m を測る楕円形の土坑で、北東側の中位に段差がある。中位より **山茶碗（126）** が出土しており、井戸の可能性が高い遺構である。

SK09 高まり部分の斜面で検出された楕円形の土坑で、長径 1.2 m・短径(0.9) m・深さ 0.58m を測り、土師器・須恵器が出土している。

SD01 SX03 に直交するような形で北東—南西方向に走る幅 2.0 m・深さ 0.5 m・断面形が逆台形を呈する溝であるが、SX03 との切り合いは確認できず、連結していた可能性が高い。下層では水流の痕跡がみられ、須恵器・江戸時代後半の土器が出土している。また南壁沿いにも溝状の落ち込みがあり、南に折れて高まりの斜辺に沿うように廻りこむことも考えられる。

SD02 SD02 は高まり部分に沿って走り、SX03 の肩部で短く南東に屈曲する幅 15cm・深さ 8 cm の溝。



- C区セクション**
1. 表土
 2. 10YR4/3にふい、黄褐色砂
 3. 10YR5/3にふい、黄褐色砂
 4. 10YR6/3にふい、黄褐色砂
 5. 10YR6/1褐色砂+9Pブロック(1-3cm)を含む
 6. N4/灰色粘質土 (やや粘質)
 7. 5B7/1暗灰色砂 (中砂)
 8. 5B7/1暗灰色砂 (粗砂)
 9. 10YR7/1灰白色砂 (中砂)
 10. N3/3暗灰色粘質土
 11. 10YR6/4にふい、黄褐色砂
 12. 9+10YR8/6黄褐色シルトブロック(1-3cm)を多く含む
 13. 10YR5/3にふい、黄褐色砂
 14. 13+10YR7/6明黄褐色シルトブロック(1-3cm)を含む
 15. 10YR4/3にふい、黄褐色砂+10YR5/1褐色砂
 16. 15層状の堆積+9
 17. 10YR6/4にふい、黄褐色砂
 18. 10YR4/3にふい、黄褐色砂
 19. 18+ブロック(1-3cm)を含む
 20. 7+10YR5/3にふい、黄褐色ブロック(1-5cm)を含む
 21. 表土
 22. 表土
 23. 10YR7/6明黄褐色砂
 24. 10YR8/1灰白色砂 (粗砂)
 25. 10YR8/6黄褐色砂 (粗砂) +10YR7/3にふい、黄褐色砂塊(5-10cm)
 26. 24と同じ
 27. 凝結、球塊状か?
 28. 10YR5/3にふい、黄褐色砂+9Pブロック(1-5cm)を含む
 29. 10YR6/1褐色砂+9Pブロック(1-3cm)を含む
 30. 10YR6/1褐色砂+9Pブロック(1-2cm)を多く含む
 31. 30と同じ
 32. 30と同じ
 33. 9+10YR6/1褐色砂ブロック(1-2cm)を含む
 34. 9+10YR6/1褐色砂塊(3-5cm)を含む
 35. N6/6灰色砂+9凝結状(3-5cm)を含む
 36. N6/6灰色シルト+18Pブロック(1-3cm)を含む
 37. 18+N6/6灰色シルトブロック(1-2cm)を含む
 38. N5/灰色砂 (中砂)
 39. 9+凝結状(5-20cm)
 40. 10YR6/1褐色砂
 41. 49+10YR5/6黄褐色砂塊(3-5cm)を含む
 42. 40+5B7/1暗灰色砂 (粗砂) やや塊状の堆積
 43. 40+9Pブロック(5-10cm)を少量含む (やや粘質)
 44. 10YR7/3にふい、黄褐色砂+10YR7/6明黄褐色シルトブロック(1-5cm)を少量含む
 45. 10YR7/3にふい、黄褐色砂+10YR7/6明黄褐色シルトブロック(1-5cm)を少量含む+黒褐色シルト(3-5cm)凝結状
 46. 10YR7/3にふい、黄褐色砂+10YR7/6明黄褐色シルトブロック(1-5cm)を少量含む (明黄褐色シルト多い)
 47. 10YR7/3にふい、黄褐色砂 (やや粘質)
 48. N4/灰色粘質土
 49. 10YR5/1褐色砂 (粘質強い)
 50. 51+10YR7/6明黄褐色シルトブロック(1-3cm)を少量含む
 51. 10YR5/4にふい、黄褐色砂
 52. 9+10YR7/6明黄褐色シルト凝結状(1-3cm)+黒褐色シルトブロック(3-5cm)層かを含む
 53. 10YR6/1褐色砂 (やや粘質)
 54. 8砂、木片を含む
 55. N6/6灰色シルト+10YR8/4黄褐色砂ブロック(1-2cm)を含む
 56. N6/6灰色シルト+10YR7/1灰白色凝結状(10-20cm)
 57. 10YR7/1灰白色砂+5B6/1青灰色砂 (中砂) 凝結状(10-20cm)
 58. 10YR6/3にふい、黄褐色砂
 59. 10YR7/4にふい、黄褐色砂
 60. 10YR6/4にふい、黄褐色砂
 61. 10YR6/1褐色砂

第6図 C区セクション (S=1/80)

SD03・04 SD03・04はSK03・04・05・06・07の土坑列に平行して、南西側の高まり部を横断するように走る幅25～40cm・深さ6～11cmの溝になる。

SX03 B区から続く大規模な落ち込みで、中央部やや南の地点の下層において、まとまった江戸時代後期の遺物群SU01(29～56)が出土している。

第4節 D区

D区の最北端では、B・C区へと広がっていた大型の落ち込みSX03は確認できず、現生活道路内に南肩があると思われる。また調査区南東部分には、近現代の井戸や、漆喰が貼られた流しまたは溜水槽などの「水廻り」施設がみられる。

SB01 調査区北西部分にある竪穴住居で、長径4.7m・短径3.95m・深さ0.09mを測る。軸線は北北西—南南東を向く。埋土中より須恵器高坏片が出土している。SK46・47・49が柱穴の可能性があり、SK46より柱材が出土している。

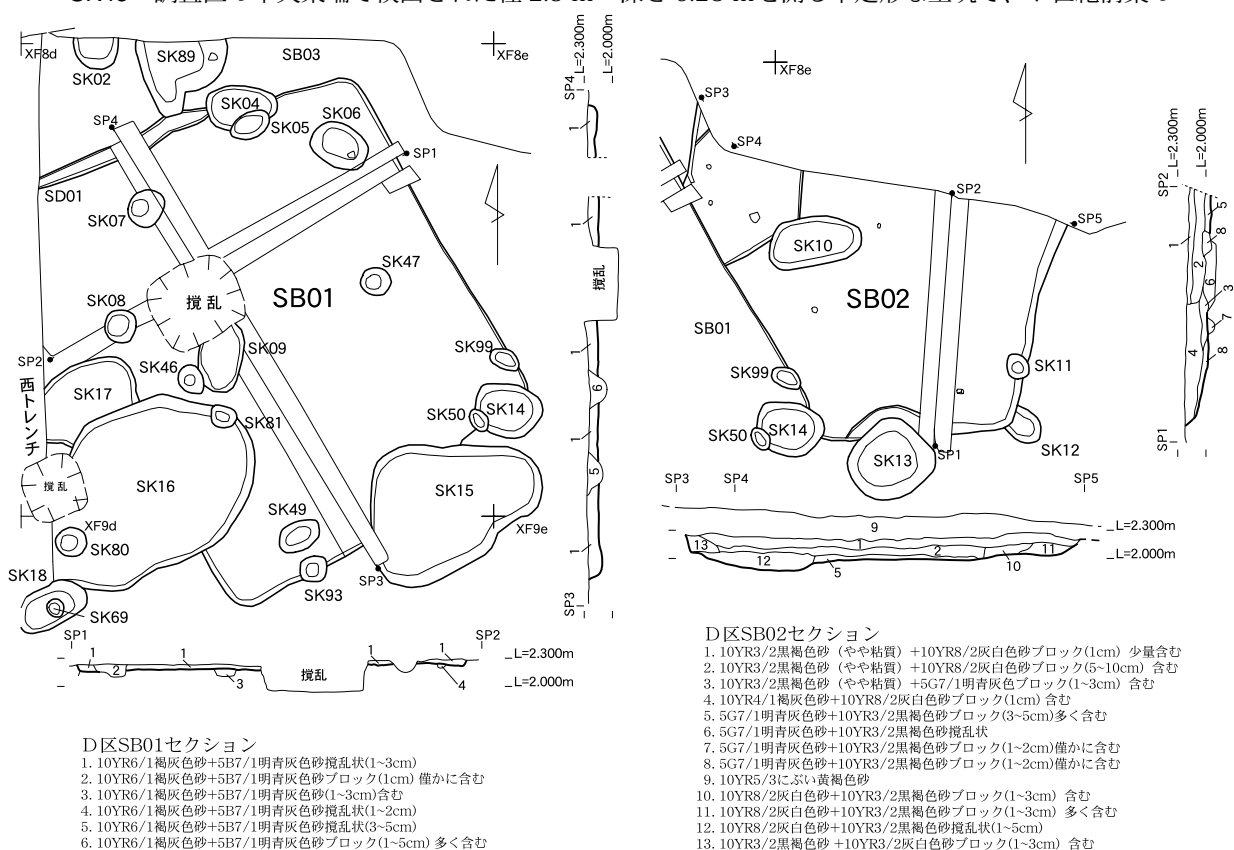
SB02 SB01に切られる竪穴住居で、軸線はほぼ南北を向く。大きさは径2.95m・深さ0.22mで、7世紀後半になるとと思われる須恵器が出土している。

SB04 調査区南西部にある竪穴住居であるが、北側部分など形状は不明である。大きさは4.3m以上、深さ0.18mになると推定される。時期は不明である。

SB03・05 SB03はSB01とSB02の北西側、SB05はSB04の南側にある竪穴住居状の12～15cm程の落ち込みであるが、竪穴住居とは確定できなかった。SB05埋土中より須恵器が出土している。

SK28 長径3.45m・短径2.9m・深さ0.67mを測る大型の土坑で、井戸になる可能性がある。

SK45 調査区の中央東端で検出された径2.3m・深さ0.28mを測る不定形な土坑で、7世紀前葉の



第7図 D区SB01・SB02 (S=1/80)

須恵器が出土している。

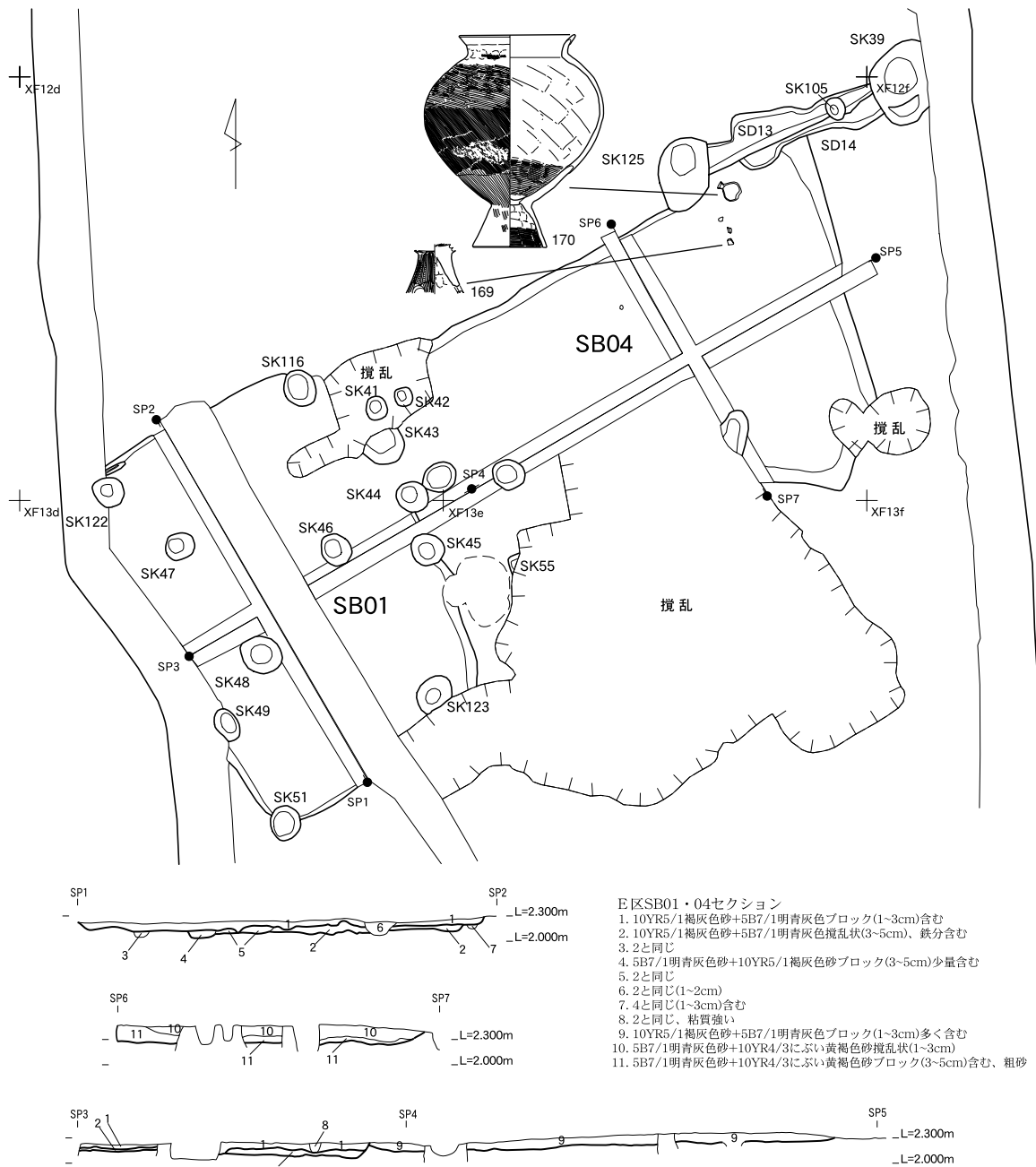
SK110 長径 1.97 m・短径 1.8 m・深さ 0.36 mを測る大型の土坑で、19 世紀以降の常滑製品の甕が出土しており、井戸になる可能性が考えられる。

第 5 節 E 区

調査区南 1/3 程からゆるやかに落ち込み、北側部分が微高地となっている。落ち込み部分では上面で遺構が確認されている。

SB01 軸線が北北東—南南西を向く長径 4.8 m・短径 3.2 mの竪穴住居で、SK47・48 が柱穴の可能性がある。また床には 5～10cm の貼床がみられた。埋土からは須恵器小片が出土しており、時期は古墳時代後期以降になる可能性が高い。

SB02 SB01 の北側で軸線が同じ方向を向く竪穴住居で、短径 3.7 mを測る。SB03 の方が新しく作

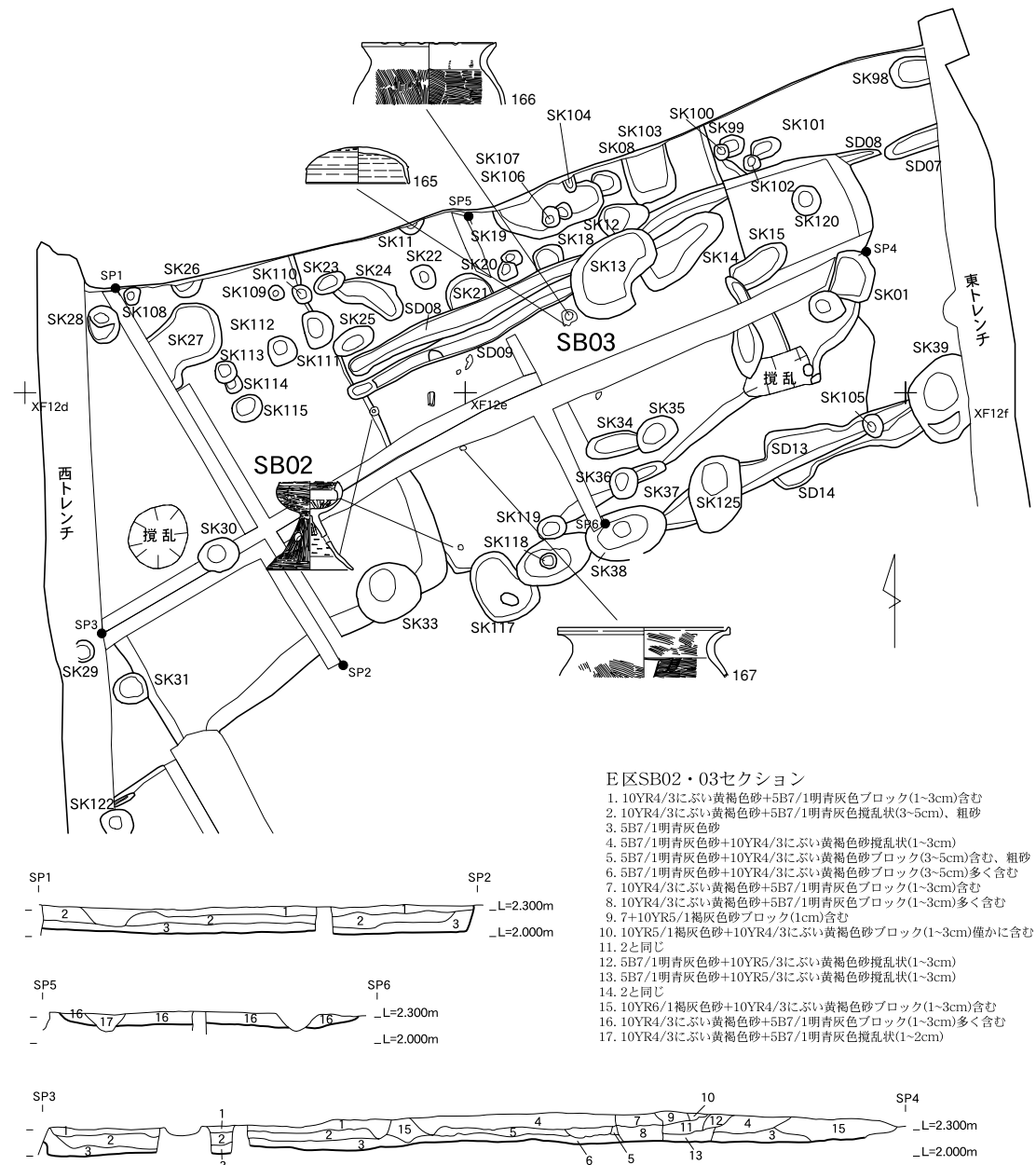


られ、SB01 との切り合いは確認できなかった。住居の時期については、比較的大きな土器片としては 163 の古墳時代初頭の脚台付壺の脚台が上位で出土しているが、SB03 の上位で体部が検出されていることから、この個体は移動している可能性が高いと判断し、小片ながら須恵器が出土しているので、古墳時代後期になると考えられる。

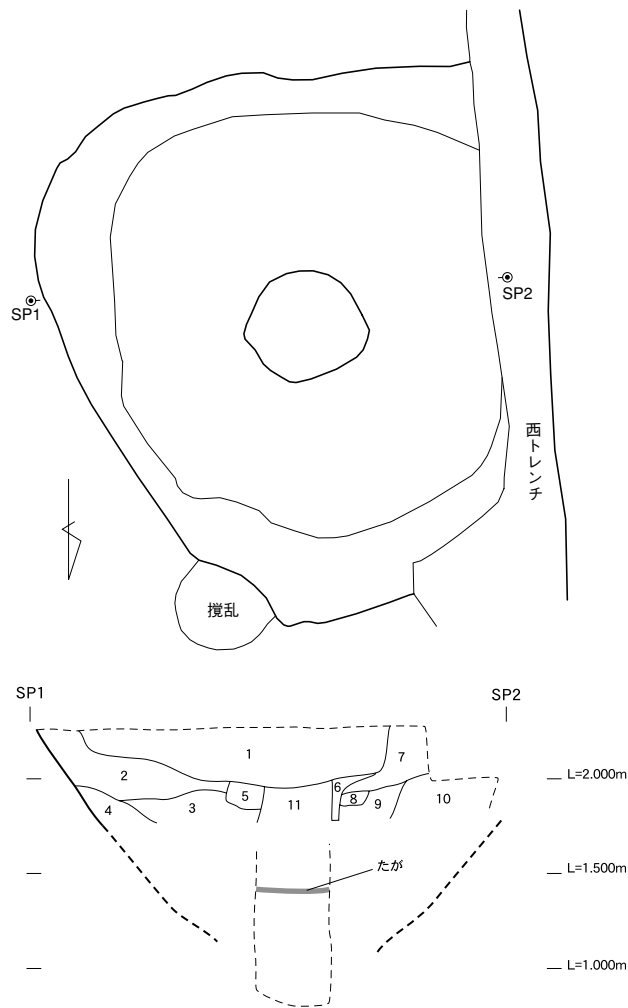
SB03 SB02 の東側で軸線を同じくする竪穴住居で、径 4.5 m を測る。7 世紀前半の須恵器・土師器 (165 ~ 167) が出土する。

SB04 SB03 の南側にある竪穴住居で、SB01 ~ 03 と同じ軸線をもつ。西側が不明瞭となっているが、径 3.9 m を測る。北東隅部分より横倒しの状態で松河戸 I 式の台付甕が出土している。

SB05 調査区の東側で検出された掘立柱建物で、軸線が北北東—南南西を向く。西側柱穴列は SK69・72・82・86 と 3 間分並び、北側に 1 間延びて東に折れ、SK58 を通り、礎石と思われる扁平な石が置かれる SK62 に繋がると考えられた。また SK63 でも礎石が検出されており、立替えが行われた可能性がある。西側柱穴列は、径 37 ~ 55cm・深さ 8 ~ 13cm を測り、柱穴間は約 1.4 m になる。



第 10 図 E 区 SB02・SB03 (S=1/80)



- E区SK05セクション
1. 10YR4/3にふい黄褐色砂+10YR8/2灰白色シルト+5B7/1明青灰色砂+10YR8/6黄褐色シルト、攪乱状(2~5cm)
 2. 1、ブロック(1~2cm)
 3. 1、ブロック(5~10cm)
 4. 2と同じ
 5. 10YR7/1灰白色シルト+N5/灰色シルト、粘質強い
 6. 10YR6/1褐灰色砂、粗砂
 7. 2と同じ
 8. 5と同じ
 9. 3と同じ
 10. 1+N4/灰色シルト
 11. 2、黄褐色ブロックのみ(2~5cm)

第11図 E区SK05 (S=1/40)

北側柱穴列は、径 45 ~ 88cm・深さ 5 ~ 37cm を測り、柱穴間は約 2.4 m になる。時期は江戸時代後期以降か。

SK01 SD05 の東端の北側で検出された径 62cm・深さ 14cm の土坑で、江戸時代後期以降の遺物がまとまって出土している。

SK02・03・04 落ち込み部分の上面で確認された土坑。SK03・04 では正立した状態で常滑製品甕の底部が出土しており、SK02 では常滑製品の鉢(190)と肥前製品の丸椀(191)が出土している。

SK05 径 2.8 m の楕円・三角形の掘肩をもつ井戸で、ほぼ中央において径 44cm の構造物の痕跡を確認した。構造物は残存しておらず、「たが」のみが出土している。検出面下 1.4 m、標 0.8 m まで掘削したが、湧水のため底面は確認できなかった。構造物痕跡部分より江戸時代後期の遺物が出土している。

SK39 径 80cm・深さ 22cm を測る楕円形の土坑で、中位より礎石と思われる扁平な石が 2 個検出されている。

SD01・02・03・06 落ち込み部分の上面で確認された溝群。SD01・02 は長径 4.6～6.7 m・短径 1.3～1.4・深さ 26～40cm を測る大型の土坑状の溝で、やや不定形な楕円形をなす。SD03 も不定形な形状をする大型の土坑・溝で、SD01・02 に切られている。SD06 は SD01・03 から西南西方向に走る幅 95cm・深さ 19cm の溝で、西側が不明瞭になって収束している。SD01～03 から江戸時代中期～後期、SD06 から江戸時代中期の遺物が出土している。

SD04・05 SD04 は調査区中央を北西―南東方向に 19 m 程延びる、幅 50cm・深さ 12cm の溝で、南東端で東側に屈曲する。SD05 は SD04 の北西端の約 1 m 東から始まる溝で、大きさは幅 70cm・深さ 6 cm、SD05 に直交するように北東―南西方向に 7 m 程延びる溝になる。また溝内に並ぶ SK117・38・37・125 が関連遺構である可能性がある。

SX01 調査区の南に広がる落ち込み。北側の竪穴住居が検出された高まりから 20～30cm 程低い、標高 2 m まで掘削したが、その時点で湧水が激しく底面まで掘り進めなかった。そのため重機による深掘を行なったが、標高 1.5 m が底面になると思われる。埋土は基本的には、にぶい黄褐色砂や黄褐色砂・青灰色砂が平行堆積するが、多くの場所で掘り返しを受けている。

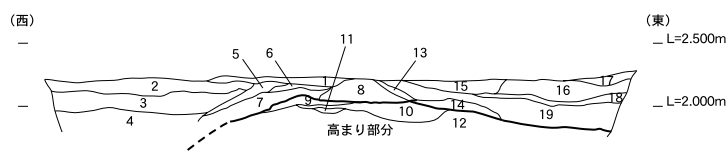
第 6 節 F 区

調査区の北西部分には E 区の南側に広がっていた落ち込み SX01 が続き、その東側は高まりとなる。ただその高まり部分も東に向かってゆるやかに落ち込んでおり、舌状に北側に突出する地形の可能性もある。また調査区の南側も近代以降の水田によって削平され、さらに最近の廃棄坑が掘られている。

SK01・02・03・04 掘肩を接するように列をなして掘削される土坑群で、SK02～04 が軸線を東西からやや東北東―西南西に向け 3 基、SK01 が SK02 の北側に設けられている。各々常滑製品の赤焼き甕底部が据え置かれた状態の正立位で検出され、内部から壊されて落下した口縁部から体部片が出土するものもあった。

SK07 調査区北西角で検出された径 50cm・深さ 24cm の土坑で、多く江戸時代後期の土器が出土している。

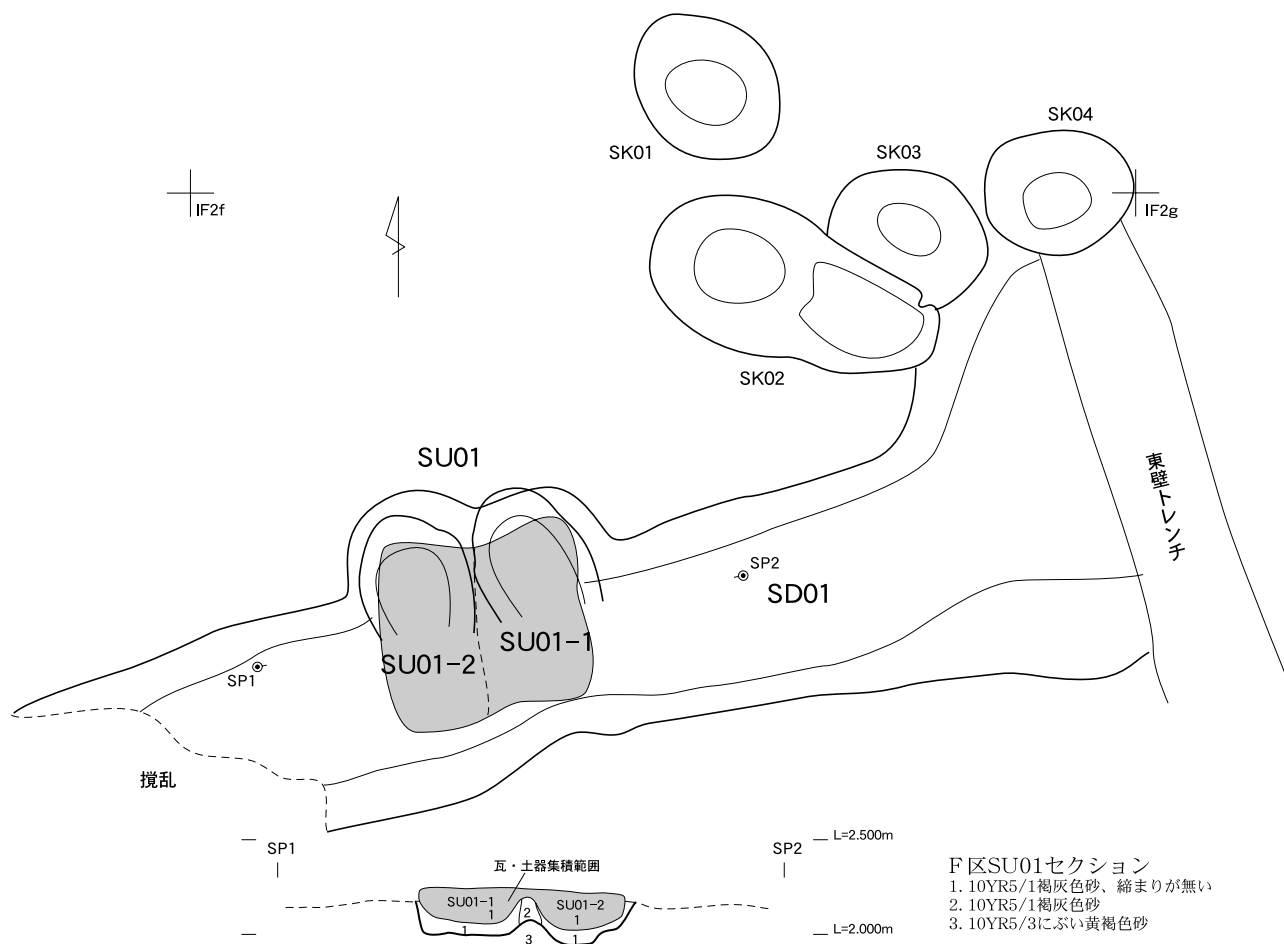
SD01・SU01 SK02～04 の常滑製品の甕列の南側を、軸線を合わせるように平行に走る幅 110cm・深さ 6 cm の溝で、北肩は東側で甕列方向に拡張する。また溝内では、長径 110cm・短径 100cm・深さ 25cm の方形の土坑 SU01 が検出された。SU01 内には瓦片が敷き詰められたような状態で検出されており、その間隙から江戸時代後期以降の土器片が出土している。SU01 の底面は中央部がやや高くなって、東西に分かれるように見えるが、遺物廃棄の時間差は認められなかった。こ



F 区北壁セクション

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 1. 10YR6/2 灰黄褐色砂 2. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂+10YR8/3 浅黄褐色砂ブロック(1~3cm)含む 3. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 4. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂 5. 3+10YR8/2 灰白色砂、層状に堆積 6. 5N6/灰色砂、やや締まる 7. 6+10YR8/2 灰白色砂、層状に堆積 8. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂+10YR6/1 褐灰色砂ブロック(1~3cm)含む 9. 6+10YR8/2 灰白色砂、層状に堆積 10. 10YR6/1 褐灰色砂 | <ul style="list-style-type: none"> 11. 10GY7/1 明緑灰色砂、粗砂+10YR4/3 にぶい黄褐色砂 12. 10GY7/1 明緑灰色砂、粗砂+10YR6/4 にぶい黄褐色砂、粗砂 13. 6と同じ 14. 6+10GY7/1 明緑灰色砂ブロック(5~10cm)含む 15. 10YR6/1 褐灰色砂、やや粘質 16. 10YR5/3 にぶい黄褐色砂 17. 10YR6/3 にぶい黄褐色砂 18. 6+19 ブロック(1~2cm)少量含む 19. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂+10GY7/1 明緑灰色砂ブロック(1~5cm)含む |
|--|---|

第 13 図 F 区北壁セクション (S=1/60)



第 14 図 F 区 SD01・SU01 (S=1/40)

のSU01部分ではSD01の北肩が回り込むように拡張されており、両遺構は関連をもって機能していたことが考えられる。

SD02 調査区の北側にある高まりからSX01に落ち込む斜面に掘削された、幅85cm・深さ11cm、断面形が逆台形を呈する溝で、高まりと同じ方向に走りSX03内で不明瞭になる。

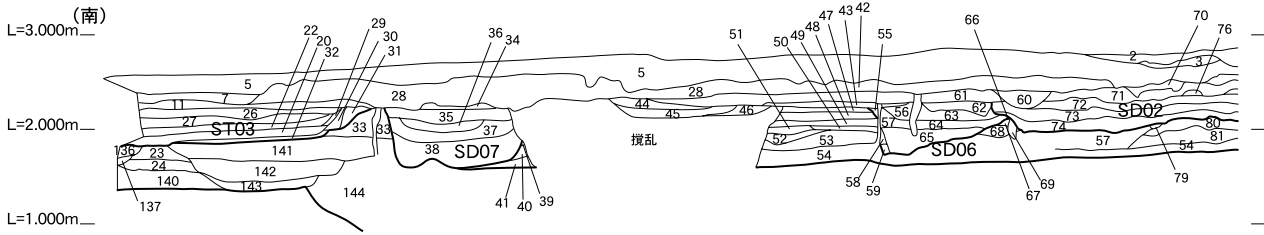
第7節 G a 区

調査区全体が微低地部分にあたり、さらに南に向うに従いごく緩やかに下がっていく。

SK23 常滑製品の赤焼き甕の底部が正立した状態で出土しており、内部では口縁部もみつかった。またSK22にも常滑製品の甕片が出土しており、同様の遺構になる可能性がある。

SK58 調査区南西側で検出された井戸であるが、多量の湧水のため調査区壁が崩落の危険があったため、掘肩の大きさなど平面では詳細な検討を行なうことができなかった。土層で確認したところ、井戸の掘肩は南北約2.4m以上となる。構造物として2段の桶組井戸枠が確認されたが、底面及び3段目以下の桶組構造物が存在するかについては確認していない。桶組構造物の上段は14枚、下段は20枚の桶材で径約60cmの円形に組まれている。

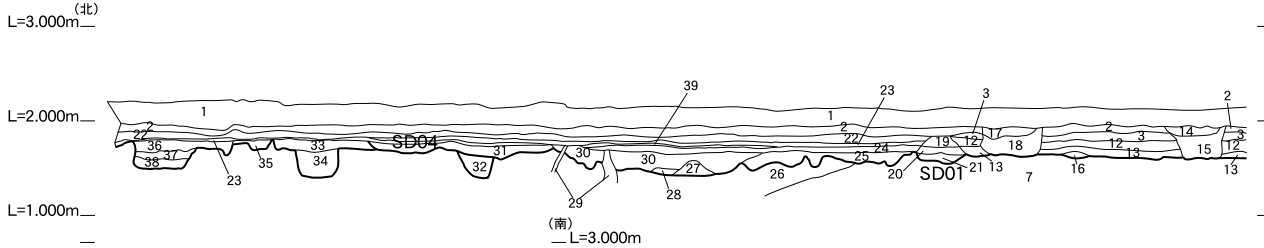
SD03・08 SD03は調査区中央部をほぼ東西方向に走り、東側でやや北東に振れる幅130cm・深さ18cmの溝。SD08は東西からやや西北西—東南東方向に振れる幅90cm・深さ16cmの溝で、東側でSD03に合流するように収束する。構築順はSD03→08になると認識したが、この両溝からは須



G a区西壁セクション

1. 10YR4/4褐色土粗粒砂、バサバサ、畑土、木根含む
2. 10YR4/4褐色土粗粒砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂混じる、しまりなし
3. 10YR5/2灰黄褐色砂、2混じる
4. 10YR5/2灰黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂混じる
5. 10YR5/3~5/4にぶい黄褐色砂、しまりなし、畑土、木根含む
6. 10YR7/4にぶい黄褐色砂に、5ブロック状(1~3cm)混じる
7. 10YR7/4にぶい黄褐色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~2cm)混じる
8. 5に10YR5/2灰黄褐色砂混じる
9. 5に10YR5/1褐灰色砂混じる
10. 5に10YR5/1褐灰色砂混じる
11. 10YR7/4にぶい黄褐色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
12. 10YR7/3にぶい黄褐色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
13. 10YR7/3にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
14. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(2cm)混じる
15. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/6黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
16. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
17. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/4黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
18. 10YR7/1灰白色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(3~5cm)混じる
19. 10YR7/1灰白色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(3~5cm)混じる
20. 10YR7/1灰白色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
21. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(2~5cm)混じる
22. 18と同じ
23. 10YR7/1灰白色砂に10YR5/3にぶい黄褐色砂ブロック状(3cm)混じる
24. 10YR7/1灰白色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(3~5cm)混じる
25. 10YR5/4にぶい灰黄褐色砂に10YR7/2にぶい黄褐色砂混じる
26. 10YR7/3にぶい黄褐色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(2cm)多く混じる
27. 10YR7/3にぶい黄褐色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
28. 10YR7/4にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)程、また5~一部混じる
29. 16と同じ
30. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/3にぶい黄褐色砂ブロック状(1~2cm)混じる
31. 16と同じ、ブロック状(3cm)程混じる
32. 18と同じ、ブロック状(1cm)程混じる
33. 19と同じ
34. 10YR7/4にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)多く混じる
35. 16と同じ、ブロック状(3cm)程混じる
36. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
37. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR5/3にぶい黄褐色砂混じる
38. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR4/3にぶい黄褐色砂ブロック状(2~5cm)混じる
39. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/3にぶい黄褐色砂混じる
40. 37と同じ
41. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR4/3にぶい黄褐色砂混じる
42. 10YR6/4にぶい黄褐色砂に10YR5/2灰黄褐色砂ブロック状(3cm)混じる
43. 10YR6/4にぶい黄褐色砂に10YR7/1灰白色砂混じる (洪水砂?)
44. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/2灰黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
45. 10YR5/4にぶい黄褐色砂に10YR7/2にぶい黄褐色砂、一部5/1褐灰色砂混じる
46. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂混じる
47. 16と同じ、ブロック状砂多い
48. 16と同じ
49. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂混じる
50. 16と同じ、ブロック状(1~3cm)混じる

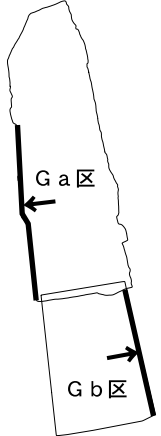
51. 10YR6/1褐灰色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂少し混じる
52. 51と同じ、51よりブロック多く感じる
53. 10YR6/1褐灰色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(2~5cm)混じる
54. 24と同じ
55. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂混じる
56. 16と同じ、ブロック状(1~3cm)に混じる
57. 55と同じ
58. 53と同じ
59. 23と同じ
60. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/1褐灰色砂混じる
61. 42と同じ
62. 19と同じ
63. 56と同じ
64. 57と同じ
65. 19と同じ
66. 10YR6/4にぶい黄褐色砂
67. 20と同じ
68. 10YR7/1灰白色砂に10YR7/3にぶい黄褐色砂混じる
69. 30と同じ
70. 10YR5/3にぶい黄褐色粗砂、しまりなし
71. 61と同じ
72. 62と同じ
73. 20と同じ
74. 10YR7/1灰白色砂に10YR6/2灰黄褐色砂混じる
75. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/1褐灰色砂混じる
76. 崩落の為、不明
77. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR5/6黄褐色砂混じる
78. 16と同じ
79. 10YR7/4にぶい黄褐色砂、砂質
80. 17と同じ
81. 13と同じ
82. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
83. 10YR7/3にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂混じる
84. 64と同じ
85. 10YR7/2にぶい黄褐色シルト
86. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂混じる
87. 82と同じ、一部に10YR5/1褐灰色砂混じる
88. 83と同じ
89. 84と同じ、一部に10YR5/1褐灰色砂混じる
90. 84と同じ、10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(2cm)程混じる
91. 84と同じ、10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
92. 10YR6/1褐灰色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂少し混じる、砂層
93. 72と同じ
94. 73と同じ
95. 74と同じ
96. 23と同じ
97. 10YR8/2灰白色砂、砂質
98. 10YR6/4にぶい黄褐色砂
99. 10YR5/2灰黄褐色砂
100. 10YR5/3にぶい黄褐色砂に10YR5/1褐灰色砂混じる

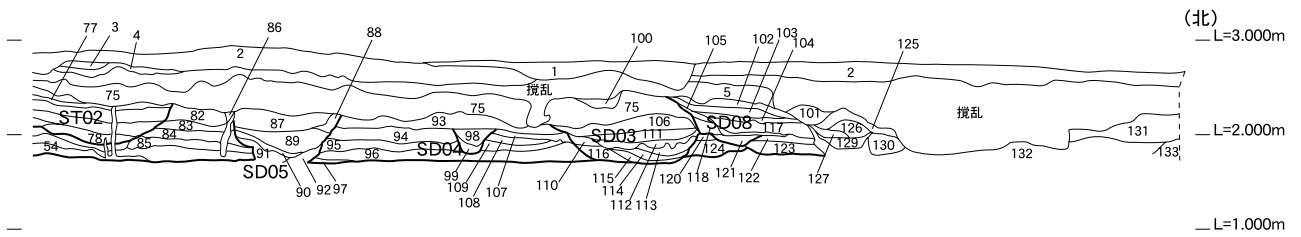


G b区東壁セクション

1. 表土 (水田耕作土)
2. 5BG6/1青灰色粘質土、僅かに鉄分含む
3. 2と同じ、鉄分沈着多い
4. N6/灰色、やや粘質、鉄分沈着多い
5. 4、鉄分沈着少量
6. 10YR5/1褐灰色砂、やや粘質、鉄分沈着多い
7. 10BG7/1明緑灰色砂、粗砂
8. N6/灰色砂、やや粘質、鉄分沈着僅か
9. 5PB4/1暗青灰色砂、やや粗砂
10. 9と同じ、鉄分沈着やや多い
11. 7+10YR5/1褐灰色砂ブロック(1~3cm)含む
12. N6/灰色砂、鉄分沈着する
13. N5/灰色砂、鉄分沈着する
14. 10BG5/1青灰色砂、やや粘質、鉄分沈着少量
15. 10BG6/1青灰色砂、やや粘質、鉄分沈着少量

16. 7+13、攪乱状(1~3cm)
17. N4/灰色砂、やや粘質、鉄分沈着少量
18. N5/灰色砂、やや粘質、鉄分沈着少量
19. N5/灰色砂、鉄分沈着やや多い
20. N4/灰色砂、鉄分沈着やや多い
21. N5/灰色砂+10BG7/1明緑灰色砂ブロック(3~5cm)含む
22. N6/灰色砂、鉄分沈着多い
23. N5/灰色砂、鉄分沈着やや多い
24. N5/灰色砂、鉄分沈着少量
25. N5/灰色砂+10YR3/2黒褐色砂+10BG7/1明緑灰色砂、攪乱状(1~3cm)
26. 10BG7/1明緑灰色砂+10YR3/1黒褐色砂ブロック(1~3cm)含む
27. 25と同じ、10BG7/1明緑灰色砂多い
28. 25と同じ、10YR3/1黒褐色砂多い
29. 7と同じ
30. 10YR3/2黒褐色砂+N5/灰色砂
31. 10YR3/2黒褐色砂+N5/灰色砂、攪乱状(1~5cm)
32. 31+10YR8/2灰白色粘質土ブロック(1~3cm)含む
33. 30と同じ、灰色砂多い
34. 32と同じ
35. 32と同じ
36. N5/灰色砂+10YR3/2黒褐色砂ブロック(1~3cm)含む
37. 36+炭化物・焼土含む
38. N5/灰色砂+10YR3/2黒褐色砂+10BG7/1明緑灰色砂、攪乱状(1~3cm)
39. 23と同じ、鉄分沈着多い





- 101. 2.5Y6/1黄灰色砂に10YR6/4にぶい黄褐色砂混じる
- 102. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR8/3明黄褐色砂混じる
- 103. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/4黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる
- 104. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/4黄褐色砂少し混じる
- 105. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/4黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
- 106. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR7/1灰白色砂混じる
- 107. 30と同じ
- 108. 94と同じ
- 109. 95と同じ
- 110. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR4/4褐色砂少し混じる
- 111. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR7/2にぶい黄褐色砂混じる
- 112. 19と同じ
- 113. 10YR6/1褐灰色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂ブロック状(1~3cm)混じる、砂質
- 114. 10YR6/1褐灰色砂に10YR7/3にぶい黄褐色砂少し混じる、砂質
- 115. 10YR6/1褐灰色砂に10YR7/4にぶい黄褐色砂少し混じる、砂質
- 116. 10YR7/1灰白色砂に10YR7/4にぶい黄褐色砂混じる、砂質
- 117. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/6黄褐色砂ブロック状(3~5cm)混じる、多少粘りがある土
- 118. 51と同じ
- 119. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂少し混じる
- 120. 114と同じ
- 121. 10YR6/3にぶい黄褐色砂
- 122. 10YR6/2灰黄褐色砂に鉄分混じる
- 123. 10YR7/2にぶい黄褐色砂、鉄分混じる
- 124. 10YR6/1褐灰色砂に10YR6/3にぶい黄褐色砂少し混じる、砂質
- 125. 2.5Y6/1黄灰色シルトに10YR6/4にぶい黄褐色砂混じる
- 126. 2.5Y6/1黄灰色シルトに10YR6/4にぶい黄褐色砂ブロック状(3cm)多く混じる
- 127. 2.5Y7/2灰黄色シルトに10YR5/4にぶい黄褐色砂少し混じる
- 128. 10YR7/3にぶい黄褐色砂、鉄分混じる
- 129. 10YR6/1褐灰色砂、鉄分混じる
- 130. 10YR5/1~4/1褐灰色粘質土、鉄分含む(水田耕作土)
- 131. 10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂
- 132. 130と同じ
- 133. 10YR7/1灰白色砂(砂層) 鉄分ブロック(5mm程)少し含む
- 134. 10YR7/1灰白色砂に10YR6/6明黄褐色砂少し混じる
- 135. 10YR7/3にぶい黄褐色砂に10YR5/4にぶい黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる、砂層
- 136. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/6黄褐色砂ブロック状(3~10cm)混じる
- 137. 10YR6/3にぶい黄褐色砂に10YR5/6黄褐色砂ブロック状(1~5cm)混じる
- 138. 10YR6/1褐灰色砂に10YR5/2灰黄褐色砂・10YR4/4褐色砂混じる
- 139. 10YR7/2にぶい黄褐色砂に10YR5/2灰黄褐色砂少々混じる
- 140. 135と同じ
- 141. 136と同じ
- 142. 10YR6/2灰黄褐色砂に10YR5/6黄褐色砂ブロック状(1~10cm)混じる
- 143. 10YR6/1褐灰色砂に10YR5/6黄褐色砂ブロック状(1~10cm)混じる
- 144. 10YR5/1褐灰色砂に5B6/1青灰色砂・一部10YR7/3にぶい黄褐色砂少々混じる、砂層

第 16 図 G a 区・G b 区セクション 2 (S=1/80)

恵器から江戸時代後期の遺物が同様に出土しており、同一の溝であった可能性も考えられる。

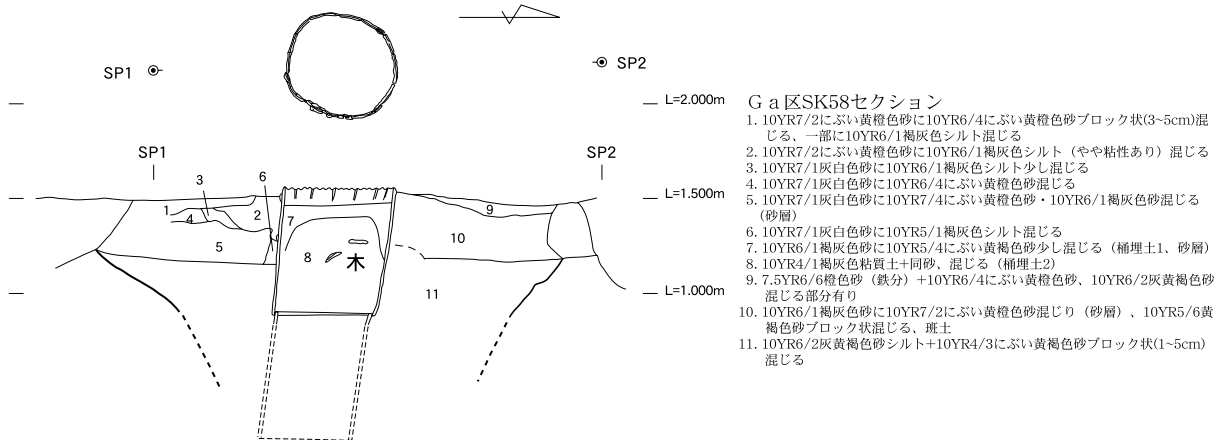
SD05・07 9.5 m 程の間をおいて、西南西—東北東方向を向いて平行に走る溝で、両溝とも江戸時代後期以降の遺物が出土している。

ST01・02・03・04・05 調査区の南側に展開する水田跡であるが、深さは 11 ~ 29cm 程である。南北 22 m にわたって延びる ST01 は、途中で分割できる可能性があるが、はっきりとは確認できなかった。

第 8 節 G b 区

部分的に 3 面で遺構が確認されている。1 面目では、南壁に沿って水田遺構が 5 ~ 6 区画程度展開する。時期は確定できなかったが、出土した土器小片をみると江戸時代後期以降になると思われる。

2 面目では、SF01 とその北側に広がる土坑・溝群を、3 面目では北壁沿いに ST05・06 と 2 面目で



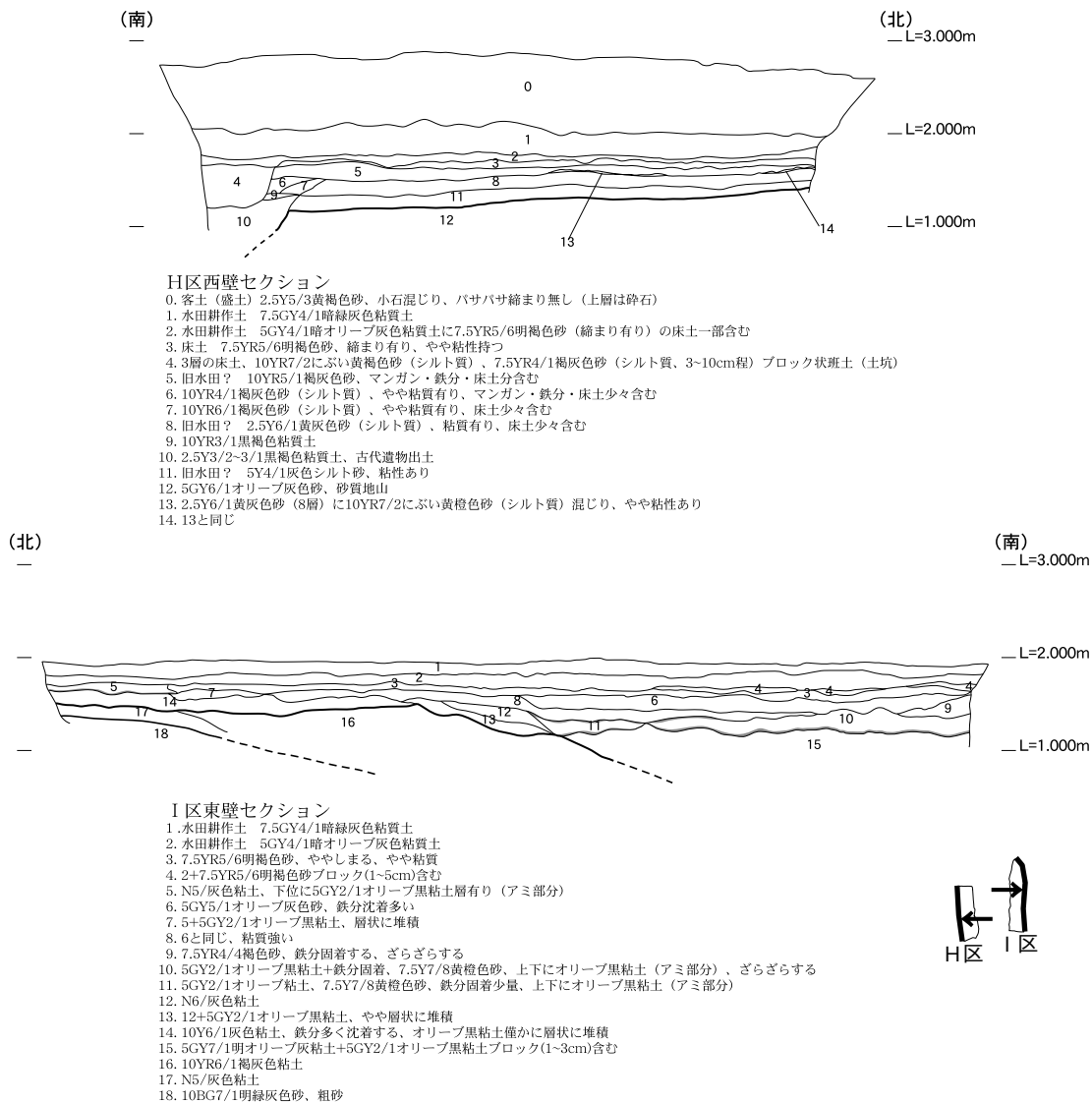
第 17 図 G a 区 SK58 (S=1/40)

検出された土坑・溝群の下に、さらに土坑群を確認している。

SF01 調査区南部を約 4.8 m の間隔をおいて平行に走る SD01 と SD08 の間には、1～3 面をとおして遺構がほとんどみられないため、両溝を含め道路遺構であると認定した。SD01 は幅 55cm・深さ 9cm、SD08 は幅 70～120cm・深さ 7cm を測り、東北東—西南西方向に平行して走る。SD01 は直線的に延びるが、SD08 の肩はやや蛇行する。出土遺物が小片のため、溝の時期は不明である。

第 9 節 H 区・I 区

H 区・I 区は、G b 区の南 5～7 m のところに 4.5 m の間隔をおいて設定された調査区になる。F 区南から G b 区にかけてゆるやかに傾斜していた地形が、両調査区を境に急な傾斜となり落ち込んでいく。落ち込みの埋土はオリーブ黒色・褐灰色・灰色粘土で、水の流れがなく溜水状態であったことが伺える。また H 区下層には、上下をオリーブ黒粘土層に挟まれた、15～20cm の厚さの鉄分が固着した褐色砂層がみられた。またその他の粘土層中にも鉄分が多く含まれている。この鉄分を多く含む南側の落ち込み中より、6～8 世紀の須恵器が出土する。



第 18 図 H・I 区 S セクション (S=1/80)

第3章 遺物

第1節 土器・土製品

(1) B・C区 SX03

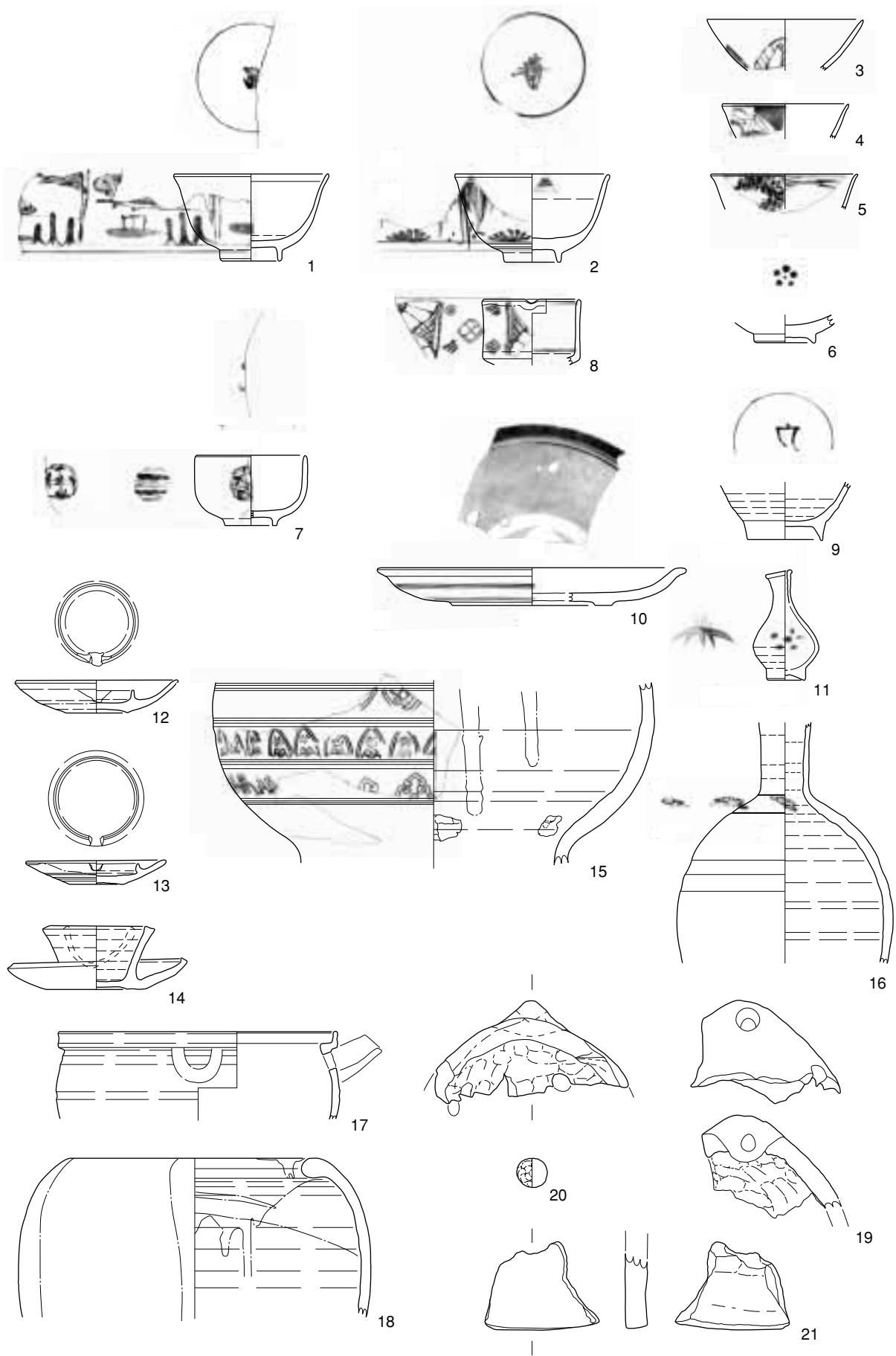
B区 SX03 1～26はB区の大型落ち込みSX03内でまとまって出土した遺物群である。

1は瀬戸製品と思われる端反碗で、焼成がやや甘い。呉須による山水文が描かれる。2は関西系の丸碗で、呉須により菊花文・笹文・寿文?が描かれる。3は呉須による蓮弁文が描かれた瀬戸製品の平碗。4は肥前製品の平碗。外面に赤・赤紫・青の色絵が施される。5は呉須による花文が描かれた関西系の端反碗。6は呉須によって五弁花文が描かれる。7は肥前製品の丸碗。丸文と内底面に呉須が使われる。8は呉須による菊花文・幾何文が描かれた筒碗。美濃製品か。9は瀬戸製品の広東碗。呉須による舟文がある。10は瀬戸製品の丸皿で全体に志野釉がなされ、鉄釉による型紙吹きつけが行われている。11は全体に有機物が付着した小型徳利。呉須による松竹梅文が描かれる。瀬戸製品。12・13は瀬戸・美濃製品の灯籠で、内面と外面上部に灰釉が施される。外面下半は回転ヘラケズリ調整される。また12は全体にひび割れがみられる。14は美濃製品のひょうそくで、内外面とも灰釉が施される。また底面には、煤が多量に付着している。内面の立ち上がり部は一方向が欠損しているが、破面には煤が付着しており、破損後も使用していた可能性がある。15は外面に灰釉、内面に錆釉が施された瓶掛で、横線と瓔珞文が陰刻される。瀬戸製品か。16は瀬戸製品の花瓶で、外面に灰釉が施され、頸部下位に花文?が陰刻される。17は瀬戸製品の行平。受け部以外に灰釉がみられる。18は瀬戸製品の火鉢で、外面には青緑色と乳白色釉が、内面には錆釉が施される。丸みを帯びた口縁端部付近には釉の剥離・欠損がみられる。19は赤焼の手焙りまたは蚊燻しで、内面に煤が多量に付着している。常滑製品。20は陶丸。21は瓦質製品の破損品で、下面が磨面となる。22～24は瀬戸の播鉢で、内外面とも鉄釉が施される。22の内面には「㊦」の印刻がある。25・26は赤焼の甕。常滑製品。

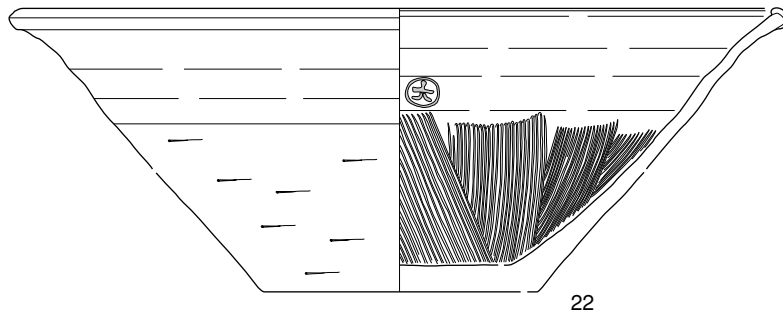
27・28もSX03内の別地点でまとまって出土した遺物である。27は黄瀬戸鉢片で、側面が研磨されている。28は内耳鍋。

C区 SX03 29～56はC区のSX03内でまとまって出土した遺物群である。

29は肥前製品の丸碗で、呉須による丸文・五弁花文が描かれる。30は瀬戸製品の平碗。鉄釉による柳文が描かれる。31は鉄釉後に志野釉が施される。瀬戸製品の鉢か。32は内外面上半に緑灰色釉が掛けられた瀬戸製品の平碗になる。33は薄く灰釉の施された壺。34・35は灰釉が施された四(三)耳壺。36・37は灰釉が施された瀬戸・美濃製品の鉢。38は呉須による笹文が描かれた瀬戸製品の蓋。39は真焼きの常滑製品甕。40は錆釉が施されている。41は瀬戸・美濃製品の折縁鉢、42は瀬戸製品の捏鉢になる。43～46は鉄釉が掛けられた播鉢で、44・45は破面を含め鉄分・煤が多く付着する。46は外面と底面端、破面の一部に磨面があり、外面には溝状になった磨痕もみられる。47は瀬戸製品の瓶掛口縁部。48は瓦質の土器で、外面に楼閣山水図と思われる陽刻が彫られる。内外面とも煤が付着する。49は青磁の高台部で、破面の一部が打ち欠かれている可能性がある。50は焙烙。51は真焼きの常滑製品の火鉢で、内面上部にパッチ状に煤が付着しており、口縁端部には磨滅がみられる。52は薄い灰釉が施された土器片で、側面全体が磨面となる。53は須恵器甌の把手で、54・55は東濃製品山茶碗、56は須恵器高坏脚となる。

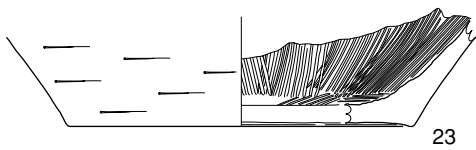


第 19 图 B 区 SX03 · SU01 一括 (1) (S=1/4)

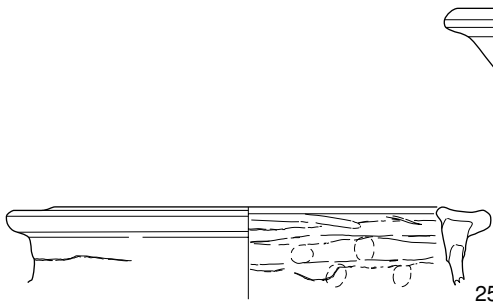
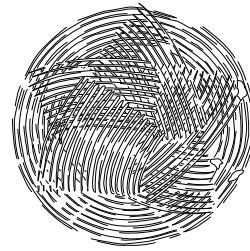


22

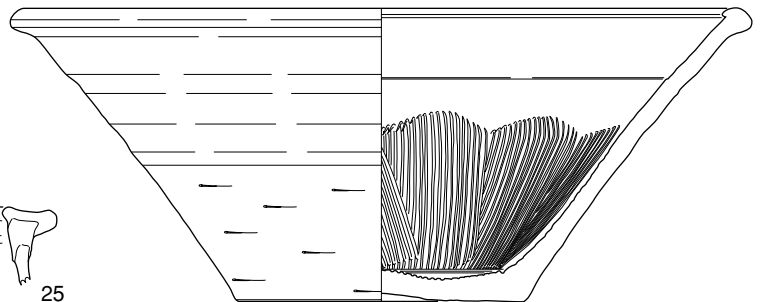
22~26 : B区SX03・SU01一括



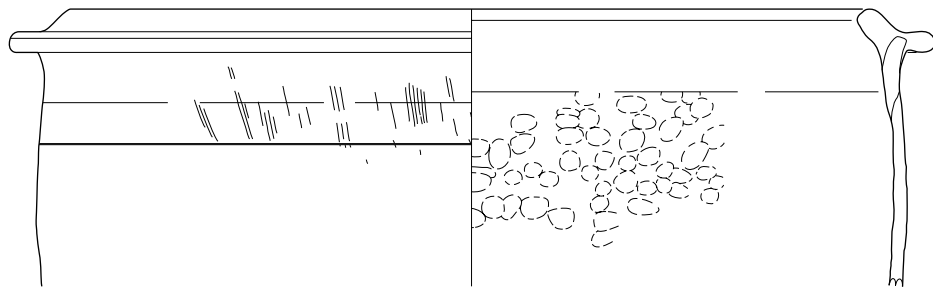
23



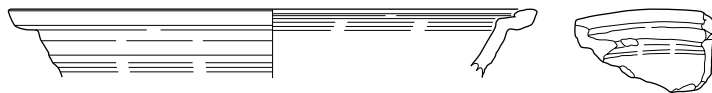
25



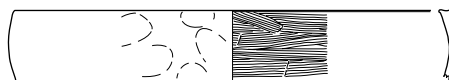
24



26



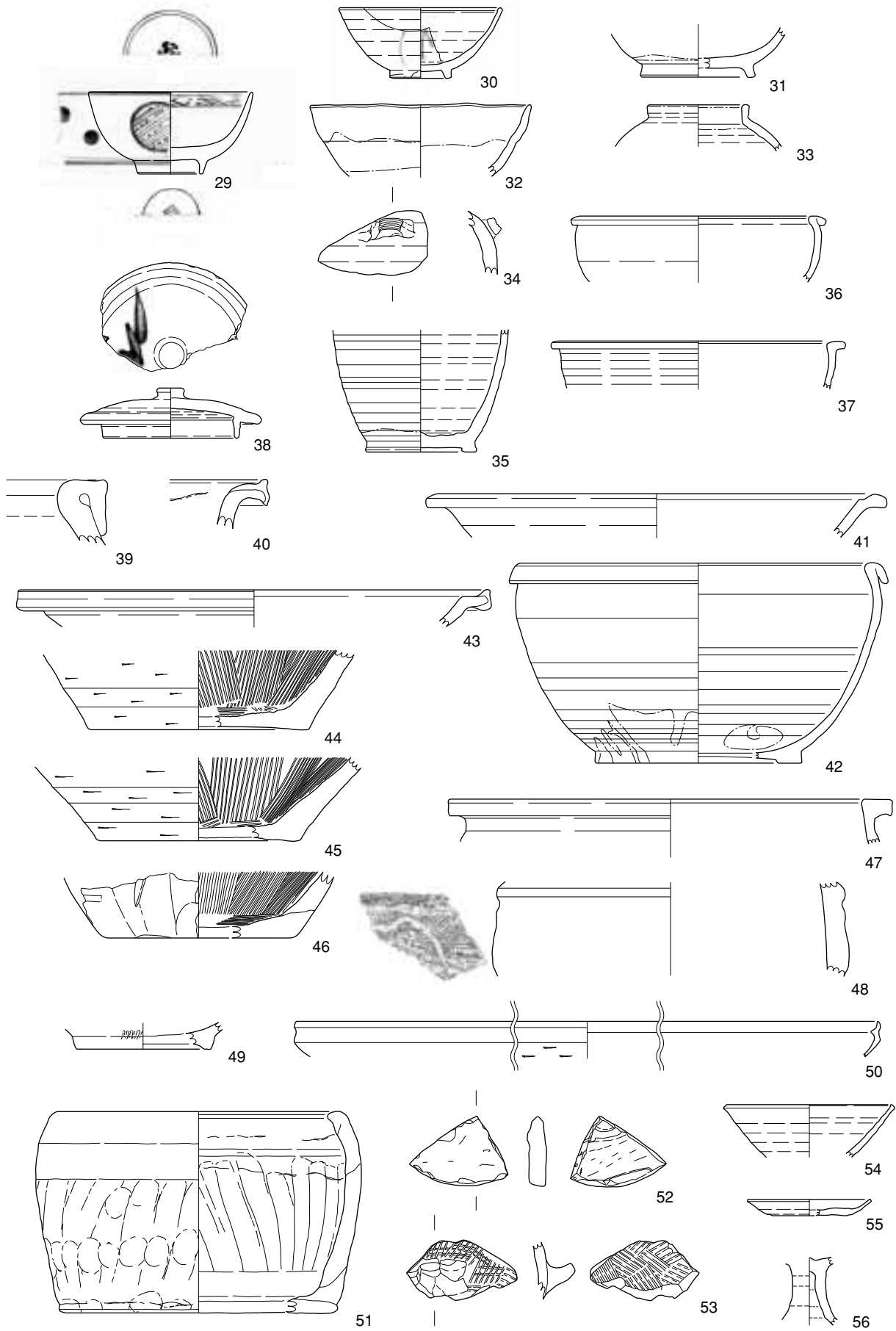
27



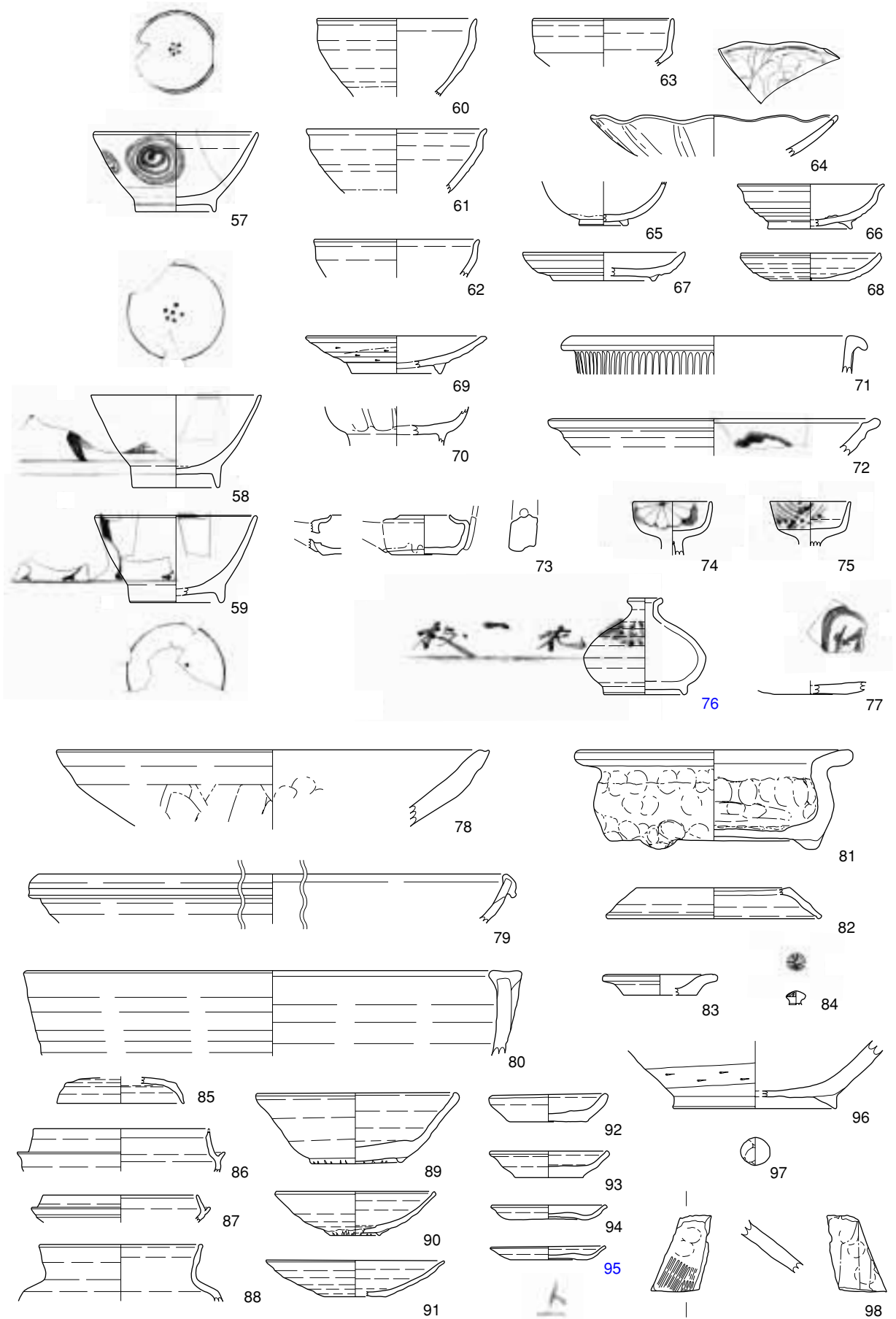
28

27・28 : B区SX03・SU02一括

第20図 B区SX03・SU01一括(2)・SU02一括 (25・26はS=1/6、その他はS=1/4)



第 21 图 C区 SX03 · SU01 一括 (S=1/4)



第22图 B·C区SX03 (S=1/4)

B・C区 SX03 57～98はSX03より出土した遺物である。

57～59は瀬戸・美濃製品の広東椀で、57は馬の目文と五弁花文、58は笹文?と五弁花文、59はねじり花文と五弁花文?がそれぞれ呉須によって描かれている。60～62は鉄釉が施された天目椀。63は瀬戸製品の腰折椀で、淡黄色の灰釉が掛けられている。64は稜花鉢で、外面は蓮弁状になり、わずかに呉須の痕跡がみられる。内面は赤・金絵で花文が施されるが、剥落が激しい。瀬戸製品。65は瀬戸・美濃製品の丸椀で、体部外面に灰釉が施される。66は瀬戸・美濃製品の端反皿で、内面と体部外面に灰釉が施される。67は志野釉が掛けられる丸皿。瀬戸・美濃製品。68は瀬戸・美濃製品の灯明皿で、鉄釉がハケ状工具で塗布される。69は内面と体部上半に灰釉が施される瀬戸・美濃製品の丸椀で、時期は17～18世紀前半になる。70は青磁椀。外面に蓮弁文をもつ。また内面にも凹凸がみられるが、文様であるかどうかは不明である。71は瀬戸・美濃製品の瓶掛口縁で、上端面には磨減がみられる。頸部外面に蓮弁文が施され、内外面とも灰釉が掛けられる。72は折縁鉢で、内面に鉄釉で文様が描かれる。瀬戸・美濃製品。73は信楽製品の可能性がある乗燭で、灰釉が施されている。74は肥前製品の仏飯器で、呉須による菊花文が描かれる。75は瀬戸製品の仏飯器で、呉須による幾何文が描かれる。76は瀬戸・美濃製品の髪油壺。灰釉が施され、外面に「長恨歌」の中で楊貴妃を表す「利花一枝」の文字が呉須で書かれる。77は青磁椀または皿で、内底面に沈線による文様が描かれる。78は真焼きで、常滑製品の蓋になるか? 79は鉄釉が施された瀬戸製品の播鉢。時期は16世紀代になる。80は瀬戸製品の半胴で、鉄釉が掛けられている。81は常滑製品の火桶。真焼きで焼き締められており、内面には被熱痕や煤が顕著にみられる。また口縁内面の平坦面には激しい磨減痕が残っている。82は灰釉が施される瀬戸製品の稜皿になるか。83はわずかに灰かぶり状になる無釉の蓋。84は鉄釉が施され、沈線による文様が描かれている。蓋の摘み部か。

85～88・98は須恵器。84は壺蓋、86は6世紀中頃の坏で、87は7世紀代の同じく坏、88は7世紀後半の壺になる。98は壺類の頸から肩部にかけての一部か。内面に垂下する黒褐色の釉がみられる。

89～96は中世陶器。89・92・93は南部系山茶椀の椀と小皿で、13世紀前半。90・91・94・95は北部系山茶椀の椀と小皿で、15世紀前半になる。96は内面に磨減痕がみられる鉢、97は陶丸。

(2) B区遺構内出土

B区 SK05 99は腰折椀で、灰釉が施され外面に鉄釉絵が描かれる。100・101は灰釉が施された平椀と稜皿。102も灰釉が掛けられた捏鉢で、煤・有機物が付着する。103・104は鉄釉の水甕と天目茶椀、105は灰釉の蓋付壺。106～109は焙烙または内耳鍋になる。

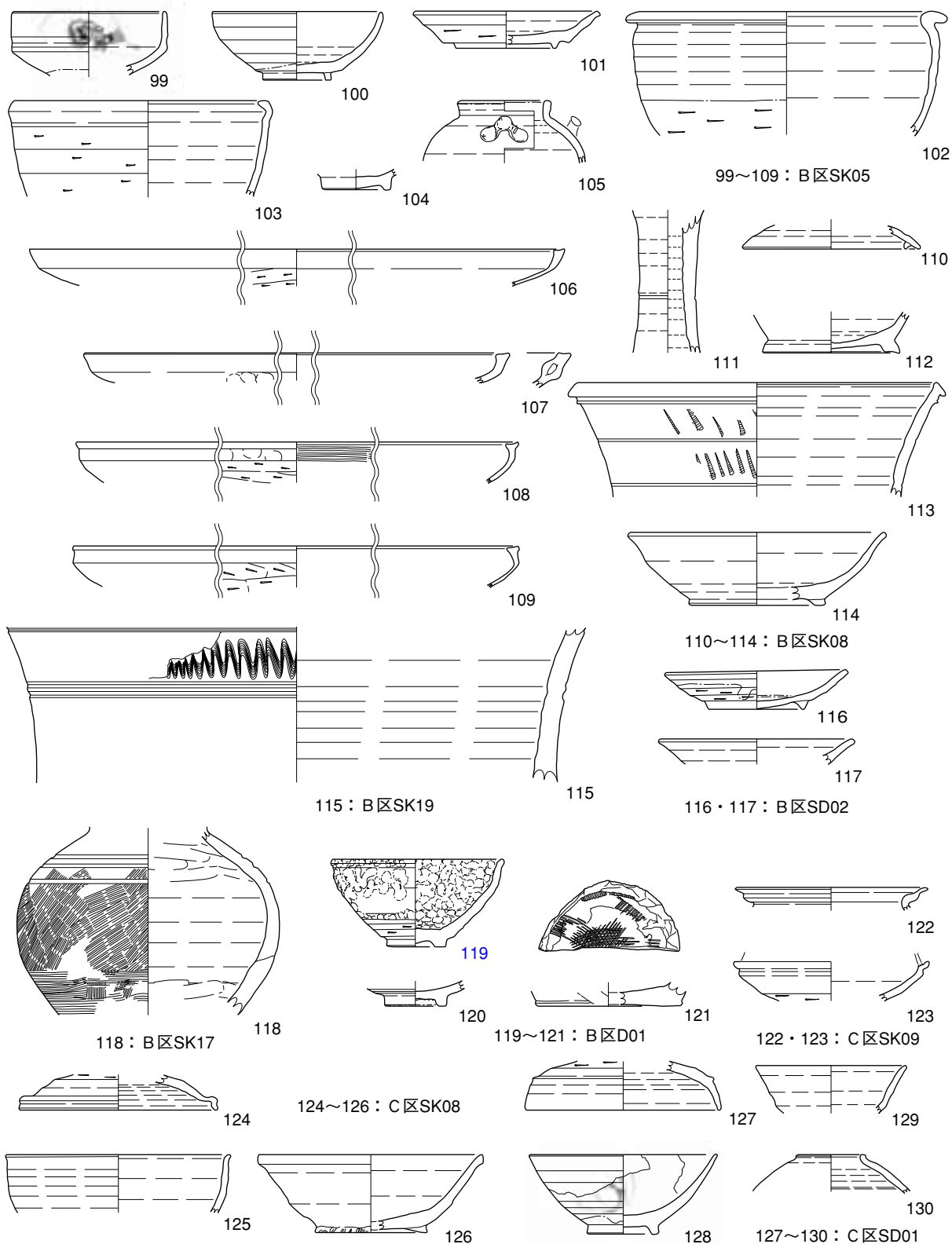
B区 SK08 110～113は須恵器で、110は返しのある蓋、111は高坏脚部、112は8世紀後半の長頸壺底部、113はイタまたはクシによる連続刺突が施される甕口頸部になる。114は12世紀後葉～13世紀前半の南部系山茶椀で、内底面が磨減している。

B区 SK17 118は6世紀以前と思われる脚付壺である。外面にはタタキ成形後横位のハケ調整が行われ、肩部にやや太い3条の沈線が引かれる。

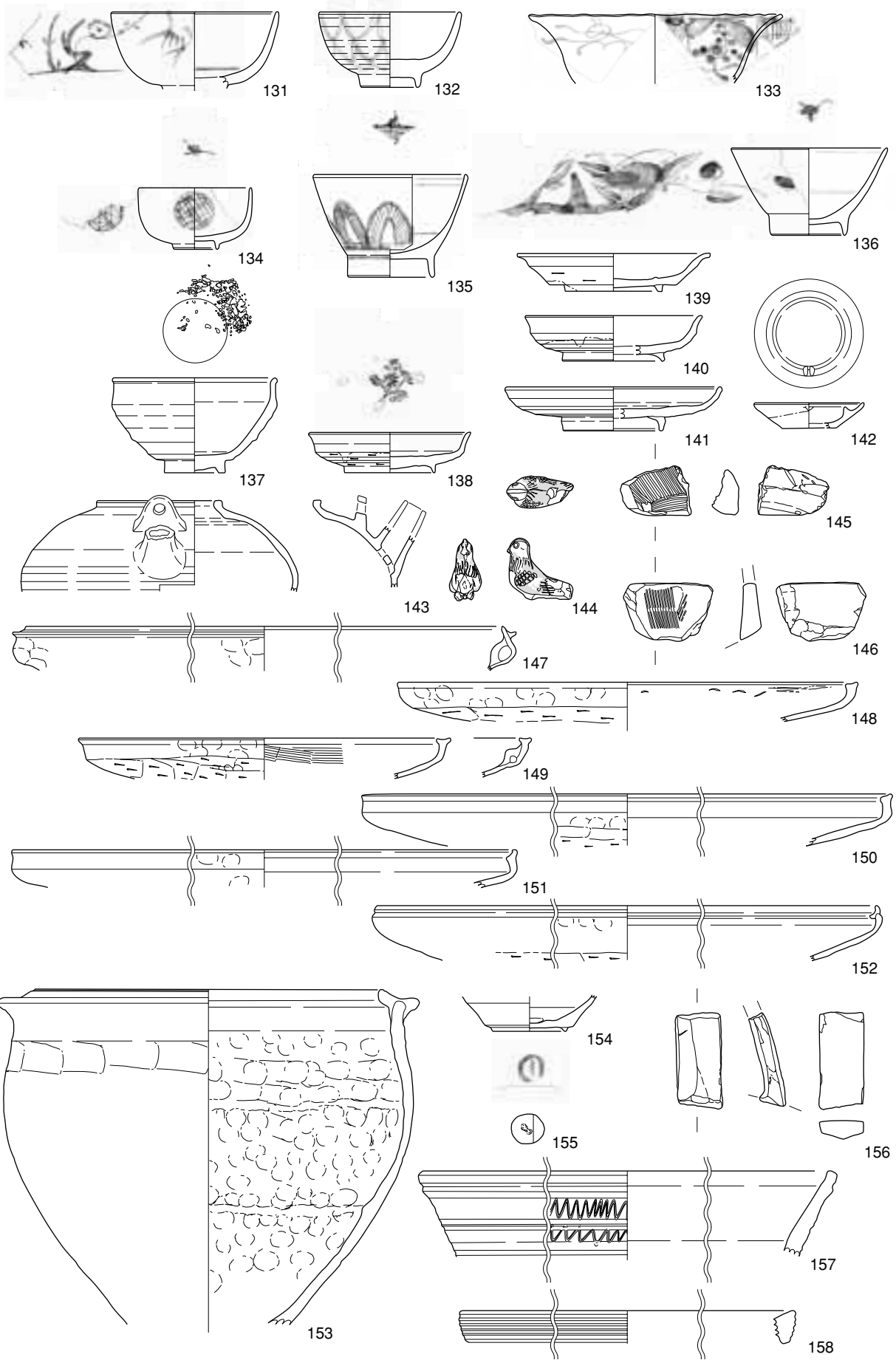
B区 SK19 115は須恵器で、外面にクシによる横線と波状文が描かれる甕頸部になる。

B区 SD01 119は下層、120・121は中層より出土している。119は16世紀後半の天目椀で、外面には錆釉後に鉄釉が掛けられている。鉄釉は焼成時に火膨れし、全体に凸凹がみられる。また内底面には煤・有機物が付着している。120は瀬戸製品の椀で、灰釉が施された後鉄釉で横線が引かれる。121は播鉢の底部で、内底面はクシ目が消えるぐらいに磨減している。

B区 SD02 116・117は瀬戸・美濃製品の丸椀で、両者とも灰釉が掛けられている。時期は18世紀



第 23 図 B・C区遺構内出土 (S=1/4)



第24図 B・C区遺構外出土 (153は S=1/6、その他は S=1/4)

代になる可能性が高い。

(3) C区遺構内出土

C区 SK08 124・125は須恵器で、124は8世紀後半～9世紀初頭の平頂蓋と考えられ、125は8世紀後半の椀になる。126は13世紀前半の南部系山茶碗。

C区 SK09 122はS字状口縁台付甕のC類。123は須恵器坏身。

C区 SD01 127・129は8世紀後半の須恵器で、127は坏蓋、129は椀になる。128・130は瀬戸製品で、128は鉄釉で柳文が描かれた18世紀の平椀、130は18世紀後半～19世紀前半の瓶類になる。

(4) B・C区遺構外出土

131は瀬戸製品の丸椀で、呉須により梅樹・笹（松竹梅）文が描かれる。132は肥前製品の丸椀で、呉須による二重網目文が描かれる。133～141は瀬戸製品である。133の稜花鉢は、呉須により外面に宝珠文、内面には果実？文が描かれる。134の丸椀には、呉須により外面に丸文、内底面に花卉文が描かれる。135・136は広東椀で、135には呉須により蓮弁文と波と舟文、136には草花文と花卉文が描かれる。137は体部下半が露胎で、その上に鉄釉が掛けられている天目椀で、内底面から側面にかけて、滴状になった白色の釉がみられる。138～140は端反皿、141は丸皿で、それぞれ灰釉が施されている。また138の内底面には鉄釉摺絵で花樹文が描かれる。142は灰釉が掛けられた灯臺。信楽製品の可能性がある。143は外面が灰釉、内面に錆釉が施された瀬戸・美濃製品の土瓶。144も瀬戸・美濃製品で、型を用いて製作されたミニチュアの鳥になる。外面は、灰釉が掛け分けられている。145・146は鉄釉が施された播鉢の底部付近の破片で、側面から外面にかけて磨痕がある。147～152は焙烙になる。153は常滑製品の赤焼きの甕。内面中位から下位にかけて有機物が付着する。

154は13世紀中頃の南部系山茶碗底部で、外面底部に「の」字が墨書される。155は陶丸。

156・157は須恵器。156は9世紀代の平瓶の把手、157は7世紀代の甕口頸部になる。

158は古墳時代初頭の太頸壺で、口縁端部外面には凹線が巡り、赤彩が施される。また内面にも赤彩されていた可能性がある。

(5) D・E・F区遺構出土

D区 SB01 159は須恵器で、高坏または脚付椀の坏部になると思われ、2条の沈線が巡る。

D区 SB02 160はS字状口縁台付甕D類、161は甕脚台部になる。162は須恵器坏身、171は蓋になる。

D区 SB05 172は須恵器の高坏脚部で、裾部外面端が凹面を呈する。

D区 SK28 175は灯明皿で灰釉が施される。176は灰釉が掛けられる平椀で、呉須絵が描かれる。177は鉄釉が施される播鉢。

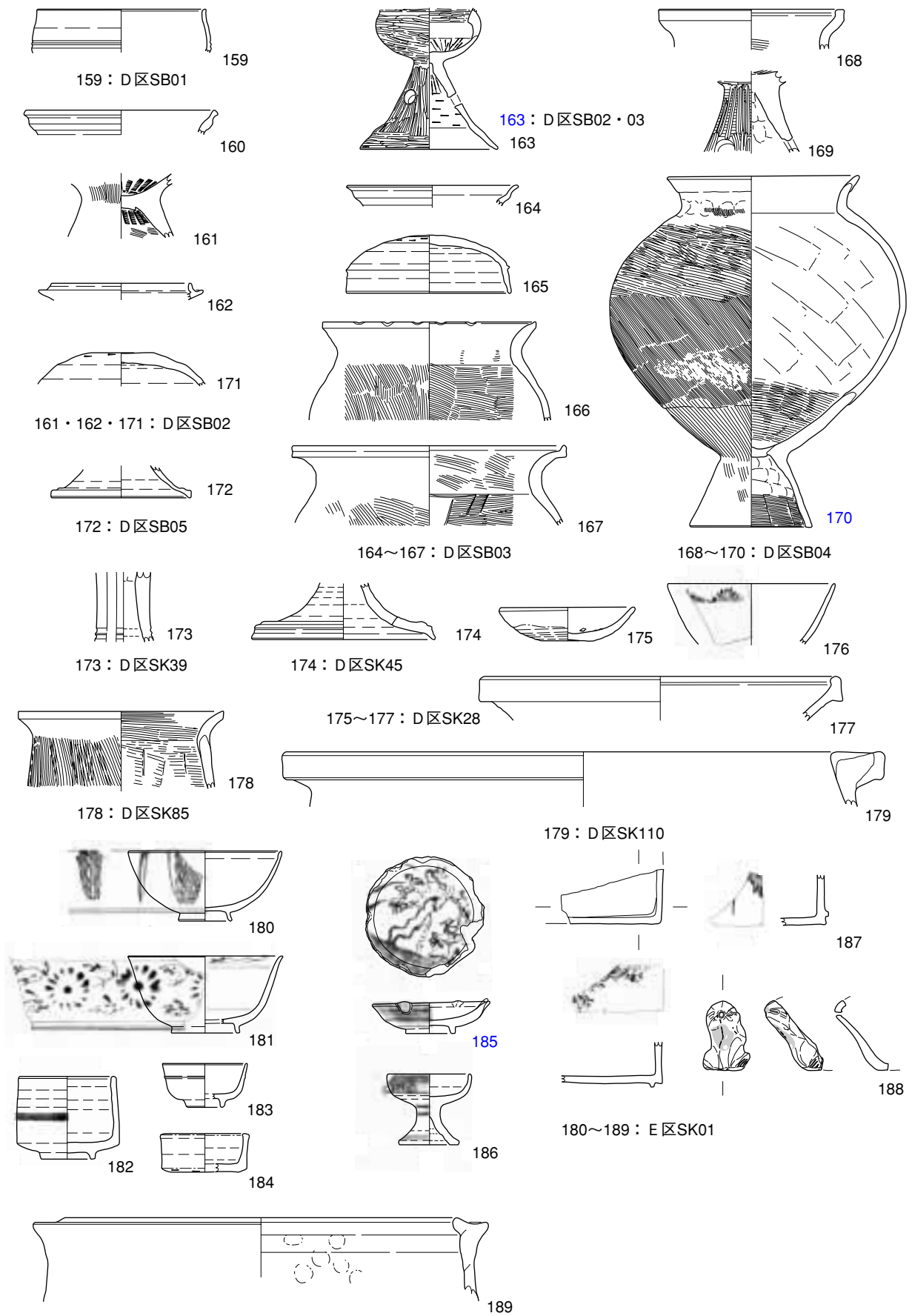
D区 SK39 173は須恵器の高坏脚部で、3方向に透し孔があり、2条の沈線が巡る。

D区 SK45 174は須恵器の高坏脚部で、透し孔は確認できるが、個数は不明である。時期は7世紀前半になる。

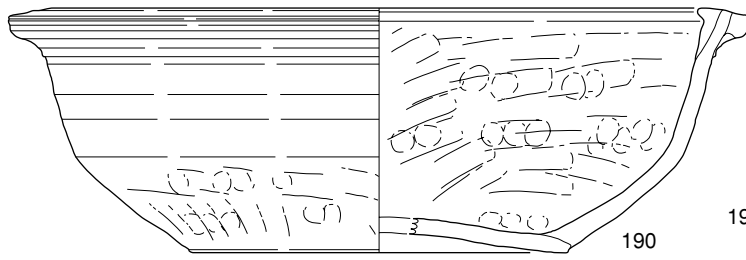
D区 SK85 178は口縁端部が垂直な面をもつ長胴甕で、内外面ともハケ調整される。

D区 SK110 179は常滑製品の赤焼きの甕で、内外面とも有機物が付着している。

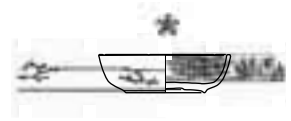
E区 SB02 163は脚部がSB02、壺部がSB03の埋土上層から出土している。器種は東海系内彎土器の脚付壺となり、脚裾部端がわずかに内彎する。透し孔は3方向に穿たれ、外面と頸部内面はヘラミガキ、体部内面はイタナデ、脚部内面はヘラケズリ調整されている。



第25図 D・E区遺構内出土(1) (179・189はS=1/6、その他はS=1/4)

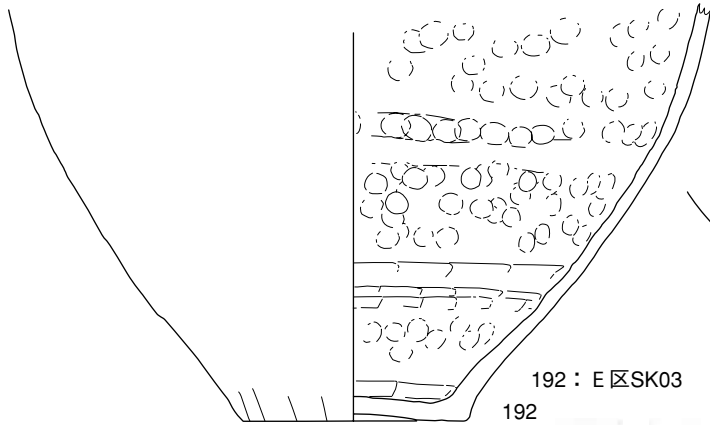


190



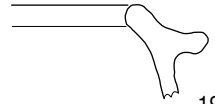
191

190・191 : E区SK02

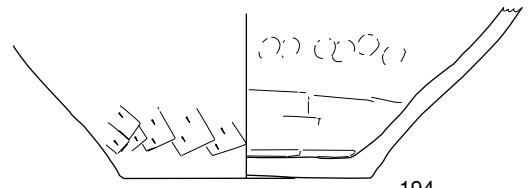


192

192 : E区SK03

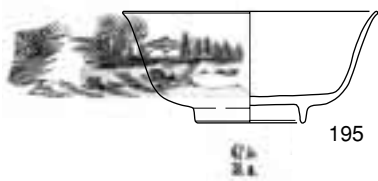


193

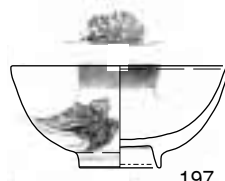


194

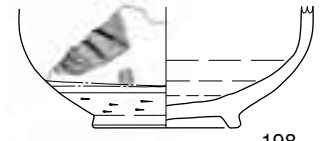
193・194 : E区SK04



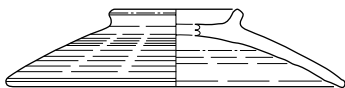
195



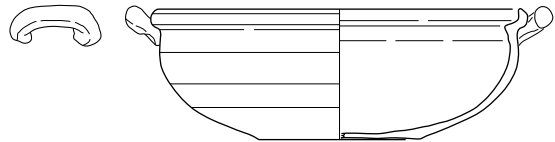
197



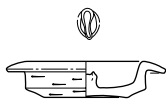
198



196



199



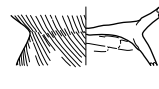
200

195~200 : E区SK05

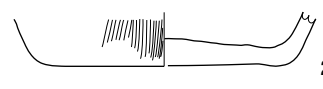


201

201 : E区SK31



203



204



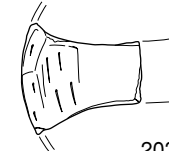
202

202 : E区SK71



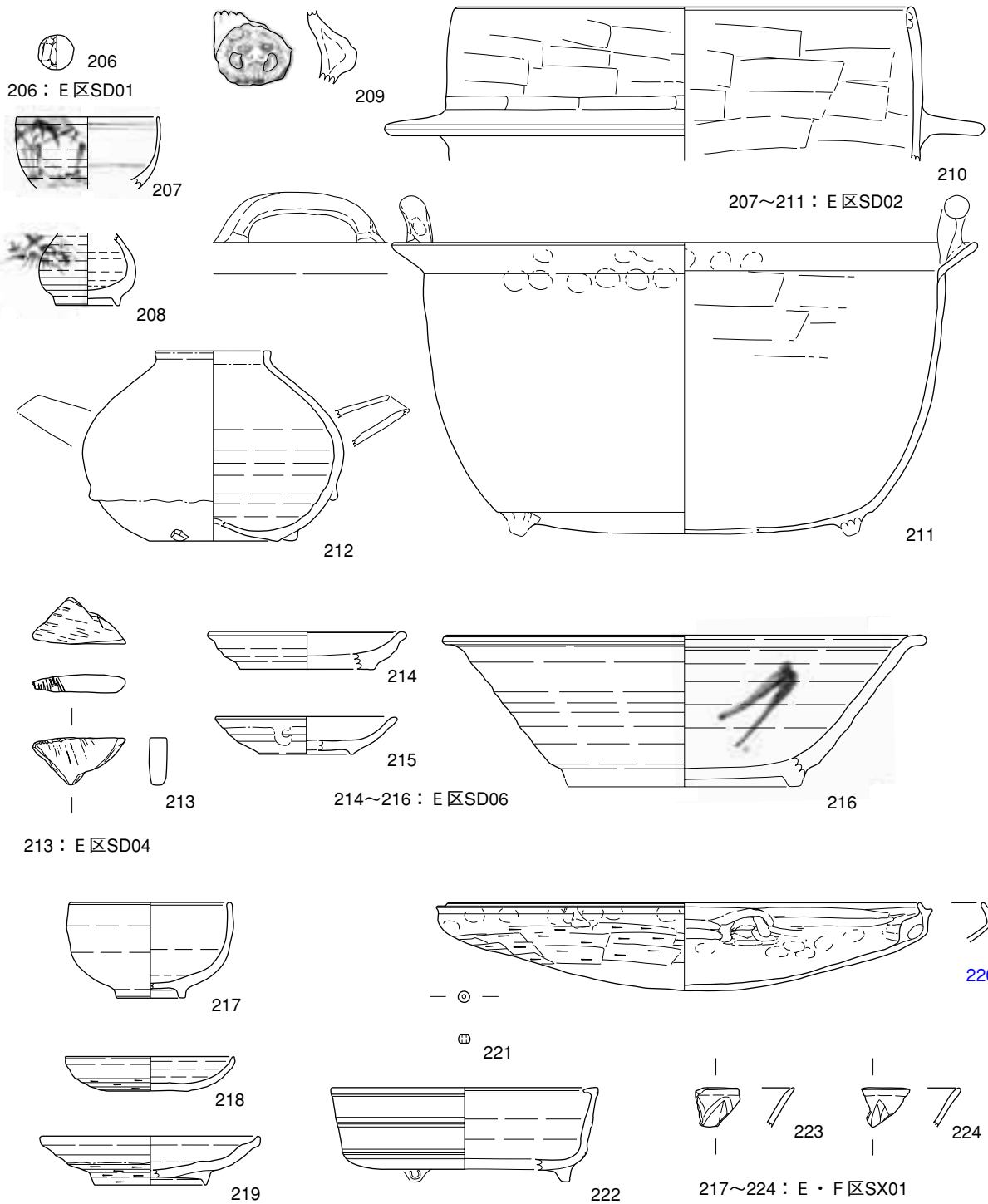
205

205 : E区SK119



203・204 : E区SK117

第26図 D・E区遺構内出土(2) (190・192~194はS=1/6、その他はS=1/4)



第27図 D・E区遺構内出土(3) (S=1/4)

E区 SB03 164はS字状口縁台付甕のC類。165は坏蓋で、口縁部がやや広がりながら垂下し、端部内面は凹面をなし、端面は丸い。時期は7世紀前半になる。166・167は、ハケ調整される長胴甕になる。166の口縁端上位に不規則な凹みがみられ、167の口縁端部は上方向につまみ上げられる。

E区 SB04 168は受口状口縁甕。169は高坏脚部で、外面上位の横線施文後にヘラミガキが施されている。170は単純口縁甕になる。口縁外面には、粘土紐巻き上げで生じた段差がわずかにみられる。体部外面は細かいハケと粗いハケによる調整、内面はイタナデと粗いハケ調整が施される。脚台部は台形を呈し、端面が平坦面となる。外面はハケ後ナデ調整、内面はハケ調整がなされる。

E区 SK01 180～185・187は瀬戸製品になる。180の平椀は呉須により抽象文が、181の端反椀も呉須で花唐草文が描かれる。182の筒椀は灰釉施釉後に外面に鉄釉で横線が描かれる。183は白磁で、坏部外面中位に突線が巡る。184は灰釉が施された餌鉢。184は6方向に指押さえがある稜花皿で、灰釉施釉後緑色釉が内外面1/5程に掛けられ、鉄釉で楼閣山水文と思われる文様が描かれる。187は呉須で花文が描かれた水盤。186は肥前製品の仏飯器で、灰釉施釉後褐色・黒色・青色・黄色釉で文様が描かれる。188も肥前製品と思われる磁器の人形で、鉄釉が一部施される。動物形か。189は常滑製品の赤焼きの甕になる。

E区 SK02 190は常滑製品の赤焼きの鉢。191は肥前製品の丸椀で、唐草・竹林山水?・手描き五弁花文が呉須で描かれる。

E区 SK03 192は常滑製品の赤焼きの甕。

E区 SK04 193・194は同一の個体と考えられる常滑製品の赤焼の甕。

E区 SK05 195はSK05の上層と曲物内から、196は中層から、197～200は曲物内から出土しており、全て瀬戸製品になる。195の端反椀は呉須により楼閣山水文と外底面に「盛来園製」?が描かれる。197の丸椀も呉須で蝶文と花文?が描かれる。198の丸鉢は外面に、鉄釉施釉後ほぼ同じ部位に緑色の灰釉を掛け、その後白色釉で葉文を描いている。196は環状の摘みが付く蓋で、灰釉が掛けられる。200は摘み上げて折り返した摘みが付く蓋で、上面部分に鉄釉が施される。199は鉄釉が施された鍋で、横位に半環状の把手が2ヶ所に付く。体部外面には煤が多量に付着する。

E区 SK31 201は古墳時代の長胴甕。

E区 SK71 202は須恵器の高坏脚部。

E区 SK117 203はS字状口縁台付甕の脚台・体部で、底面には砂粒・雲母を多く含む粘土が充填されている。204は甑で、底部に2ヶ所の孔をもつと思われる。

E区 SK119 205はユビ押圧・ナデで成形された甑の把手

E区 SD01 206は陶丸。

E区 SD02 207～209は瀬戸製品。207はSD02とSD03に分かれて出土した丸椀で、呉須による笹文が描かれる。208の小型徳利も呉須で笹(松竹梅)文が描かれている。209は瓶掛に附属する獅子面で、外面には緑色釉、内面には鉄釉が掛けられている。210・211は瓦質土器になる。210の羽釜はイタナデ調整され、外面鏝部下位に煤が多量に付着している。211の鍋は屈曲した口縁内面に半環状の把手が付くが、個数は不明である。また底部端には脚部が付くがこれも個数が不明である。外面全体に多量の煤が付着する。212は外面には青緑色釉が、内面には鉄釉ハケが施された急須で、瀬戸製品と思われる。

E区 SD04 213は内外面及び側面に研磨・削痕がみられる土器片で、須恵器と思われる。

E区 SD06 214～216は瀬戸製品。214は志野釉が掛かる丸皿。215は外面に煤が多量に付着する灯明皿で、灰釉が施される。216は灰釉が施される折縁皿で、内面に鉄釉で黍文が描かれる。

E・F区 SX01 217～266は、E区の南側からF区の北側に広がる緩やかな落ち込みから出土している。そのため資料的なまとまりには欠ける遺物群となる。

217～224は中世から江戸時代の遺物である。219・222は瀬戸・美濃製品。217は灰釉が施された丸椀、218は鉄釉が施された灯明皿、219は灰釉が施された折縁皿になる。222は青磁の香炉で、外面底部にUまたはO字状の沈線をもつ脚部が付くが、個数は不明である。220の焙烙は3方向に内耳をもつ。221は陶器の小玉。223・224は輸入青磁椀で、蓮弁文が陰刻される。

225～236は古墳時代初頭の遺物である。225・226はS字状口縁台付甕で、225はB類、226はC類になる。227は宇田型甕。228・229は受口状口縁甕で、口縁端部と肩部に刺突が施される。230は受口状口縁鉢で、内面がヘラケズリ調整される。231は有段口縁をもつ太頸壺で、ヘラミガキ調整される。232は壺の脚台部か。233～235は高坏坏部で、236は甕脚台部になる。

237～262は古墳時代から古代の遺物になり、237～249・258・261・262は陶器、250～257・259・260は土師器である。237～239の坏身は237が6世紀中葉～後半、239が7世紀前半、238が7世紀中葉～後半になる。240の坏身は、7世紀後半。241・243の蓋は、241が8世紀前葉で243が8世紀後葉～9世紀前葉になる。242・244・246の椀は8世紀前葉になり、244の外底面にはヘラ記号がみられる。245・247は8世紀後半の椀。248は長頸壺。249は10世紀後半の灰釉皿。258は鍋または甑の横位に付く半環状把手で、261・262は甑となる。250～252は伊勢型長胴甕の口縁部で、253～257は濃尾型長胴甕の口縁・底部になる。259・260は甑の把手。

263～266は中世陶器。263・264北部系の山茶椀で14世紀中葉～後半、265の南部系小皿で12世紀後半になる。266は鉢の底部で、264の山茶椀と接して出土している。

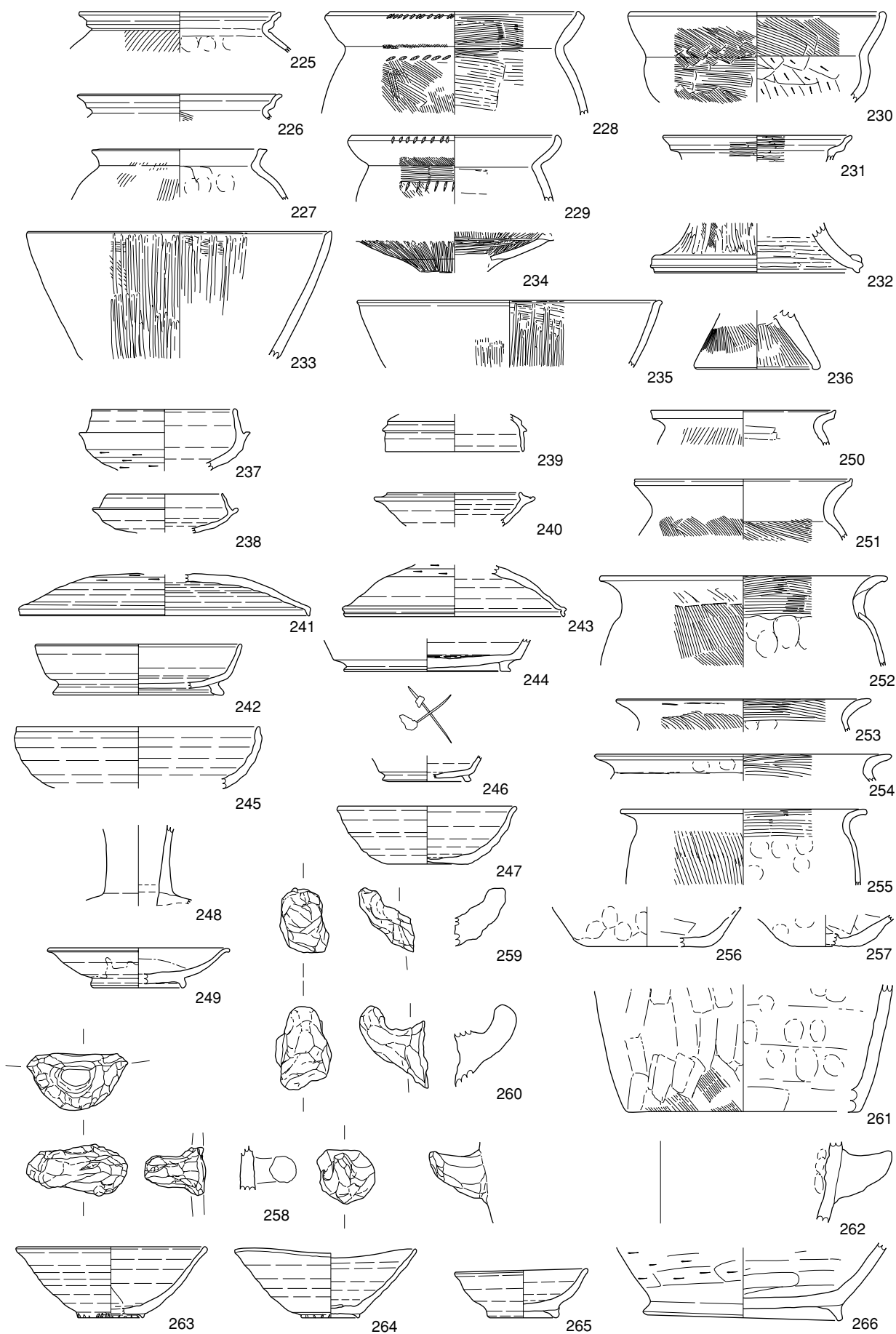
F区 SU01 F区SU01では瓦が多量に出土し、瓦間にはさまるように陶磁器がみついている。267～276は瀬戸・美濃製品になると思われる。267の端反椀は、呉須プリントにより青海波・花唐草文などが描かれる。明治期以降のものか。268の蓋は呉須で笹・蜻蛉文が、269の丸椀には呉須で抽象文が描かれる。270は灰釉が施された灯明皿、271は呉須による型紙摺絵になる。時期は明治期以降になる。272の水指・甕は、外面には緑色釉内面には灰釉が施され、龍文が陽刻される。464は灰釉が掛けられる丸鉢。274の徳利は鉄釉が施される。275の火鉢は灰釉と緑色釉が、276の挿鉢は鉄釉が掛けられる。277は肥前製品の丸椀で、呉須により唐草・竹林文が描かれ、底部外面にも呉須で「富?貴長春」が書かれている。278・281は常滑製品の赤焼きの甕と火桶。280は棧瓦で、上面と側面が研磨される。

F区 SD01 282は体部外面にハケ調整がみられる土師器羽釜。

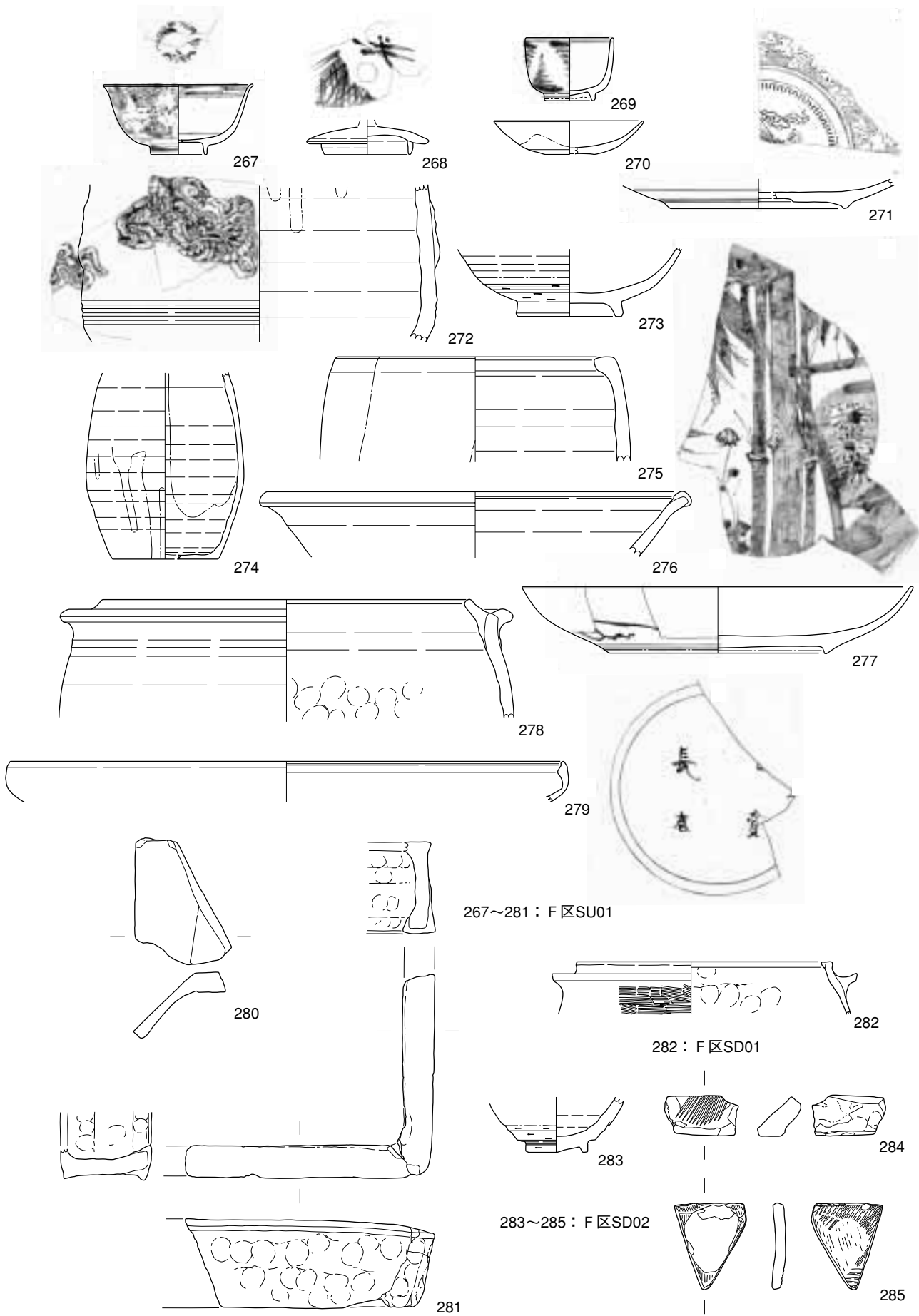
F区 SD02 283は鉄釉が施された天目椀。284は挿鉢の底部付近片で、上下側面が研磨される。285はタタキが施された須恵器片で、内外面と側面全体が研磨される。

F区 SK01～04 286～290は、一定の間隔をおいて正位の状態で出土した、常滑製品の赤焼きの甕である。290の下体部には焼成後に開けられた孔があるが、人為的なものである可能性がある。またその孔の右側には、横位に「ツカ」または「川力」と墨書されている。291は290内に落ち込んだ状態で出土した植木鉢。

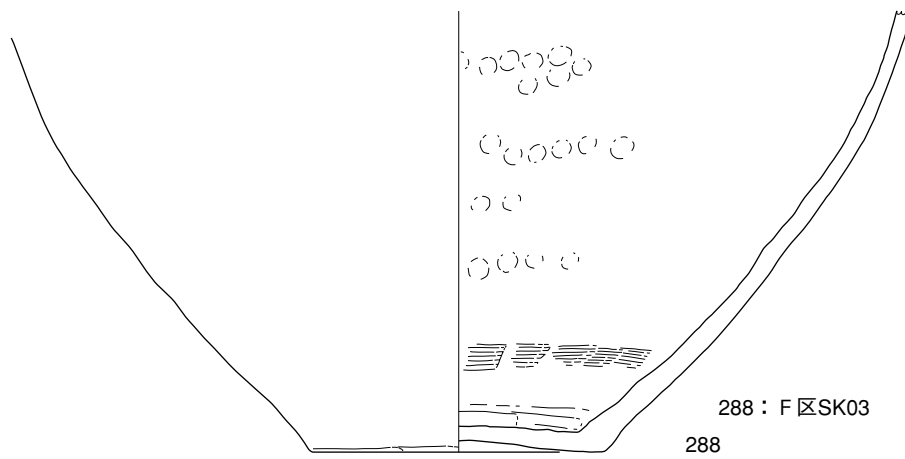
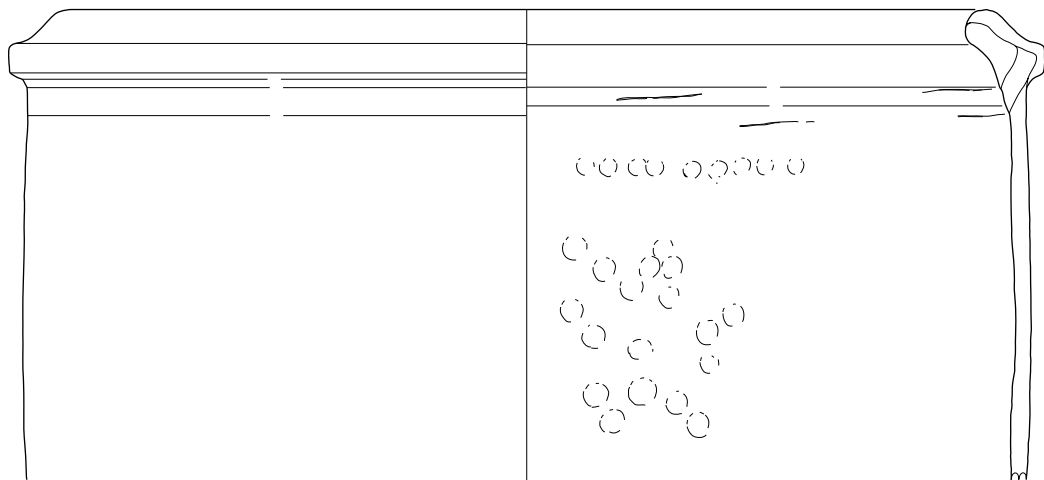
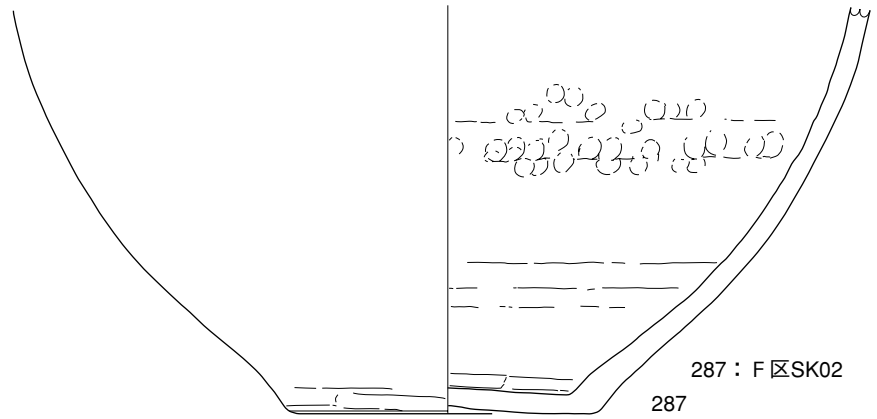
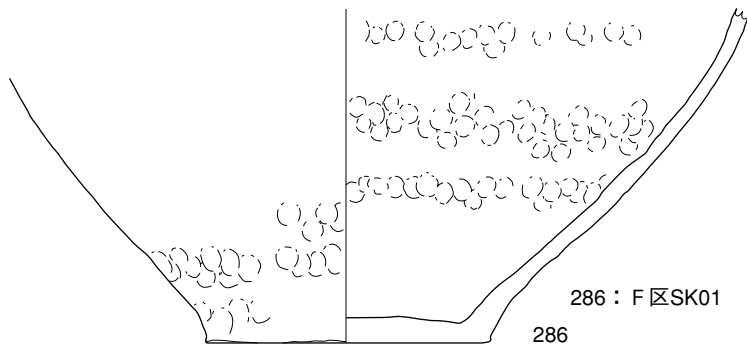
F区 SK07 292～308は瀬戸・美濃製品の可能性が高いものである。292は呉須による山水文?が描かれる丸椀で、293の皿の内底面には五弁花が鉄釉型紙摺絵で描かれる。295～297は灰釉が施された丸皿になる。298は4方向に脚が付く、鉄釉の香炉か。299は鉄釉が施された灯籠、301は灰釉が施された丸鉢になる。302～308は鉄釉の挿鉢。この中で304の口縁部はわずかに片口状を呈し、308は内面から破面にまで厚く、305307は破面に煤・有機物が付着する。309も鉄釉の挿鉢底部片で



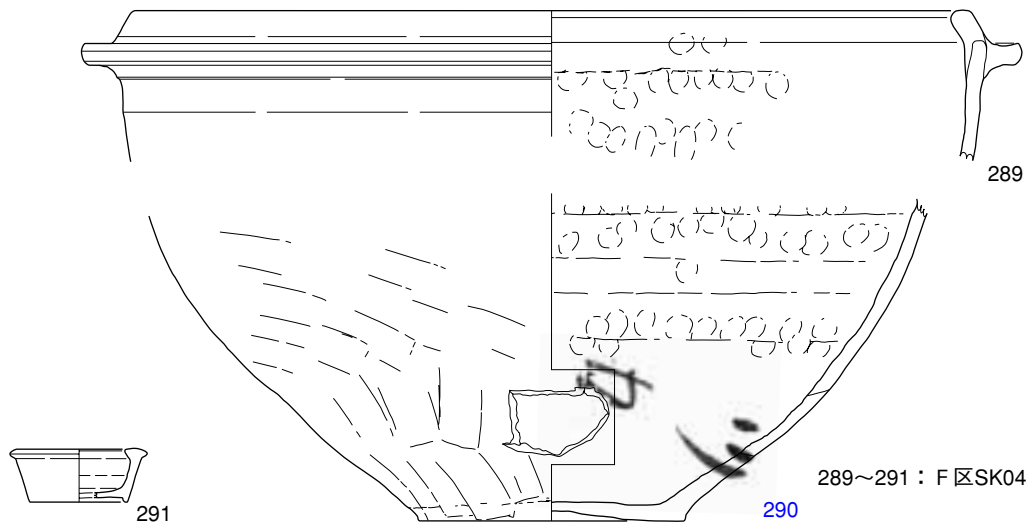
第28图 E·F区SX01 (S=1/4)



第29図 F区遺構内出土(1) (278はS=1/6、その他はS=1/4)



第 30 图 F 区遺構内出土 (2) (S=1/6)



第31図 F区遺構内出土(3) (291はS=1/4、その他はS=1/6)

側面が研磨されている。

312～314は須恵器。312・313は坏身で、313は美濃製品の可能性があり、時期は7世紀中葉～後半になる。314は浄瓶の注口部。

F区SK16 316は8世紀後半の長頸瓶の底部。

F区SK22 315は坏蓋で、時期は7世紀中葉～後半になる。

F区ST09 317は7世紀後半の須恵器高坏脚部で、319は縦位の把手をもつ7世紀～8世紀前半の壺または甕になる。318は灰釉陶器の長頸壺。

(6) D・E・F・G a・G b区遺構外出土

D・E区 320・321は同一のプリント版により製作された丸椀で、呉須により窓絵山水楼閣・唐人圀碁文などが描かれる。322は呉須で瓢筆文が描かれる。320～322とも瀬戸製品で、明治期以降のものになる。323・324も瀬戸製品で、白濁釉・灰緑色釉が掛けられる。325・326は肥前製品のそば猪口で、呉須により草花文が描かれる。327・328・332・333・334は瀬戸製品の丸皿。327は白濁釉、328は呉須による梅樹文、332は呉須絵、333・334は呉須による山水楼閣文が描かれる。329は肥前製品の丸椀。330の丸椀には、灰釉と淡緑色釉が施される。331は瀬戸製品の香炉で、3方向に脚が付く。335・336とも灰釉が施された、瀬戸製品のひょうそくになる。337は灰釉後に鉄釉で波状・列点文が描かれた把手。338・339は青磁椀。340は鉄釉が施された卸皿。341～343は瀬戸製品で、341の折縁鉢は内面に鉄釉絵が、342の捏鉢は灰釉が、343の搦鉢は鉄釉が施される。344は常滑製品赤焼きのくどで、片側に開口部が設けられると思われるが、出土片では確認できなかった。底部端はユビ押圧により波状にされ、内面の片側にはパッチ状に煤が付着している。345も常滑製品赤焼きで、中央に孔をもつ蓋になる。内面には煤が付着する。346～350は北部系山茶碗・小皿で、時期は13世紀後半～14世紀になる。351は10世紀後半の灰釉陶器椀。352～354・357・358は須恵器で、352は7世紀代の坏蓋、353は7世紀前半の坏身、354は4方向に2段の透し孔をもつ6世紀代の装飾器台、357・358の蓋のうち、357は8世紀前半になる。355・356は甕で、355は多孔をもつ底部になる。359・360は長胴甕。

F・G a・G b区 363の丸椀は、外面には淡黄褐色釉と白濁釉が施された後鉄釉と緑色釉で文様が描かれる。また筋彫りで菊文が彫られる。内面は淡黄褐色釉と白濁釉が渦状に掛けられる。時期は明治期以降になる。364は鉄釉が掛けられる天目椀。365は素焼きの鍋で、外面には煤が付着する。366は鉄釉型紙摺絵で五弁花が描かれる丸皿、瀬戸製品。367は緑色の灰釉が掛かる菊皿で、時期は16世紀代になる。368～370は青磁椀。371は紅皿で、372はミニチュアの竈蓋になるか。373～375は手捏ねで成形された土師皿。376は焼き締め陶器で、水盤になるか。

377は13世紀中葉～後半の山茶碗で、378～380は陶丸になる。

381～391は須恵器。381は返しのある蓋で、時期は7世紀中葉～後半になる。383は8世紀前葉、384は8世紀後半の坏。385は7世紀代の陶臼で、内面に4孔、外面は降灰で個数は不明であるが複数の、先端が尖った工具での刺突がみられる。386も7世紀代の鉢または壺で、肩部に1条の沈線が巡る。382・387～389は高坏。時期は、382は7世紀代、2段の透し孔が3方向に開けられる387は7世紀中葉～後半、388・389は7世紀後葉～8世紀前葉になる。390・391は高盤で、390は8世紀中葉～後半、391は8世紀後葉以降になる。また390の内面には粘土で補填された小孔がある。

392～397は土師器。392は粗いハケ調整、393はナデ調整の施された長胴甕。394・395は同一個体の可能性が高いパレススタイル壺の体部片で、赤彩が施されている。396はS字状口縁台付甕C類。397は突帯と1条の沈線が巡る樽状の土器片で、細かい砂を含む胎土で、橙色を呈する。器種・時期ともに不明である。

(7) G a・G b区遺構出土

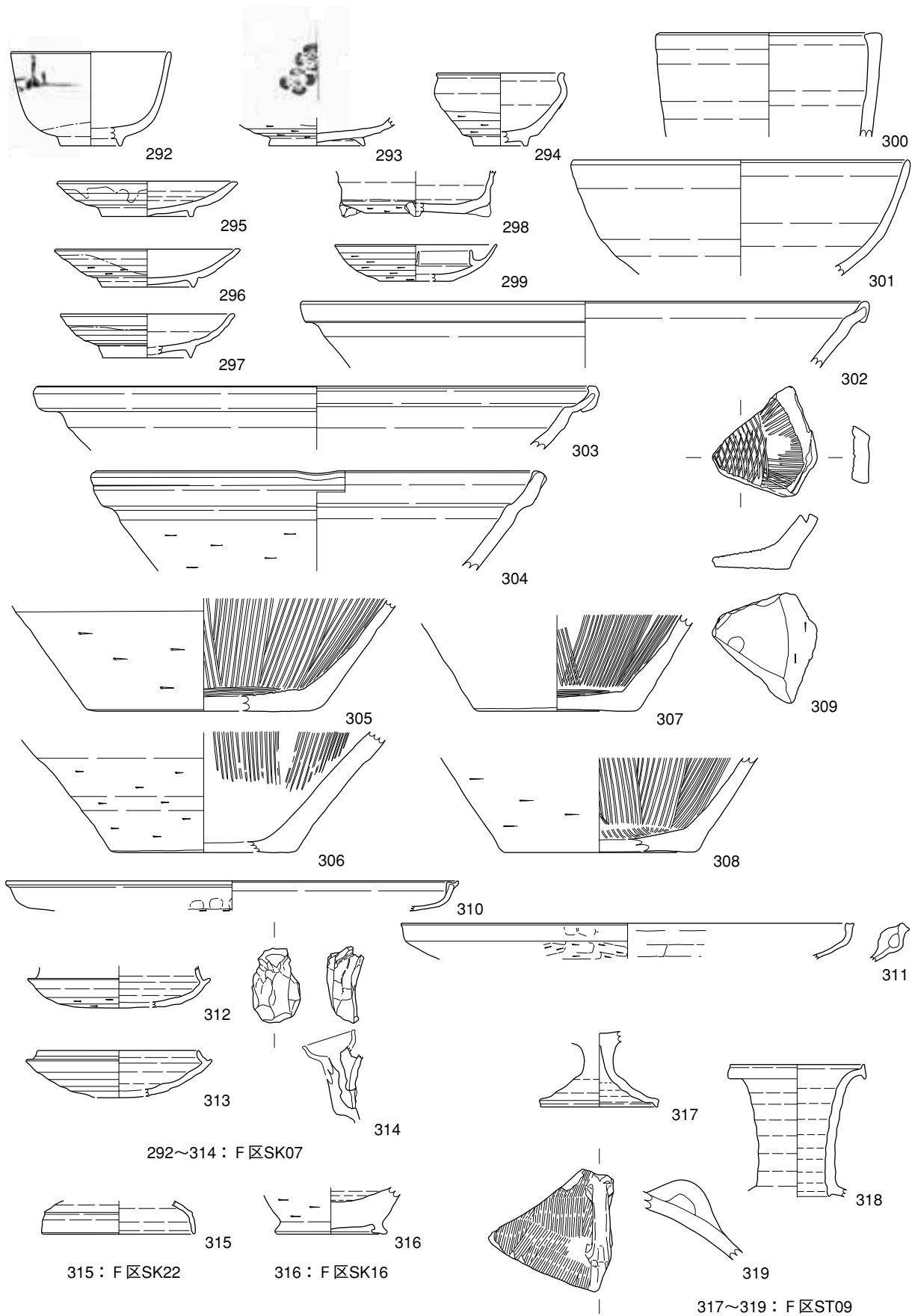
G a区 SD02 450の鉢は、口縁部がヨコナデによりやや外彎し、底部は丸くなる。外面は磨滅しており詳細は不明であるがナデまたはハケ調整、

G a区 SD03 398～411はSD03内でまとまって出土した遺物群で、その中の398～408は瀬戸・美濃製品になる。398・399の丸椀とも呉須により、それぞれ菊花文・笹文が描かれる。400は鉄釉後に灰釉を施す腰鍔椀になる。401の平皿は呉須で梅文が、402の平皿は内底面に鉄釉の型紙摺絵で草花文が描かれる。また401の内面には有機物が付着している。403・404は鉄釉が施された灯明皿で、404の口縁端部には粘土が付着する。563は灰釉が施された仏飯器。鉄釉が施された406は、器形が逆台形を呈して、底部が山形に盛り上がり、一方向に掛けるためと思われる小孔をもつ。灯明具の可能性が高い。407・408は鉄釉が掛けられた汁次と蓋。409は鉄釉が施された花生と思われる陶器片で、破面が打ち欠かれて脚台状に成形されている。410は3方向に内耳が付く焙烙、411は鉄釉が施される播鉢になる。417はハケ調整の長胴甕。

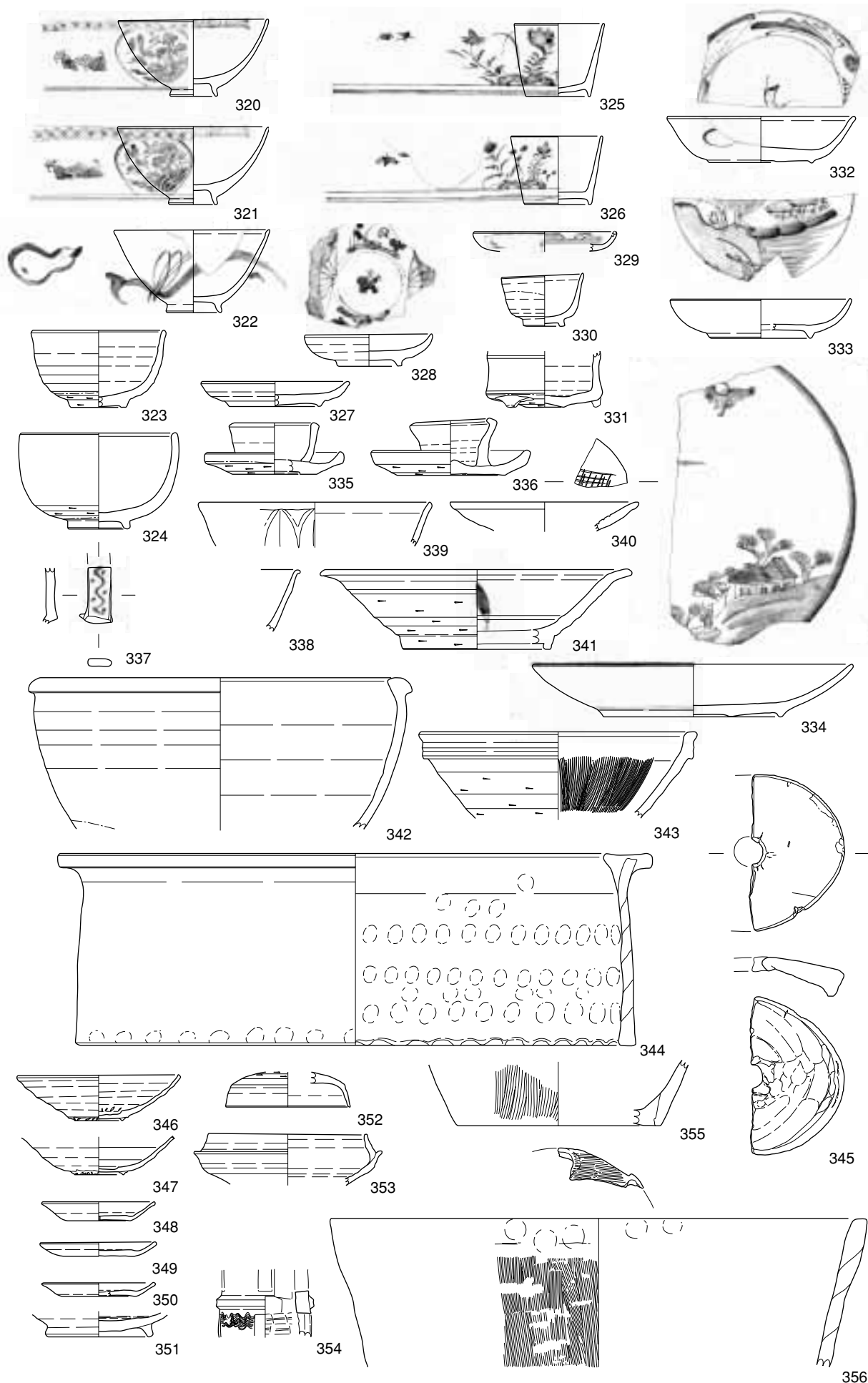
412・413・415は瀬戸・美濃製品の丸椀で、412は呉須で梅文？、413は銅緑釉が、415は灰釉が施される。414の灰釉が掛けられた丸皿は、口縁内外面に有機物が厚く付着している。416は天井部に2つの孔をもつ蓋状の陶器で、上面には黒色のタール状の有機物が付着している。ただ上面の孔周辺には有機物がみられないことから、上面が剥離面である可能性もある。

418～420は須恵器で、418は7世紀中葉～後半の返しのある蓋、419は7世紀中葉～後半の甕、420は7世紀代の坏になる。417は長胴甕。

G a区 SD08 421の腰折椀は呉須絵が、422の丸椀は鉄釉で柳文が描かれる。423の上面中央と角部に孔が設けられる水滴で、型打ちで上面に花文が描かれ、白色釉が上・側面に施釉された後鉄釉が部分的に掛けられている。424は青磁椀。425は灰釉が施される小型徳利。427はミニチュアの鳥で、灰釉が施されている。426・428は紅皿で、426の外面には呉須で草花文が描かれる。429・430は焙烙または鍋底部で、型により沢瀉文が陽刻される。431・432は土師質の鍋。

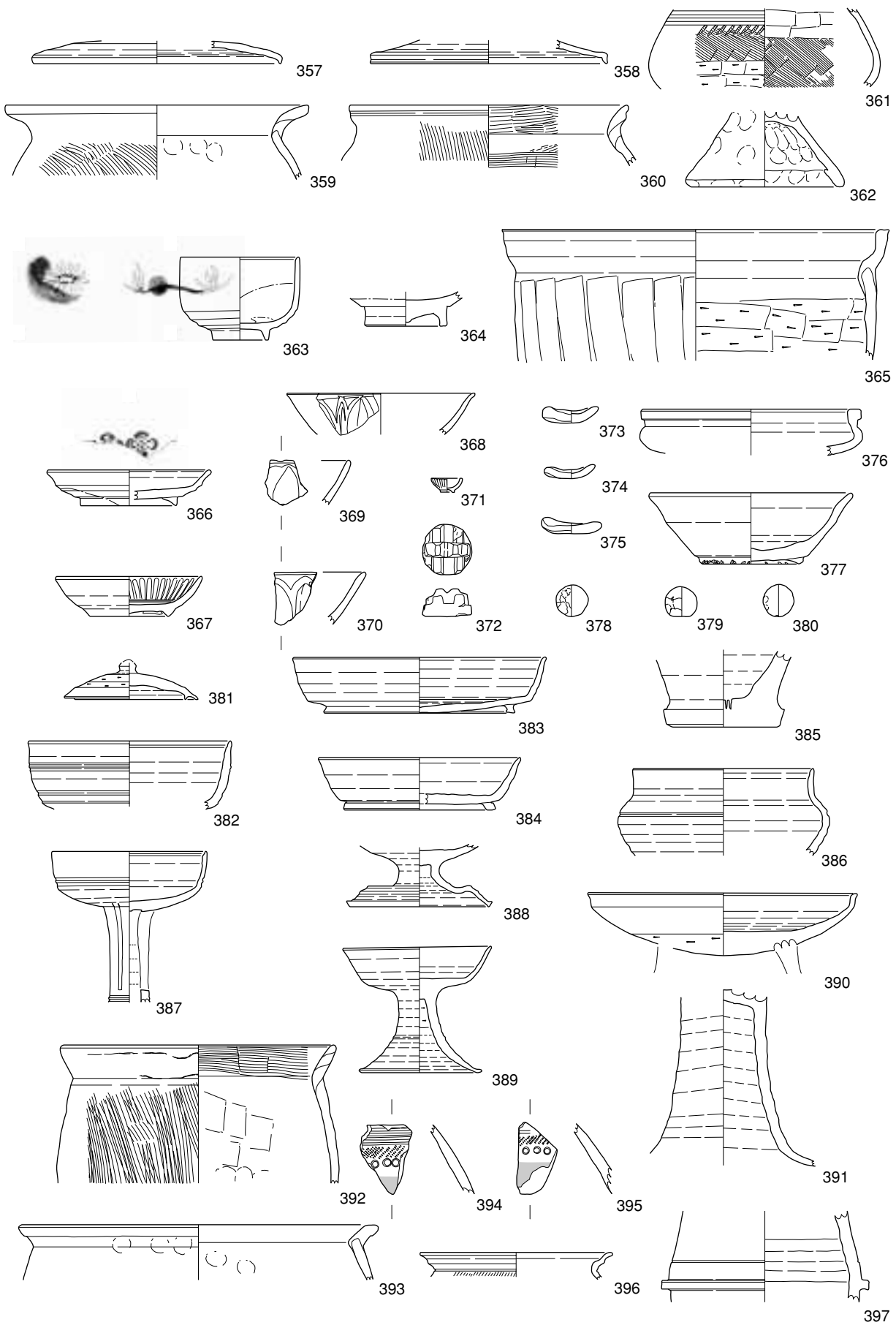


第32图 F区遺構内出土(4) (S=1/4)

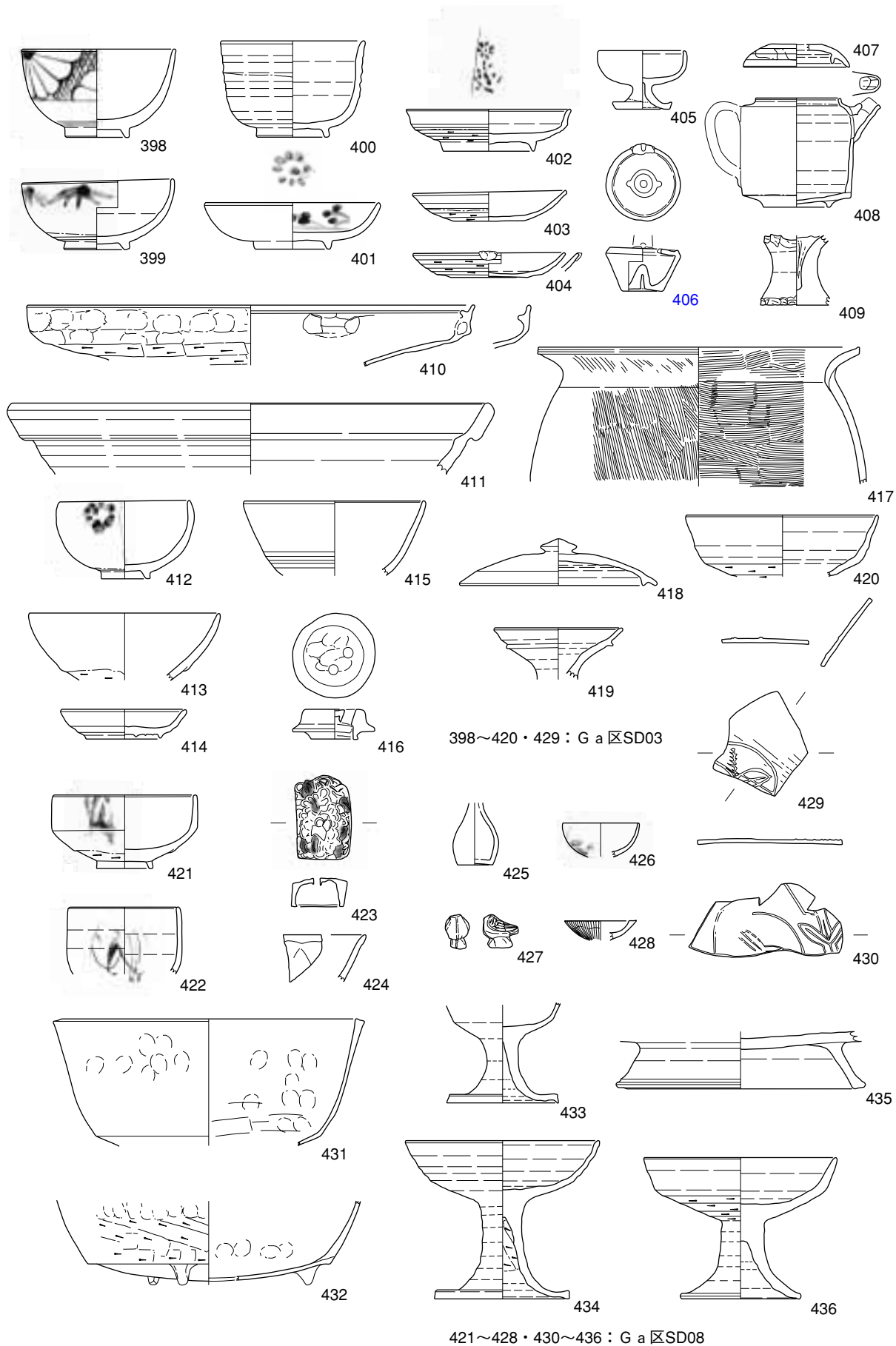


第 33 図 D・E 区遺構外出土

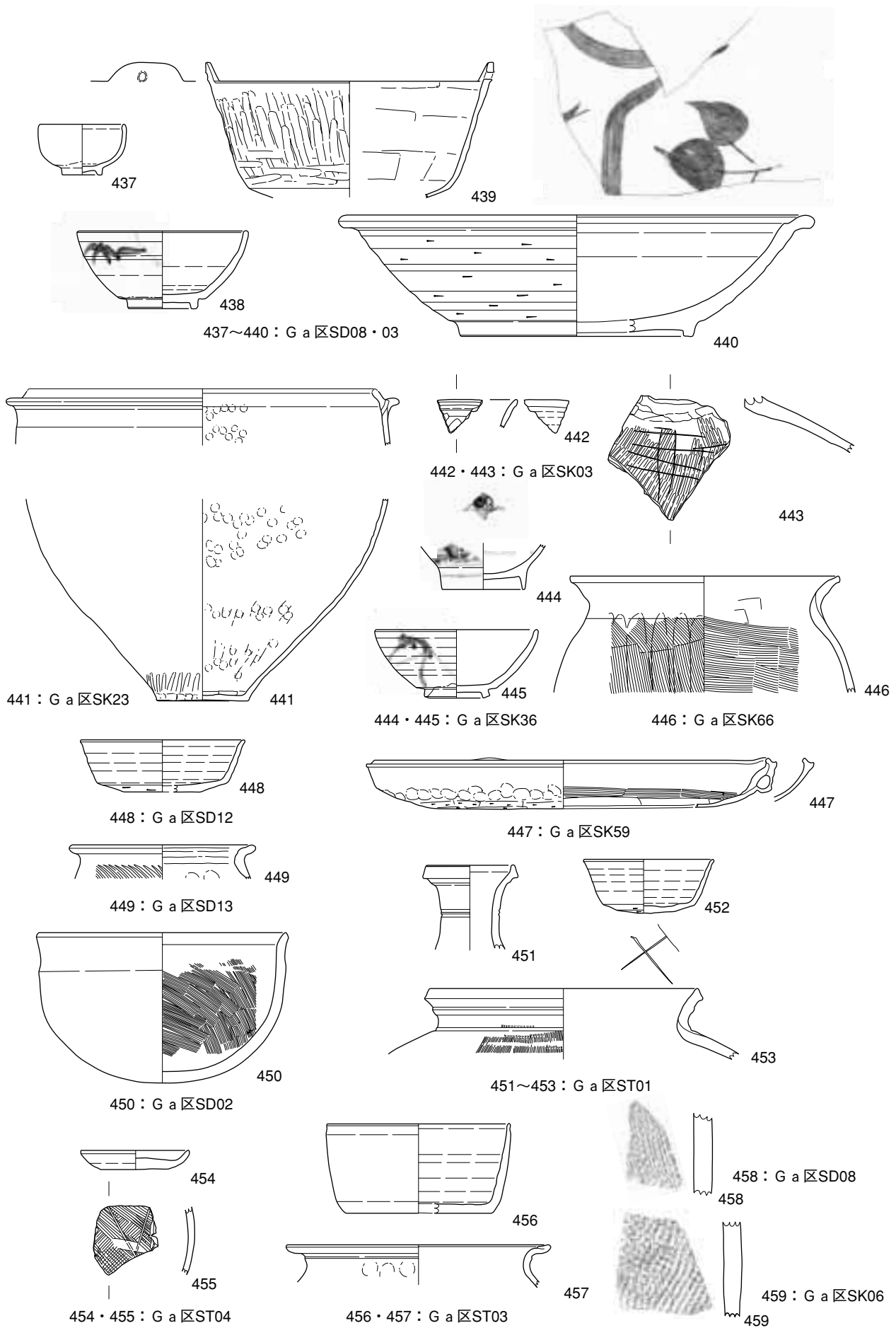
(344 は S=1/6、その他は S=1/4)



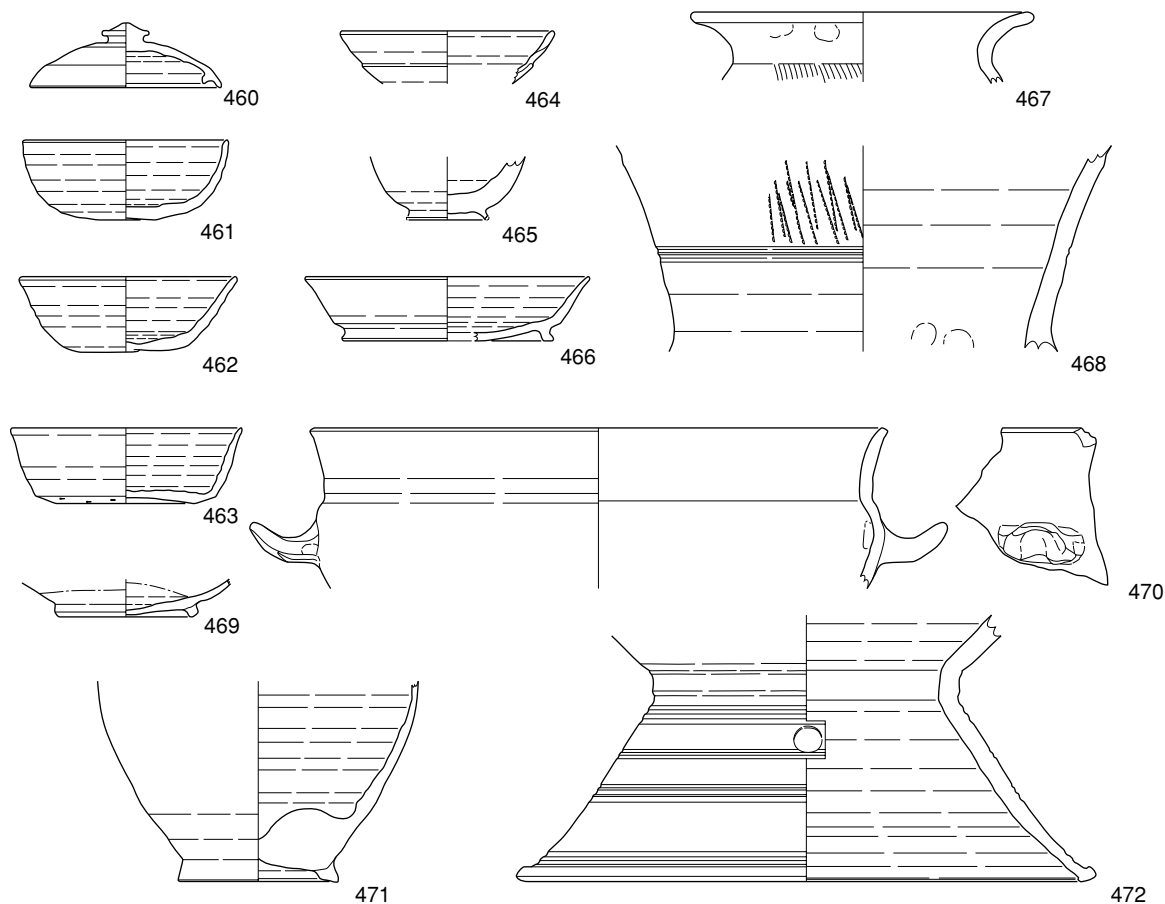
第34图 D·E·F·G a·G b区遗構外出土 (S=1/4)



第 35 图 G a 区遺構内出土 (1) (S=1/4)



第 36 図 G a 区遺構内出土 (2) (441 は S=1/6、その他は S=1/4)



第 37 図 H・I 区遺構外出土 (S=1/4)

433～436 は須恵器。433・434・436 は 7 世紀中葉～後半の高坏、435 は 7 世紀後半から 8 世紀前半の台付盤になる。

G a 区 SD03・08 G a 区 SD03・08 は重なりながら平行して走る溝で、調査時にどちらに所属するか確定できなかった遺物群である。

437 は灰釉が施された丸椀で、438 は呉須による笹文が描かれた平椀になる。439 は口縁端部に半円状の吊り手が付く瓦質の鍋である。外面はミガキ調整、内面はイタナデ調整が行われる。440 は内面に鉄釉で黍文が描かれた折縁鉢。

G a 区 SD12 448 は、外面底部が回転ヘラケズリ調整される 8 世紀後半の坏。

G a 区 SD13 449 は粗く深いハケ調整がなされる濃尾型長胴甕。

G a 区 SK03 442 は蓮弁が施される青磁椀。443 はタタキ成形された須恵器肩部片で、外面にヘラによる細い沈線が格子状に引かれる。沈線は縦位→横位の順に施文される。

G a 区 SK36 444 は呉須により岩に波文などの文様が描かれる広東椀で、445 は呉須により梅樹文が描かれる平椀になる。

G a 区 SK59 447 は内耳が 3 方向に付く焙烙であるが、内耳の位置は確定できなかった。

G a 区 SK66 446 の長胴甕の外面には、ハケ調整の前に縦位のナデまたはケズリがなされた痕跡がみられる。

G a 区 ST01 451 は 6 世紀代の提瓶の口縁部。452 は 8 世紀後半の坏で、外底面に十字のヘラ記号

が付けられる。453は7世紀代の甕口縁。

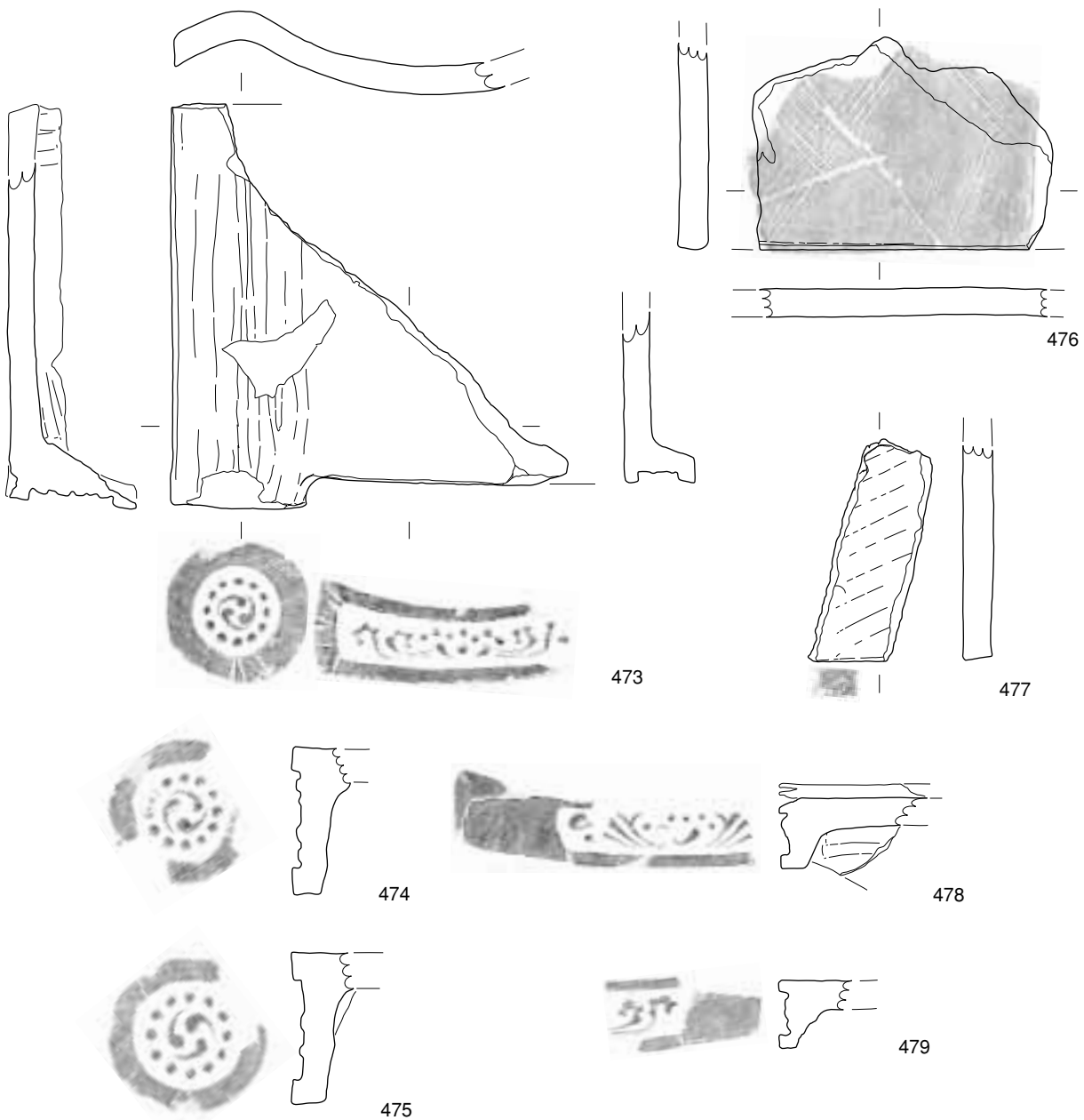
G a区 ST03 456は8世紀前葉の坏で、外面がやや磨滅している。457は伊勢型鍋。時期は13世紀後半から14世紀か。

G a区 ST04 454は南部系小皿、455は弥生時代後期から古墳時代初頭の土師器甕片と思われ、V字状のヘラ記号が施される。

その他、SD08出土の458とSK06出土の459は須恵器片で、外面には縄蓆文タタキがみられる。

(8) H・I区出土

460は返しのある坏蓋で、7世紀中葉～後半になる。461は8世紀前半、462・463は8世紀前葉、466は8世紀後半の椀になり、この中で462は美濃製品である可能性が高い。464は7世紀前半の高

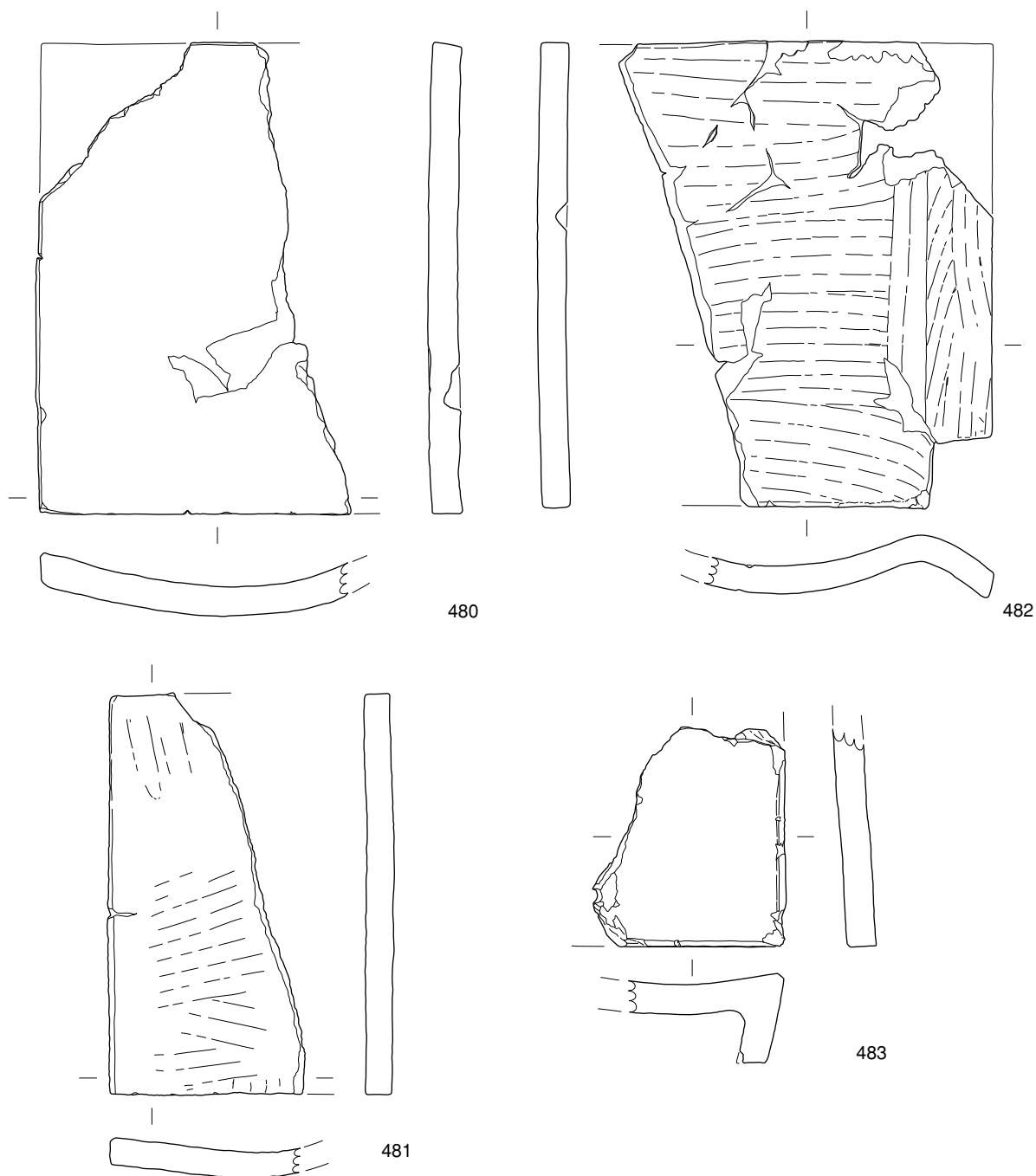


第38図 B区 SX03・SU01一括出土瓦(1) (S=1/4)

坏坏部で、465は8世紀後半のミニチュアの長頸壺になる。467は土師器長胴甕、468はクシによる刺突が施される7～8世紀の甕、470は口縁部が外反し把手が付く8世紀前葉の甕、471は8世紀後半の長頸壺になる。472の器台の脚台部は、クシによる横線が巡り、中位やや上に小型の透し孔が開けられるが、個数は不明である。469は10世紀代の灰釉陶器の椀。

第2節 瓦

B区 SX03 473はヘラナデ調整が行われる軒棧瓦で、軒丸部には左巻きの連珠三ツ巴文、軒平部には均整唐草文が付けられる。474・475・478・479も軒棧瓦で、軒丸部の474は左巻き三ツ巴文、475は右巻きの三ツ巴が、軒平部の478・479には均整唐草文がみられる。476はクシ目があり、477には「⊖」

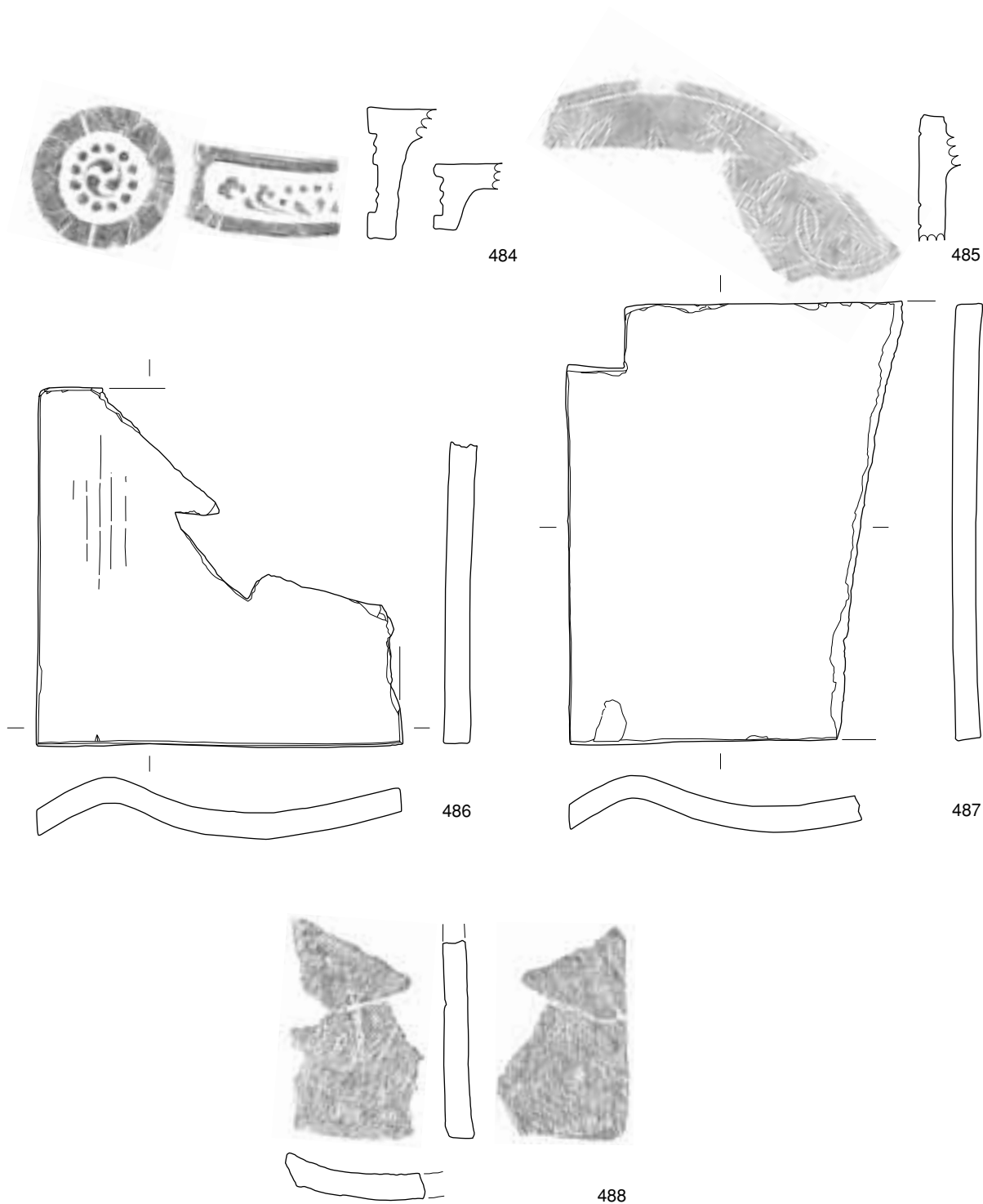


第39図 B区 SX03・SU01 一括出土瓦(2) (S=1/4)

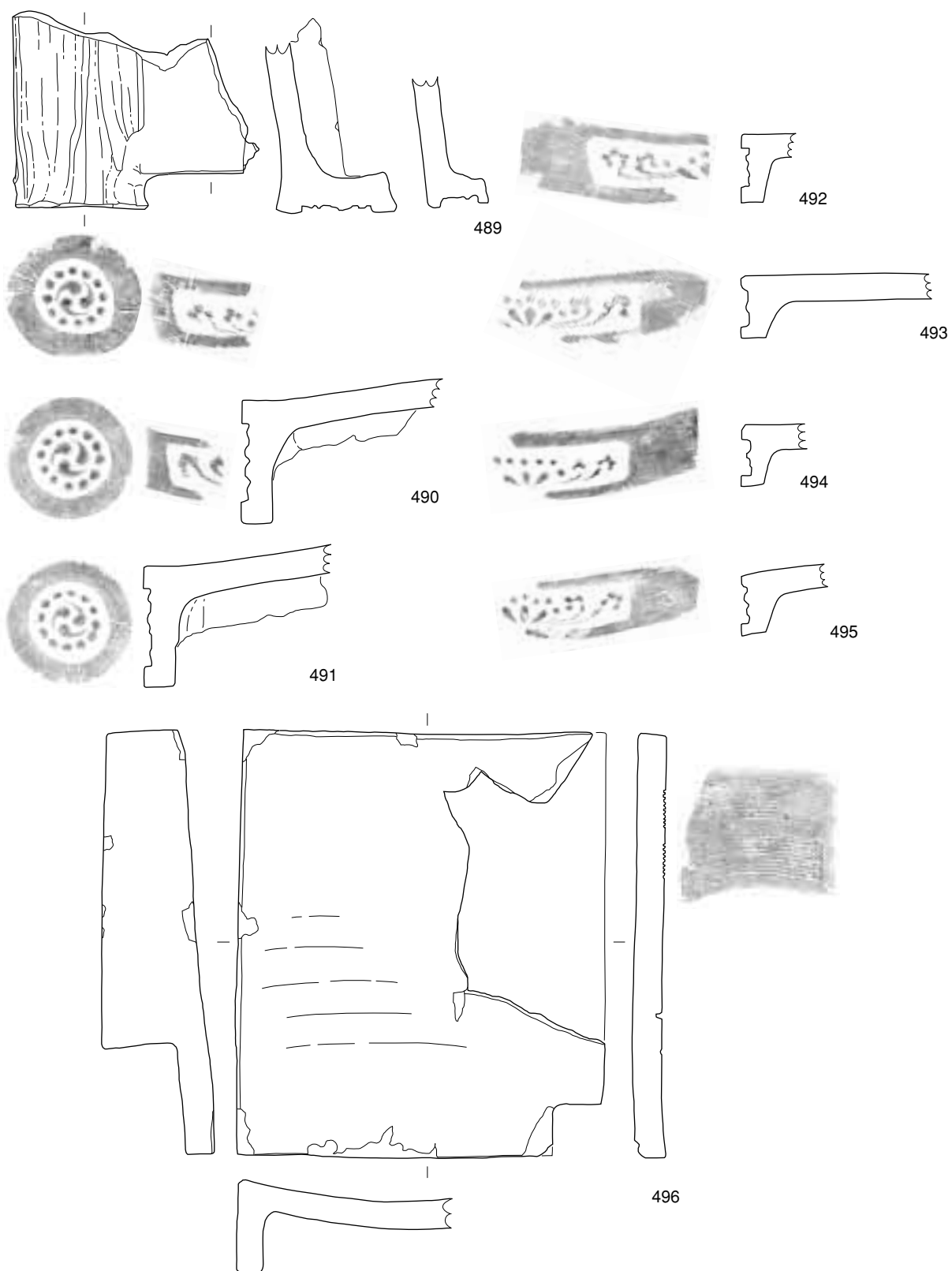
が印刻される。480・482 はヘラナデ調整が行われる棧瓦、483 は道具瓦で、481 も道具瓦になる可能性がある。

E区 SK05 曲物内より出土した 486・487 は棧瓦になる。

F区 SU01 489・490 はヘラナデ調整が行われる軒棧瓦で、軒丸部には左巻きの連珠三ツ巴文、軒平部には均整唐草文が付けられる。491 と 492～495 も同様の軒丸部・軒平部になるが、その中で 494



第40図 D・E・H区出土瓦 (S=1/4)



第 41 图 F 区 SU01 · SK03 出土瓦 (S=1/4)

は「本」、495は「△」と印刻される。

F区 SK03 496はヘラナデ調整が行われる道具瓦で、下面にはクシ目がみられる。

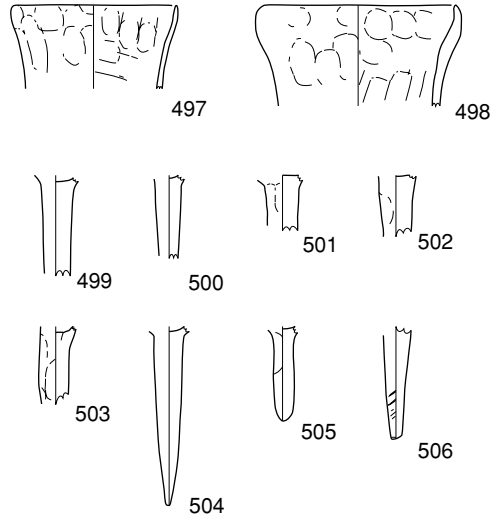
484は軒丸部には左巻きの連珠三ツ巴文、軒平部には均整唐草文がある軒棧瓦、485はヘラで花文が描かれる飾瓦になる。488の瓦質平瓦は、上面に布目と縄痕、下面に布目痕がみられる。

第3節 製塩土器・土錘

(1) 製塩土器

497・498は薄い器厚となる坏部で、ユビ押圧・ナデ・イタナデにより成形・調整される。499～506はユビ押圧・ナデ成形・調整される脚台部。これらの製塩土器は知多式4類に分類され、時期は古墳時代後期から古代になる。

これら製塩土器は、D区 SK34で出土した497を除き、G a区以南で出土しており、特に水田遺構より6点出土する。

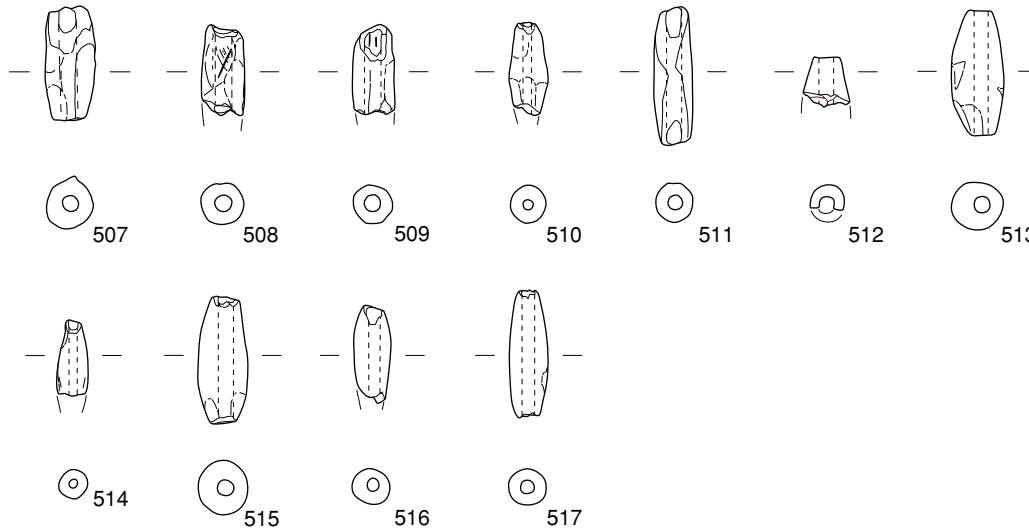


第42図 製塩土器 (S=1/3)

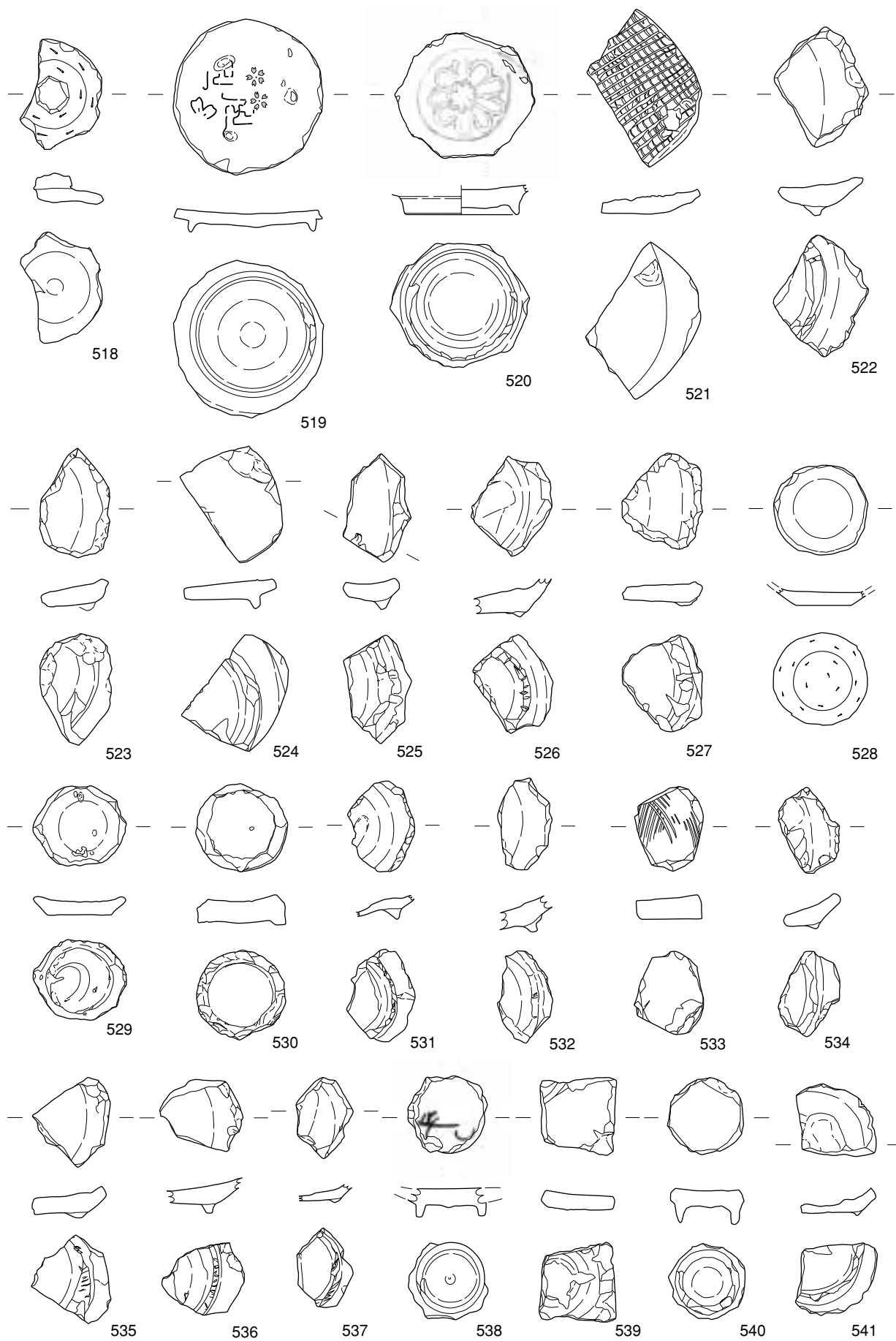
(2) 土錘

破損品が多いが、全て縦位が5cm前後で径が1.5～2.0cm前後の、ほぼ同サイズの土錘で、ユビ押圧・ナデにより成形・調整される。また上下の口縁部には欠損が目立つが、これは使用時に生じたものと思われ、体部が欠損しているものについても、そのまま使用されていた可能性がある。

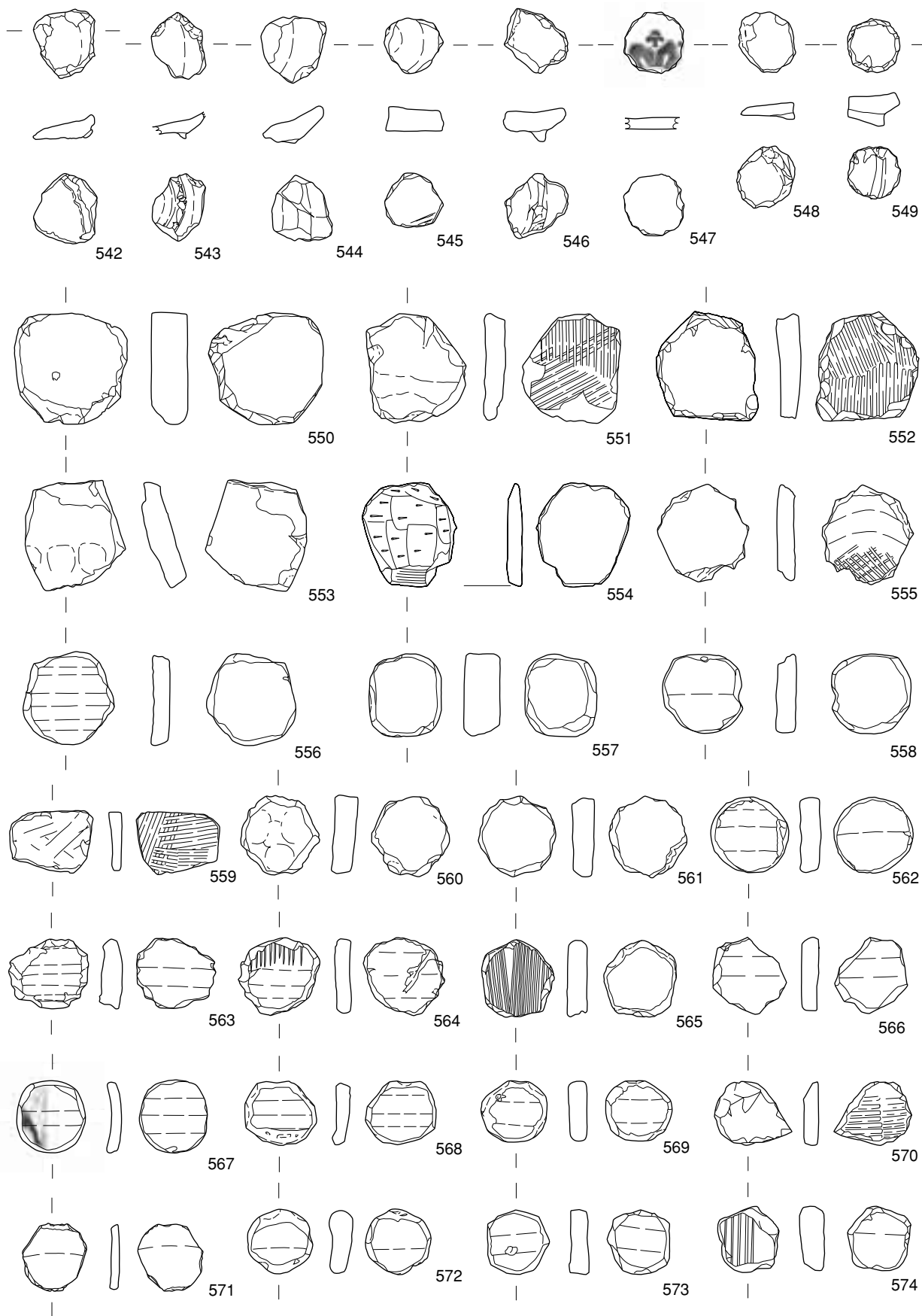
出土地点は、507・508を除き、G a区より南で出土している。



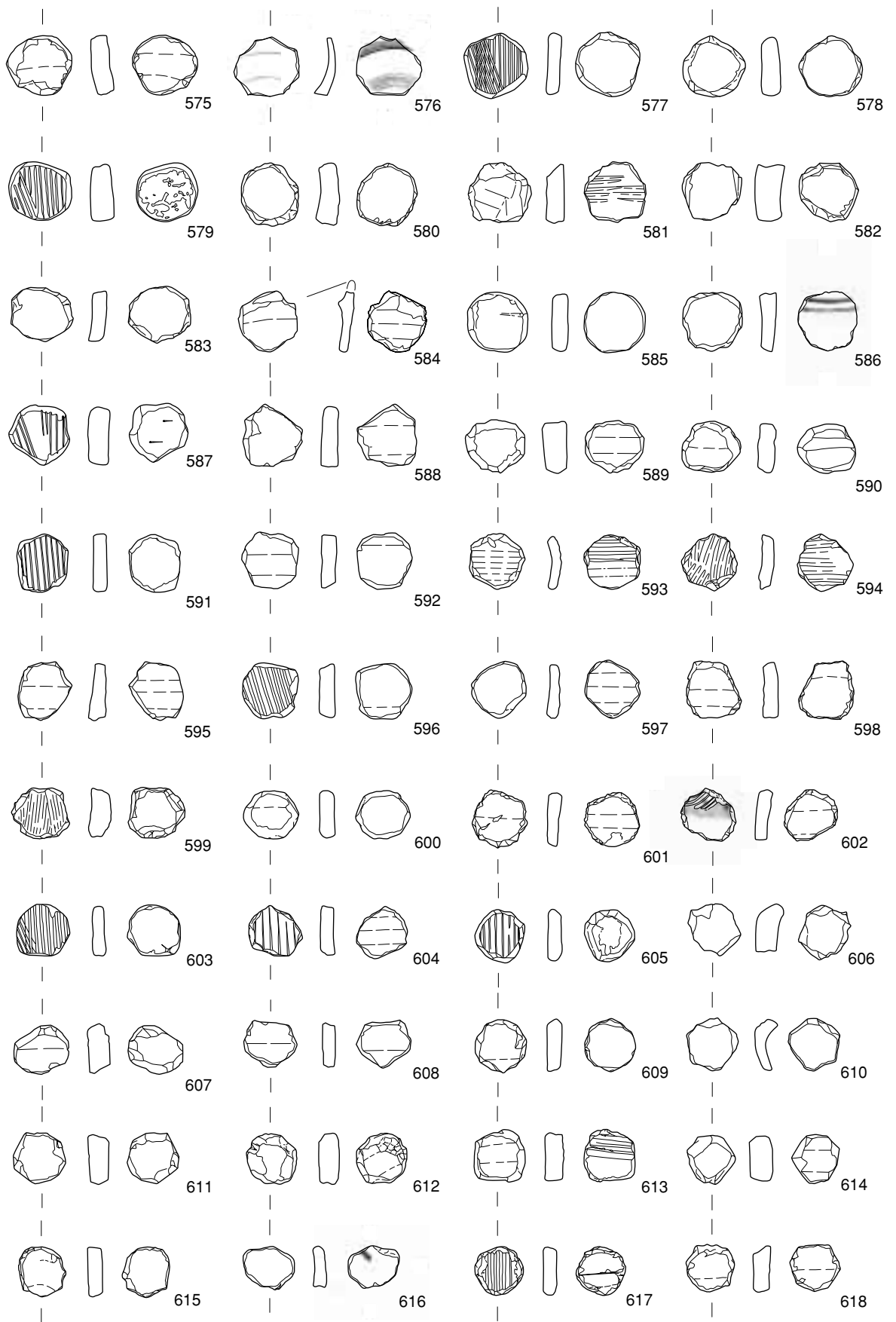
第43図 土錘 (S=1/3)



第44图 加工円盤(1) (S=1/3)



第45図 加工円盤(2) (S=1/3)



第 46 图 加工円盤 (3) (S=1/3)

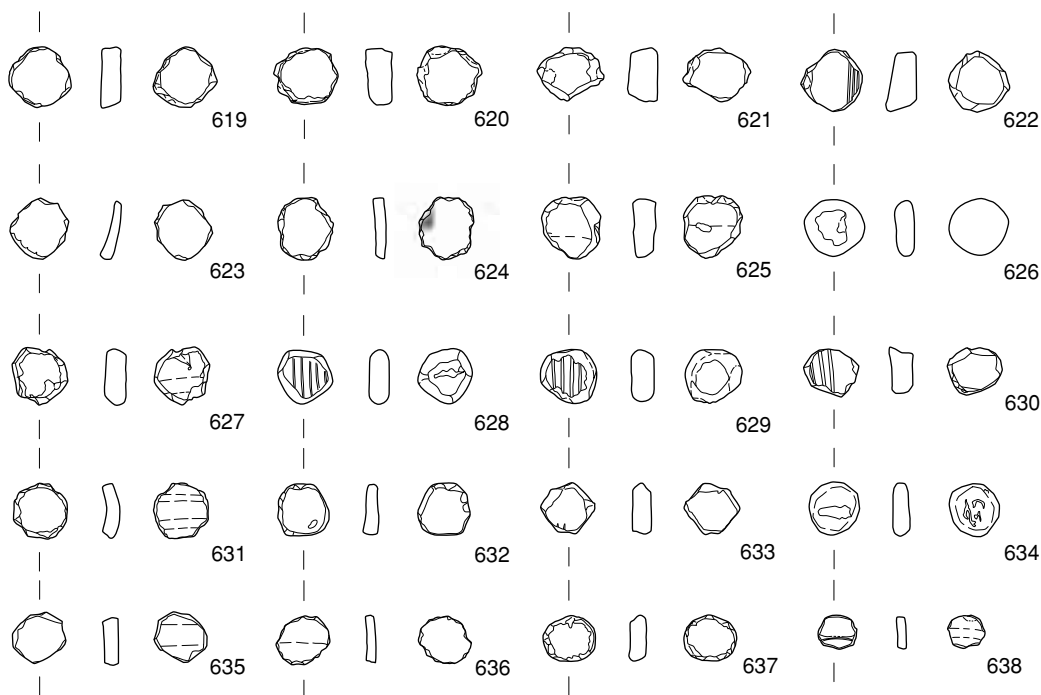
第4節 加工円盤

側面部を打欠くか研磨して、円形・楕円形・方形・台形の形状を作り出すもので、総数 231 点出土している。本書では、加工を施すことによって上記の形を意識して整えたものを加工円盤として取り上げており、研磨を行なうために土器片を用いたものは、「第1節土器・土製品」に掲載した。

加工円盤はB区以北、B・C区 SX03、E・F区 SX01、F区以南の地山面が低い地域で多く出土し、特にG a区に集中する。また多数出土した遺構としては、E区 SD06で5点、G a区 SD03で5点、SD08で8点があげられる。

加工された土器の種類は、戦国～近世陶器が139点（60%）と最も多く、次に中世陶器53点（22%）、須恵器25点（11%）と続く。その他戦国～近世陶磁器8点、灰釉陶器3点、燻し瓦2点、土師器1点になる。また加工された器種で多いものは、戦国～近世の椀・鉢・皿が51点（24%）、中世陶器の山茶碗・小皿で46点（21%）、戦国～近世陶器の播鉢が36点（17%）、須恵器壺・甕11点（5%）と続く。ただ播鉢に関しては、甕・鉢と分類したものの（35点）中で鉄釉が施された体部片のいくつかは播鉢になると思われる。また戦国～近世の陶器・磁器については器種の絞り込みが難しいが、およそ供膳具である椀・鉢・皿類が51点（36%）、貯蔵具である甕・壺類が92点（64%）になる。さらに部位としては、高台部61点、底部12点、それ以外が158点となる。

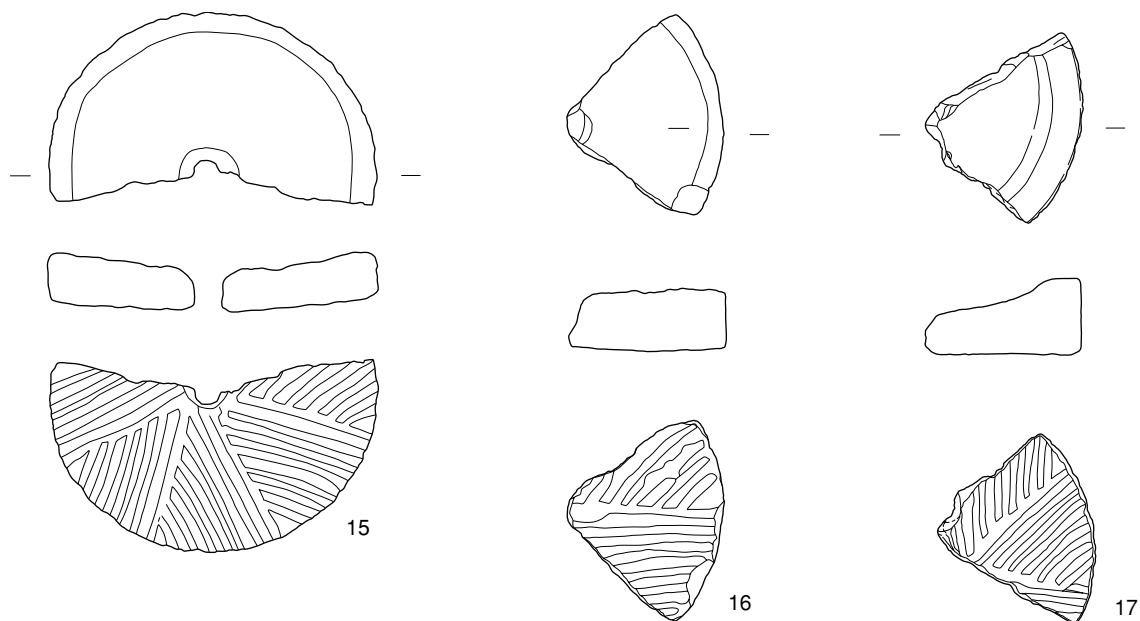
加工円盤の大きさは、2～3cmの間に74点（32%）、3～4cmの間に82点（35%）、5～6cmの間に41点（18%）と大半がこのサイズに加工されている。また側面が打欠かかれただけのもの178点（77%）、打欠が主で部分的に研磨されるもの23点（10%）、研磨が主で部分的に打欠くもの14点（6%）、研磨だけのもの16点（7%）になる。



第47図 加工円盤（4） (S=1/3)



第48図 石製品(1) (S=1/3)



第49図 石製品(2) (S=1/4)

第5節 石製品

1～3は全体に研磨され、複数の磨面がみられるもの。4～11は砥石になる。基本的な形状は4・9・10・11のように長方形を呈していると思われるが、6・7・8のように破損後の破片も研磨面として用いられている。また5のように孔が開けられるものは、携帯用の砥石であったと考えられる。

12・13は凝灰質砂岩の長方形硯で、12は墨堂中央が磨り減っており、13は深く溝状に磨り減る。また13の硯背にも磨痕がみられる。14は形状が硯のようであるが、凝灰質砂岩で12・13より石質が粗く、器種は不明である。

15～17は花崗岩の石臼、18～21はチャートの火打石になる。

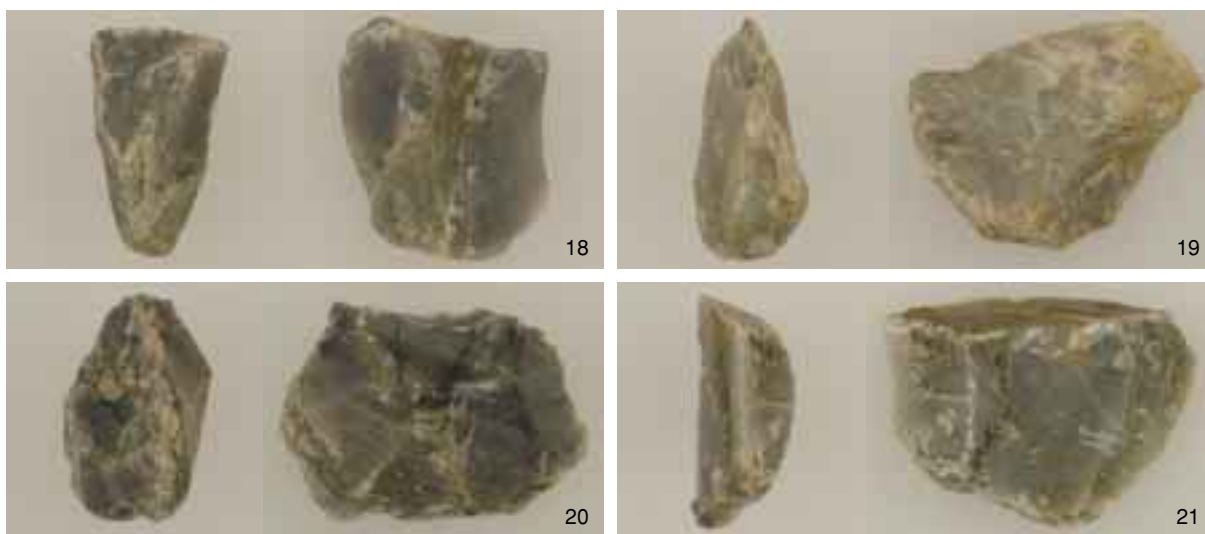


写真4 石製品(3):火打石(18～21)

第6節 木製品

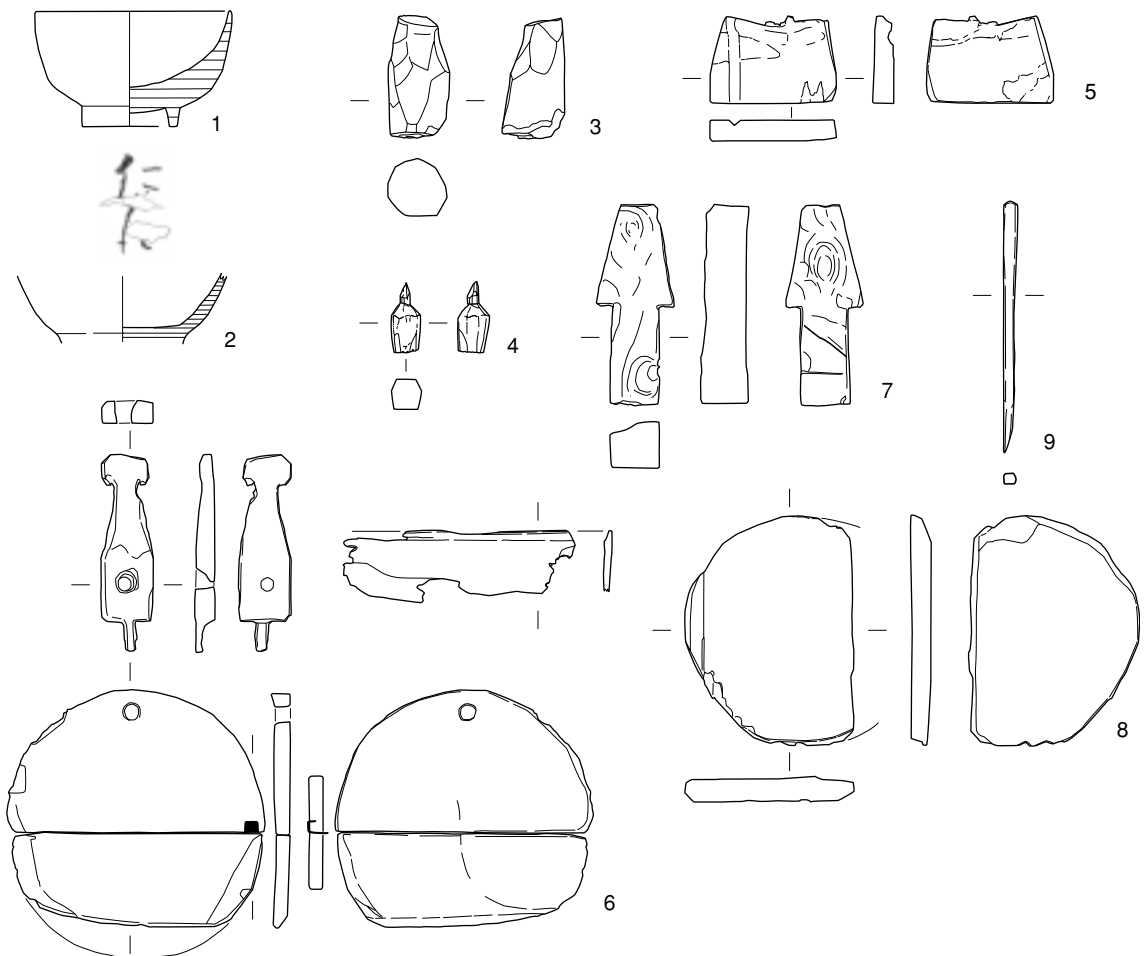
1・2は漆椀で、外面には黒漆、内面には赤漆が塗られ、1の外底面には赤漆で「仁〇」と書かれる。3・4はやや粗い削痕が残るもので、栓になる可能性がある。5は連歯下駄の歯。6は曲物桶柄杓で、8は桶底部になる。9は箸で、7は不明。10～13はG a 区の井戸 SK58 の桶組井戸杵で、10・11は上段、12・13は下段になる。

第7節 金属製品

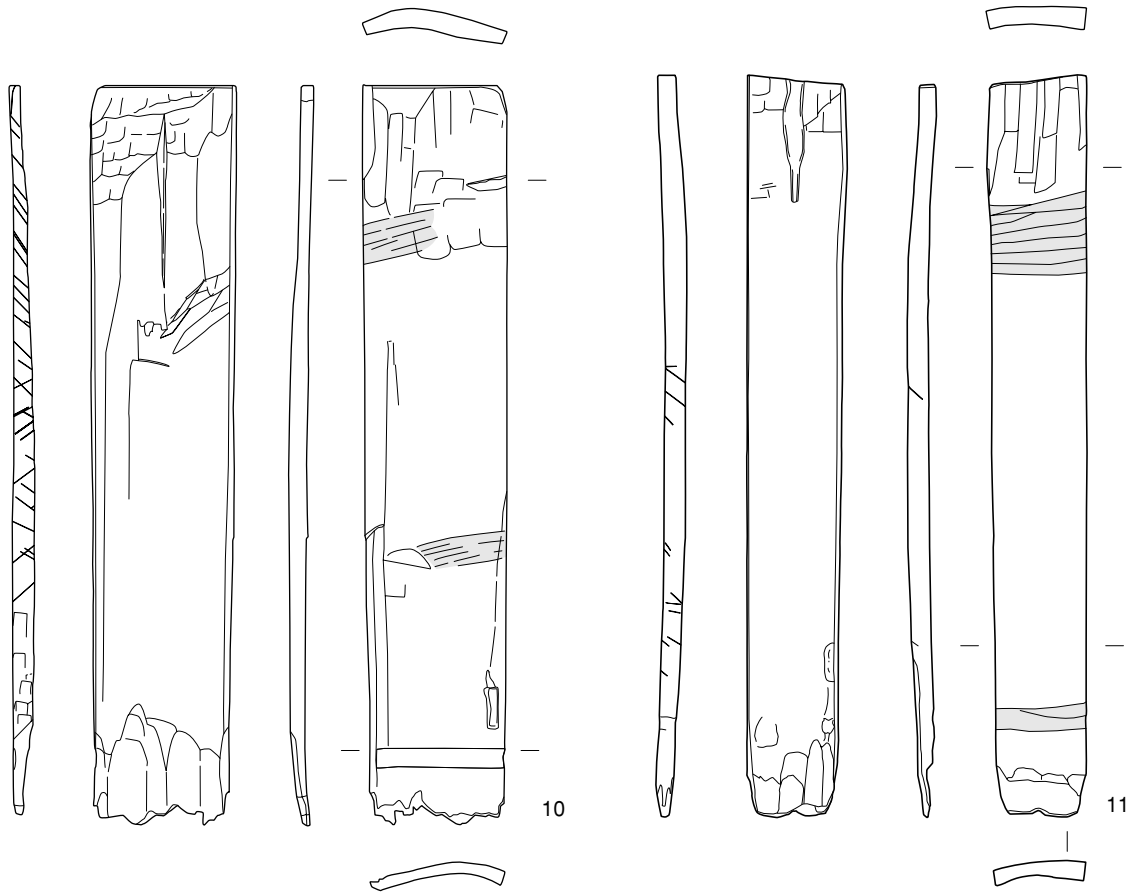
鉄片や釘状の鉄製品が25点出土しているが、所属時期や器種は特定できなかった。また鉄滓も24点出土している。鉄滓はF区で11点と最も多く、そこから南のI区にかけて21点と大部分が出土している。

銭貨は、新寛永銭と呼ばれる「寛永通寶」が4点、E・F・G b 区で出土している。その他は古代の中国銭が17点出土しているが、E区 SK58 でみつかった3の1点を除き、その他16点はC区で出土する。その中でも SK07 から11枚はまとめて出土しているのが注目される。銭貨の種類は、「開元通寶」が2点（7・10、10は周通元寶の可能性あり）、「元豊通寶」が4点（3・8・13・14）、「元祐通寶」（1・5・16）と「政和通寶」（4・6・11）が3点、その他「大観通寶」（2）・「皇崇通寶」（9）・「聖崇元寶」（12）・「熙寧元寶」（15）・「紹聖元寶」（17）がある。初鑄時期は、「開元通寶」が621年／960年、「寛永通寶」が17世紀後半で、その他は11世紀から12世紀前半にあたる。

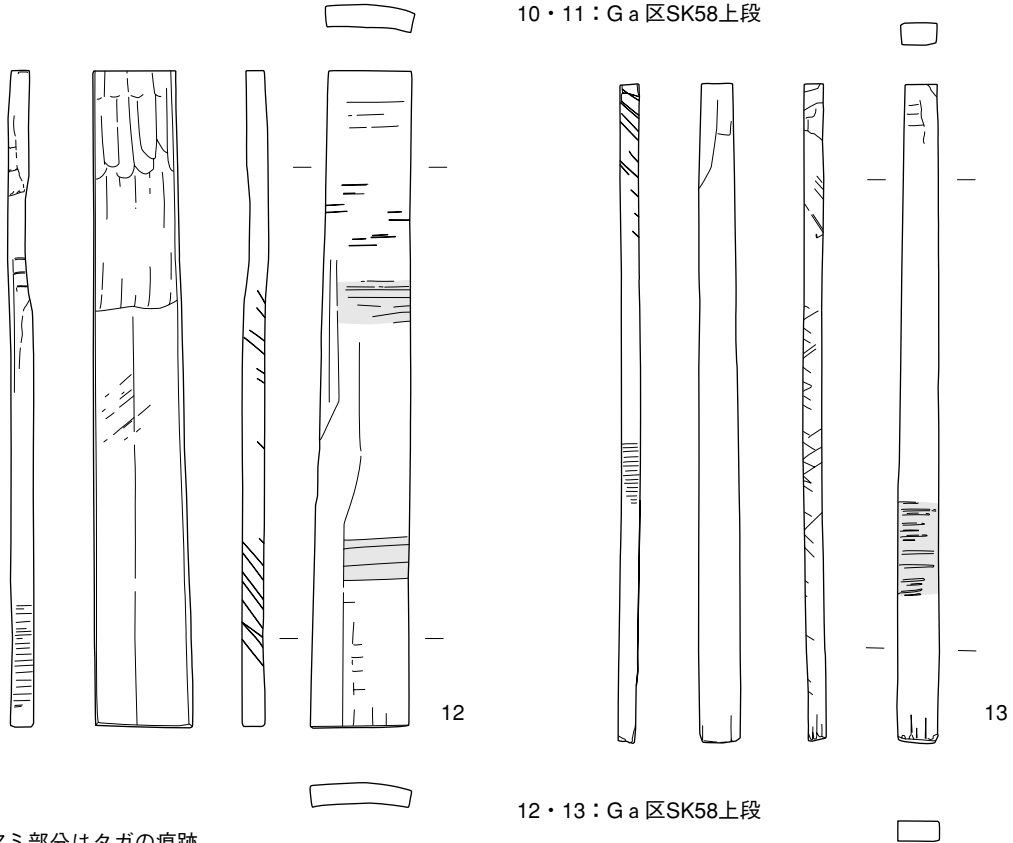
22は刀子の柄または筭に、23は煙管の部になる。



第50図 木製品（1） (S=1/4)



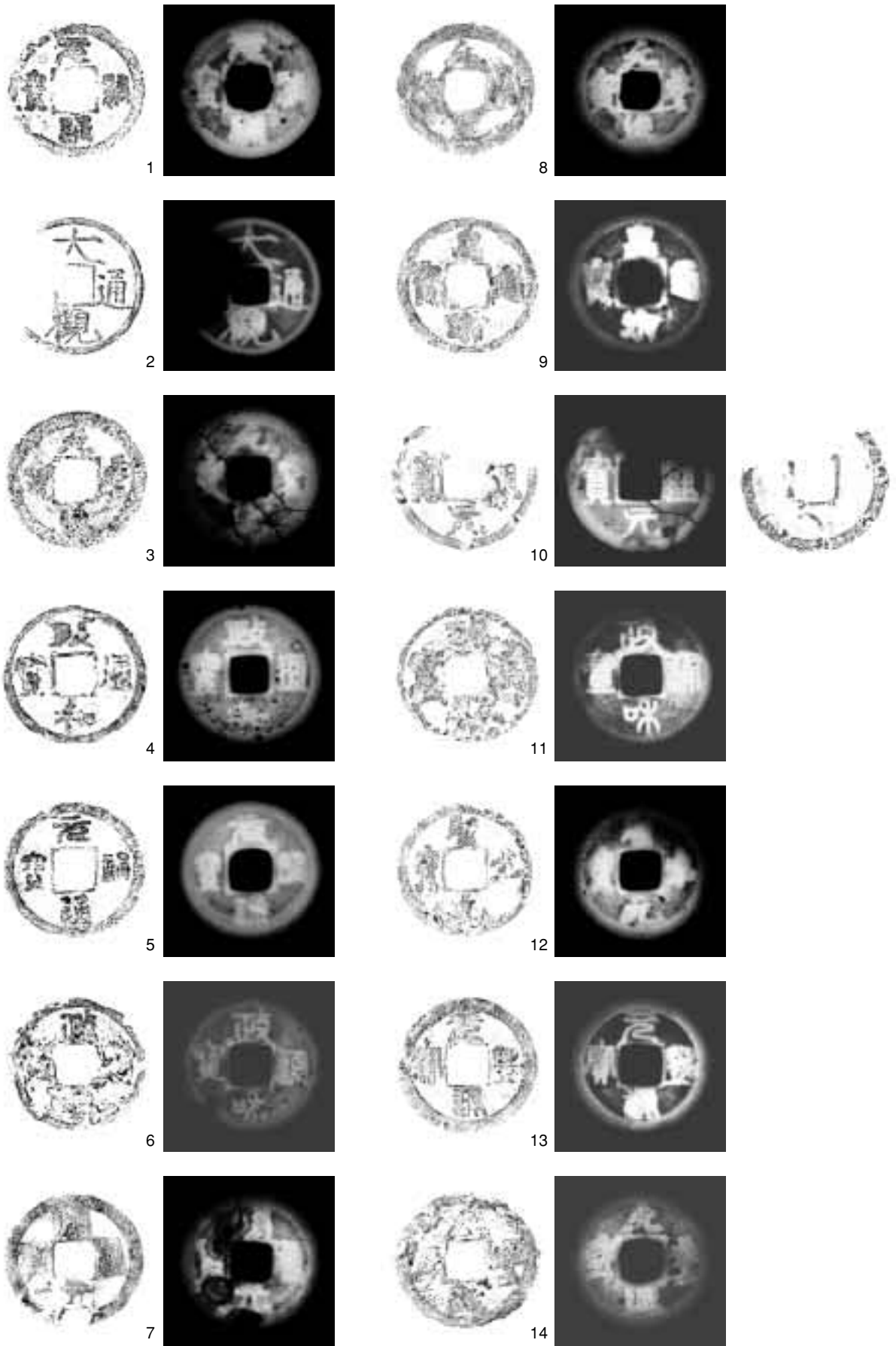
10・11 : G a 区SK58上段



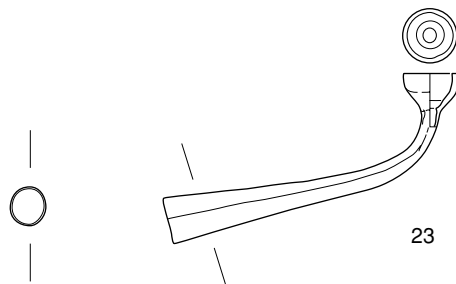
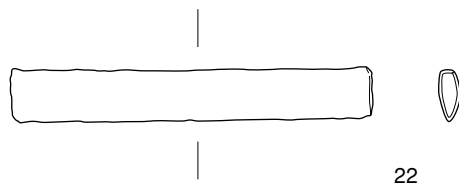
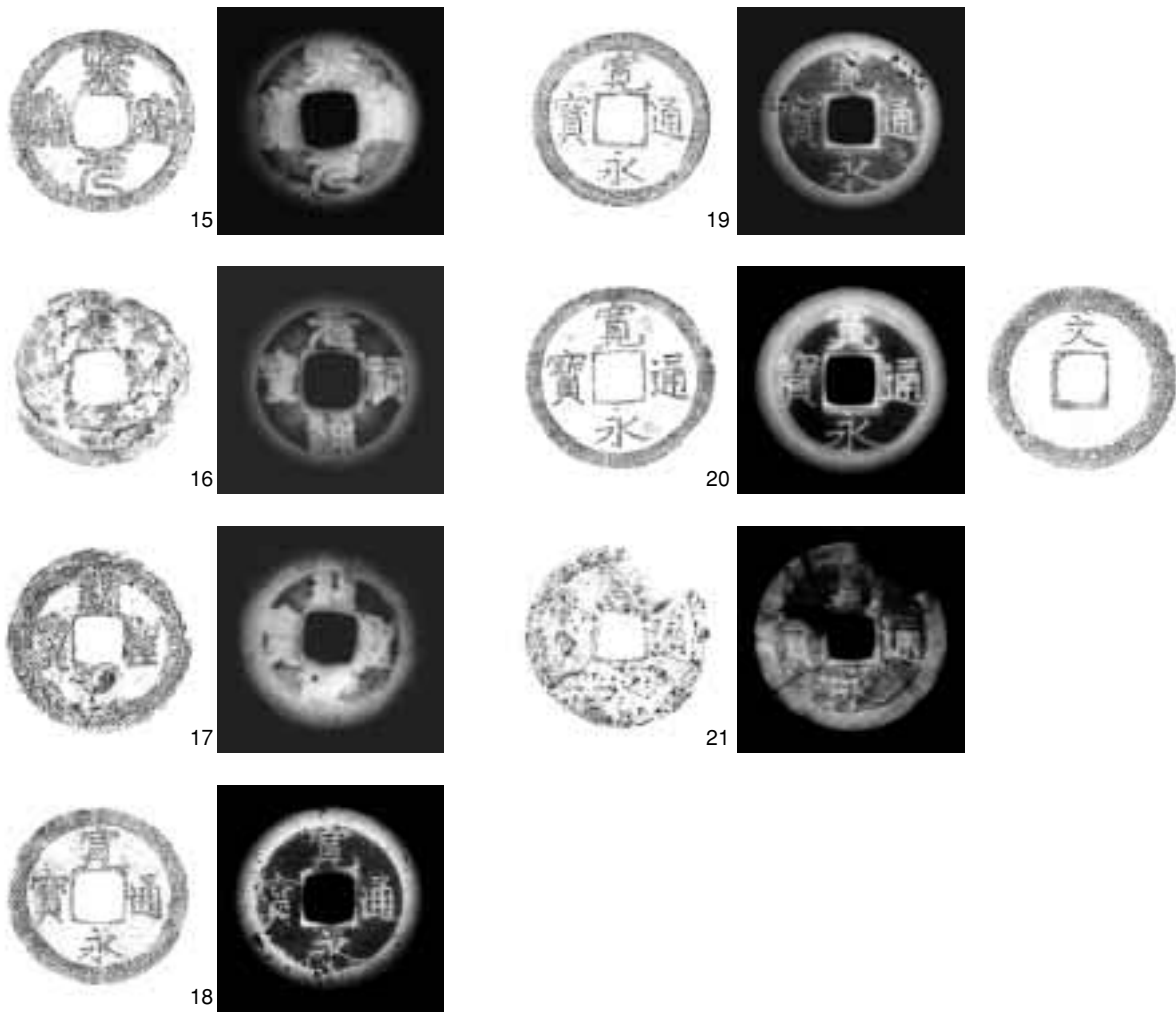
12・13 : G a 区SK58上段

※ アミ部分はタガの痕跡

第51図 木製品(2) (S=1/8)



第 52 図 金属製品 (1) (S=1/1)



第 53 図 金属製品 (2) (22・23 は S=1/2、その他は S=1/1)

第4章 自然科学分析

第1節 濃尾平野中央部、上中・西屋敷遺跡における堆積環境

鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター）・小野映介（名古屋大学大学院環境学研究科）

はじめに

濃尾平野中央部、愛知県稲沢市北島町の上中・西屋敷遺跡にて地下層序を観察する機会を得た。その層序・堆積相解析、珪藻化石分析、放射性炭素年代年代測定から新たな知見が得られたので報告する。

試料および分析方法

深掘層序の記載

上中・西屋敷遺跡の調査区 00E 区と 00I 区において、地表面からバックホーにより掘削し層序断面を露出させ、柱状図を作成した（第 54～56 図）。柱状図の作成にあたり、層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無の特徴を詳細に記載した。堆積相の記載は Miall(1977, 1978, 1996) の河川コードを用いた。層序断面からは合わせて放射性炭素年代測定用の試料を採取した。また、00E 区では下位層より約 5cm ごとに珪藻分析用の 30 試料を採取した（第 55 図）。柱状図の作成と試料採取は鬼頭が行なった。

ハンド・ボーリング試料

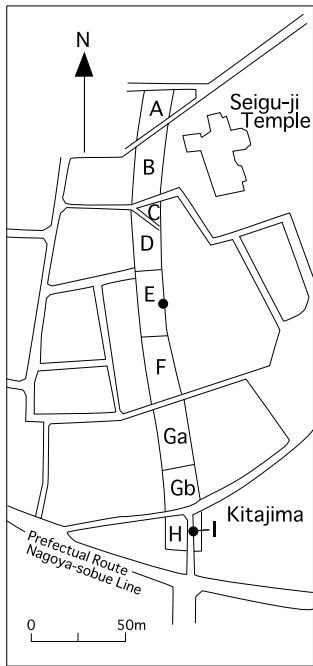
上中・西屋敷遺跡の層序断面との比較、さらには濃尾平野の考古遺跡における層序解析結果との比較・検討の際の基礎データを得るため、濃尾平野の 14 地点を設定してハンド・ボーリング調査を実施した。試料はコアの状態で採取し、科学分析室にもち帰り、柱状図の作成と微化石および放射性炭素年代測定用の試料を採取した。ハンド・ボーリングおよび試料採取は鬼頭と小野で行なった。

珪藻分析

試料約 1g（湿潤重量）を秤量後、30% 過酸化水素水を加えて加熱し、有機物の分解と粒子の分散を行なった。反応終了後、水洗を 4～5 回繰り返した。残渣を遠心管に回収し、マイクロピペットで適量を取り、カバーガラスに滴下して乾燥させた。乾燥後、マウントメディア（和光純薬製）で封入し、プレパラートを作製した。600～1000 倍の顕微鏡下で観察し、200 個体について同定・計数した。同定は Krammer and Lange-Bertalot(1986, 1988, 1991a, 1991b) に従った。なお、上中・西屋敷遺跡 00E 区の深掘試料の検鏡は鬼頭が行なった。

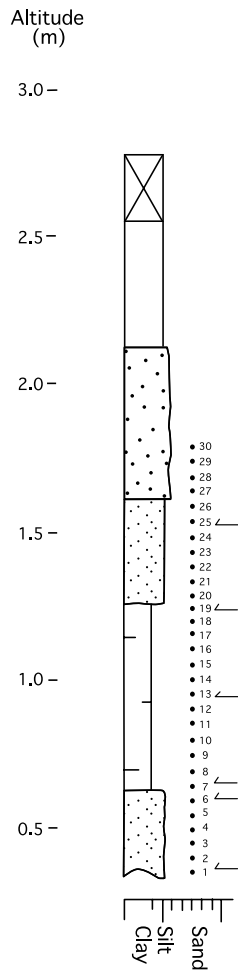
放射性炭素年代測定

ガス比例計数管（GPC）法と加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。ガス比例計数管法の試料はアルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後、リチウムと混合して反応管に入れ、真空ポンプで引きながら 800℃まで加熱して炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。測定はラドン崩壊のために約 1 ヶ月放置した後、精製したアセチレンを容量 400cc のガス比例計数管に充填し、 β 線を計数して ^{14}C 濃度を算出した。 ^{14}C 濃度に



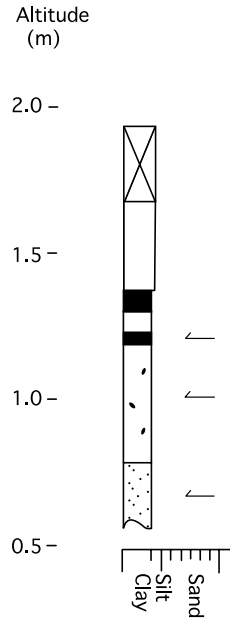
第54図 上中・西屋敷遺跡における深掘調査地点図

アルファベットは調査区、黒丸(●)は深掘位置を示す。



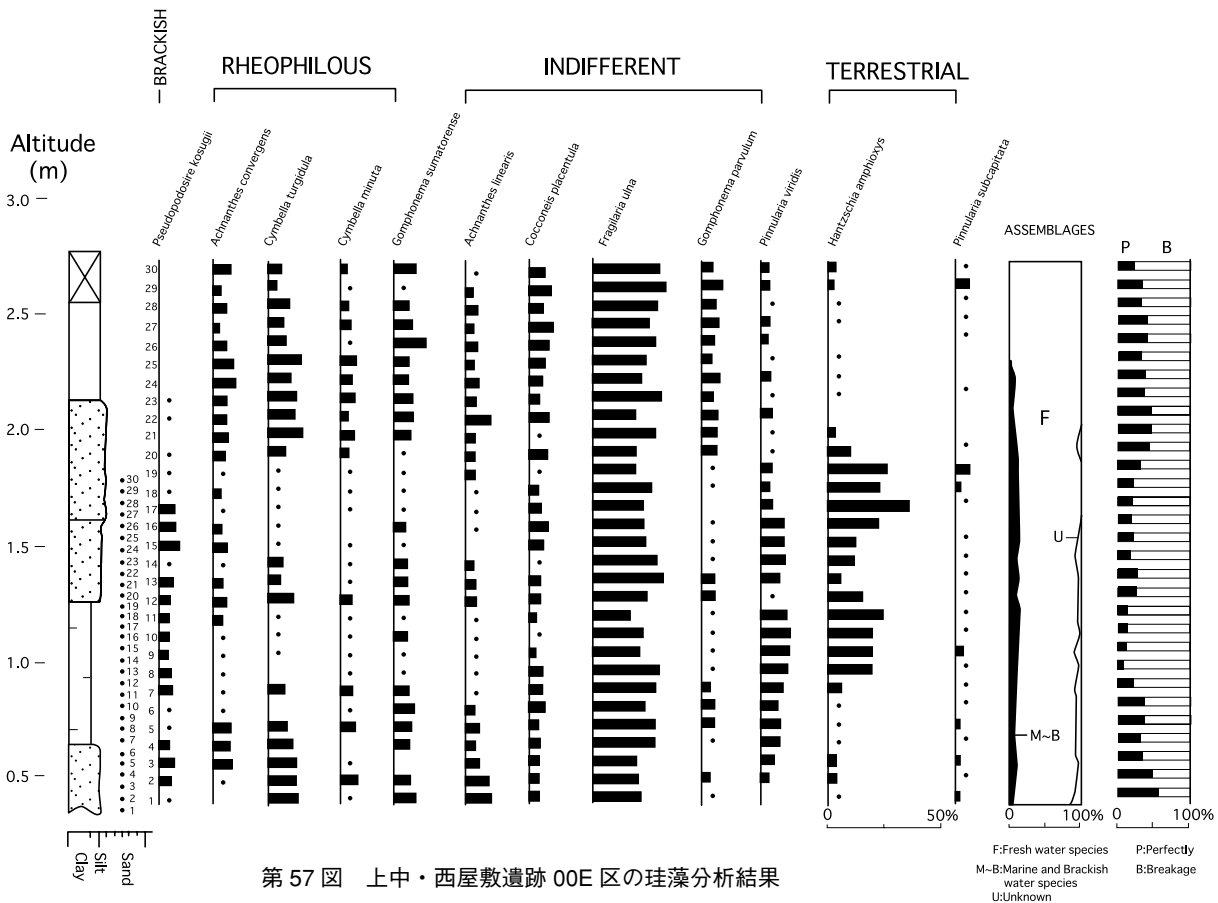
第55図 上中・西屋敷遺跡 00E 区の深掘柱状図

黒丸(●)は珪藻分析、矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を示す。



第56図 上中・西屋敷遺跡 00I 区の深掘柱状図

矢印は放射性炭素年代測定の試料採取層準を示す。



第57図 上中・西屋敷遺跡 00E 区の珪藻分析結果

F: Fresh water species P: Perfectly
M-B: Marine and Brackish water species B: Breakage
U: Unknown

ついて同位体分別効果の補正後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。

加速器質量分析法は125 μmの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨(グラファイト)に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹⁴C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴C年代値の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。¹⁴C年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定はガス比例計数管法、加速器質量分析法とも株式会社パレオ・ラボ(Code No.; PLD)に依頼した。

分析結果

深掘層序

上中・西屋敷遺跡00E区では地表面(標高2.72m)から深度2.38mまでの地下層序断面を得た(第55図)。堆積物の粒度と色調から6層に区分される。下位層より標高0.34～0.62mは灰褐色を呈するシルト質砂層、標高0.62～1.25mは黒灰～灰色を呈する粘土層、標高1.25～1.59mは灰褐色を呈する砂質シルト層、標高1.59～2.09mは灰褐色シルト質砂層、標高2.09～2.51mは灰褐色シルト層、標高2.51～2.72mは基質がシルトからなり礫を含む人工的な盛り土である。

00I区では地表面(標高1.94m)から深度1.36mまでの地下層序断面を得た(第56図)。堆積物の粒度と色調から6層に区分される。標高0.58～0.80mは灰色を呈する極細粒砂混じりの粘土層、標高0.80～1.20mは緑灰色の粘土層で堆積構造はまったくみられない。層内には木片や炭化物が含まれる。標高1.20～1.24mは黒灰色粘土層でコンポリューションがみられる。標高1.24～1.30mは赤褐色を呈する粘土層で、層内に濃橙色を呈するスラグ状のものが含まれる。標高1.30～1.38mは黒灰色粘土層、標高1.38～1.69mは灰褐色のシルト質粘土層、標高1.69～1.94mは灰色のシルト質粘土層であり、現代の盛り土となる。

深掘でみられる堆積相

トレンチ調査で得られた層序記録をもとに粒度・堆積構造・色調により堆積相解析を行なった。その特徴に基づいて3つの堆積相が認められた。各堆積相の特徴を以下に述べる。

堆積相F1: 粘土～シルトを主体として、砂粒子が混じる。色調は黒褐色～明褐色までさまざまに変化する。普遍的に根跡がみられ、植物破片も含まれる。人間も含めた動・植物に由来する生物攪乱(バイオターベーション)により極めて不規則に乱され、堆積構造は破壊されている。

堆積相Fsc: シルト～粘土からなり、シルトを主体とすることで堆積相Fmと区別される。まれに砂粒子を含む場合がある。有機物の含有量の違いにより色調は変化し、含有量の多いものは黒褐色を、少ないものは灰黒色を呈する。遺構や遺物がみられる。

堆積相Fm: シルト～粘土からなり、主に粘土からなる。塊状・均質で礫や砂粒子を含まない。色調は黒色～黒褐色を呈する。遺物や遺構がみられる。

堆積相C: 粘土からなり、全体に黒灰色を呈する。堆積構造は確認できず、塊状・均質で礫や砂といった粗粒な粒子を含まない。

深掘層序の放射性炭素年代測定

上中・西屋敷遺跡00E区で6試料、00I区で3試料の放射性炭素年代値を得た(表1)。00E区では約3600年前から約2500年前までにいたる数値年代が得られ、最下位層の砂質シルト層(標高0.36m)から採取した土壌試料は3625, 3620, 3570 cal yrs BP(PLD-2230)の年代較正值を示した。00I区では柱

表 1 上中・西屋敷遺跡 00E 区・00I 区の放射性炭素年代測定結果

調査区	標高 (m)	堆積物	試料の種類	¹⁴ C年代 (yrs BP)	δ ¹³ CPDB (‰)	暦年代較正值 (1σ, cal yrs BP)	1σ 暦年代範囲 (cal yrs BP)	Code No.
00E	0.36	砂質シルト層	土壌	3340±30	-22.7	3625, 3620, 3570	3590-3550(43.7%)	PLD-2230(AMS)
00E	0.61	砂質シルト層	土壌	3495±30	-20.2	3825, 3790, 3760, 3750, 3725	3780-3715(61.6%)	PLD-2231(AMS)
00E	0.65	黒灰～灰色粘土層	土壌	2790±30	-18.2	2915, 2870	2925-2850(92.6%)	PLD-2232(AMS)
00E	0.95	黒灰～灰色粘土層	土壌	2675±30	-19.8	2775	2785-2750(92.7%)	PLD-2233(AMS)
00E	1.23	黒灰～灰色粘土層	土壌	2495±30	-19.5	2710, 2630, 2615, 2580, 2540, 2525, 2510	2650-2490(95.7%)	PLD-2234(AMS)
00E	1.54	灰褐色砂質シルト層	土壌	4245±35	-21.5	4830	4855-4820(74.3%)	PLD-2235(AMS)
00I	0.67	極細粒砂混じり粘土層	ひょうたん	1295±30	-27.7	1260	1270-1230(63.2%)	PLD-2227(AMS)
00I	1.00	緑灰色粘土層	木片	1275±30	-27.2	1255, 1235, 1200, 1185	1210-1175(50.6%)	PLD-2228(AMS)
00I	1.22	黒灰色粘土層	土壌	1260±30	-27.6	1225, 1210, 1180	1240-1195(61.4%)	PLD-2229(AMS)

表 2 濃尾平野、ハンドボーリングによる放射性炭素年代測定結果

Location	Altitude (m)	Material	¹⁴ C age (yrs BP)	δ ¹³ CPDB (‰)	Calibrated age (1σ, cal yrs BP)	1σ age range (cal yrs BP, probability)	Laboratory Code No.(method)
Inokuchi, Inazawa, Aichi Pref.	0.3	humic clay	2450±140	-29.8	2485,2480,2470	2545-2355(57.1%) 2710-2630(25.0%) 2620-2560(17.9%)	PLD-963(GPC)
Inokuchi, Inazawa, Aichi Pref.	2.4	humic sand	3445±30	-22.1	3690	3720-3680(47.0%) 3670-3640(38.8%) 3810-3795(14.2%)	PLD-964(AMS)
Tsuchida, Kiyosu, Aichi Pref.	0	humic silt	2750±30	-22.3	2845	2830-2785(70.9%) 2860-2840(29.1%)	PLD-1074(AMS)
Tsuchida, Kiyosu, Aichi Pref.	-0.5	humic sand	3360±30	-23.2	1680,1670,1660, 1650,1640	1690-1605(97.3%)	PLD-961(AMS)
Tsuchida, Kiyosu, Aichi Pref.	0.4	humic clay	1700±120	-23.7	1710	1825-1560(98.6%)	PLD-960(GPC)
Akitake, Sippou, Aichi Pref.	-1.4	plant fragment	2575±30	-25.8	2740	2750-2710(95.3%)	PLD-1075(AMS)
Ima, Kanie, Aichi Pref.	-2.4	peat	1605±30	-27.8	1520	1465-1420(47.0%) 1530-1510(31.6%) 1500-1485(21.5%)	PLD-1072(AMS)
Amaike, Inazawa, Aichi Pref.	1.5	peat	2850±30	-27.1	2950	2995-2920(80.0%) 2905-2890(20.0%)	PLD-966(AMS)
Amaike, Inazawa, Aichi Pref.	0.4	humic clay	2415±30	-21.6	2425,2360	2465-2355(100%)	PLD-965(AMS)
Rokuwa, Heiwa, Aichi Pref.	-0.4	humic silt	1590±70	-28.8	1515	1550-1405(95.7%)	PLD-958(GPC)
Rokuwa, Heiwa, Aichi Pref.	-1.1	peat	2555±30	-20.7	2735	2750-2710(71.0%) 2560-2545(14.8%) 2630-2615(13.6%)	PLD-1055(AMS)
Rokuwa, Heiwa, Aichi Pref.	-1.7	humic sand	2970±30	-22.9	3160,3150,3140, 3125,3120,3090, 3080	3130-3100(31.1%) 3170-3135(28.1%) 3210-3180(26.1%) 3095-3080(14.7%)	PLD-959(AMS)
Suzugamori, Tatsuta, Aichi Pref.	-2.7	plant fragment	2215±30	-26.8	2300,2240,2205, 2200,2180,2165, 2160	2270-2220(43.2%) 2210-2175(29.6%) 2170-2155(16.9%) 2310-2295(10.2%)	PLD-1076(AMS)
Morikawa, Tatsuta, Aichi Pref.	-1.5	humic sand	1040±100	-28.2	950,940,935	1060-890(79.6%) 865-830(13.2%)	PLD-956(GPC)
Morikawa, Tatsuta, Aichi Pref.	-3.6	peat	2130±30	-26.3	2120	2150-2060(100%)	PLD-957(AMS)
Tadakoshi, Mizuho, Gifu Pref.	5.3	peat	1305±25	-27.2	1260	1250-1235(34.3%) 1275-1255(33.7%) 1200-1185(32.0%)	PLD-978(AMS)
Tadakoshi, Mizuho, Gifu Pref.	2.2	humic sand	4395±25	-27.2	4970	4935-4875(66.6%) 4975-4960(20.7%) 5030-5015(12.7%)	PLD-979(AMS)
Hanatsuka, Mizuho, Gifu Pref.	5.4	peat	1010±20	-29.2	930	950-925(100%)	PLD-972(AMS)
Hanatsuka, Mizuho, Gifu Pref.	2.6	peat	3965±25	-28.1	4420	4445-4405(73.7%) 4505-4485(26.3%)	PLD-973(AMS)
Arata, Oogaki, Gifu Pref.	2.4	peat	1380±30	-26.6	1290	1310-1275(100%)	PLD-1077(AMS)
Arata, Oogaki, Gifu Pref.	2.2	peat	1705±30	-27.3	1605,1580,1575	1625-1560(77.2%) 1690-1670(21.8%)	PLD-1078(AMS)
Yokozone, Oogaki, Gifu Pref.	1.1	plant fragment	3180±30	-26.0	3385	3410-3360(72.6%) 3445-3425(27.4%)	PLD-1079(AMS)
Yokozone, Oogaki, Gifu Pref.	1.3	peat	1260±25	-27.8	1225,1210,1180	1235-1200(64.8%) 1190-1175(24.0%) 1260-1250(11.2%)	PLD-976(AMS)
Yokozone, Oogaki, Gifu Pref.	-2.7	peat	3590±30	-22.0	3885,3875	3910-3835(90.7%)	PLD-1058(AMS)
Yokozone, Oogaki, Gifu Pref.	-4.0	plant fragment	3650±25	-25.8	3975,3940,3930	3985-3955(38.4%) 3950-3925(37.6%) 4065-4050(14.0%) 3920-3910(10.1%)	PLD-977(AMS)
Imao, Hirata, Gifu Pref.	-1.3	humic clay	1255±25	-28.8	1225,1210,1175	1240-1200(62.9%) 1190-1170(25.9%) 1260-1250(11.2%)	PLD-974(AMS)
Imao, Hirata, Gifu Pref.	-2.9	humic clay	3015±25	-25.9	3235,3210	3265-3205(61.9%) 3190-3160(29.4%)	PLD-975(AMS)
Naiki, Kaidu, Gifu Pref.	-1.7	humic clay	1265±30	-27.4	1230,1205,1180	1240-1200(62.4%) 1190-1175(24.2%) 1260-1250(13.4%)	PLD-967(AMS)
Naiki, Kaidu, Gifu Pref.	-2.7	peat	2565±30	-26.6	2740	2750-2710(91.8%)	PLD-968(AMS)

状図全体で約 1200 年前の数値年代が得られ、最下位層の極細粒砂混じり粘土層の標高 0.67m から採取した植物片（ひょうたん）は 1260 cal yrs BP(PLD-2227) の年代較正值であった。

ハンドボーリング試料の放射性炭素年代測定

愛知県から岐阜県にいたる濃尾平野の沖積低地面において、深度約 3～5m のハンドボーリングを実施し、放射性炭素年代測定用の 29 試料を採取した。その結果を表 2 に示す。古い数値年代では、岐阜県瑞穂市只越の標高 2.2m から採取した有機物に富む砂層が 4970 cal yrs BP(PLD-979)、同市花塚の標高 2.6m の泥炭が 4420 cal yrs BP(PLD-973) の暦年代較正值を示した。新しい値では愛知県海部郡立田村森川の標高 -1.5m の有機物に富む砂層が 950, 940, 935 cal yrs BP(PLD-956)、岐阜県瑞穂市花塚の標高 5.4m の泥炭が 930 cal yrs BP(PLD-972) の数値年代を得た。

上中・西屋敷遺跡 00E 区における珪藻化石分析

上中・西屋敷遺跡 00E 区の深掘層序断面の 30 試料を検鏡した。試料全体の珪藻遺骸の保存状態は良好であり、試料 29 のみ 200 個体に満たなかった（153 個体）が、その他の試料からは 200 個体を計数できた。全体に完形率は低いものの、30 属 73 種（1 変種を含む）の珪藻遺骸が確認され、試料全体では淡水生種が多産する。流水不定性種の *Achnanthes linearis*, *Cocconeis placentula*, *Fragilaria ulna*, *Pinnularia viridis* や、流水性種の *Achnanthes convergens*, *Cymbella minuta*, *C. turgidula*, *Gomphonema sumatrense* が、下位層準から上位層準までのほとんどの試料で多産した。また、下位層準からは汽水生種の *Pseudopodosira kosugii* が数%ほどみられる。試料 7～21 では流水不定性・底生種である *Hantzschia amphioxys* の多産が確認される（第 57 図）。

考 察

上中・西屋敷遺跡の堆積環境

上中・西屋敷遺跡における層序解析および放射性炭素年代測定、珪藻化石分析データに基づいて堆積システムの解明を試みる。

ところで、濃尾平野の上部更新統～完新統は更新統最上部の第一礫層・濃尾層と、完新統の南陽層とに区分される（松澤・嘉藤, 1954; 古川, 1972）。南陽層はさらに下位より下部粘土層、上部砂層、最上部粘土層に細分される。また、自然地理学的には完新統の最上部粘土層を沖積陸成層ともよぶ（井関, 1956; 海津, 1979）。今回、上中・西屋敷遺跡の深掘により確認された層序は、上記の完新統南陽層の最上部粘土層にあたる。

上中・西屋敷遺跡 00E 区および 00I 区の深掘柱状図を基に、南北断面図を作成した（第 58 図）。深掘地点間の距離は約 110m と近接するにも関わらず、それぞれの地点でみられる堆積相の累重関係には違いが認められる。

00E 区ではシルトと粘土といった細粒な堆積物からなる堆積相 Fsc と、シルトや粘土の中に砂粒子が分散する堆積相 FI という 2 つの堆積相が累重した。堆積相 Fsc はシルトや粘土の細粒な粒子を主体とし、静水中でゆっくりと堆積したことがわかる。また、色調が黒灰色を呈する部分もみられた。堆積物の色調は有機炭素量、鉄含有量などが決定要因となるが、黒色化は主に植物遺体といった有機物含有量が多いことに起因する。本堆積相の堆積時には、繁茂する植物の遺体が集積し、堆積したものと思われる。これらの特徴から、後背湿地あるいは後背湿地の凹地に出現した池や沼といった環境であったと判断される。堆積相 FI は粘土やシルトといった細粒な粒子と、砂の粗粒な粒子とが渾然一体となっており、堆積構造はみられない。植物の根跡に代表されるような、動・植物に由来するバイオターベーションがみられることから、堆積後には離水環境を経験し、活発な生物活動が行なわれ

たことがわかる。この特徴から堆積相 FI は洪水により上方へ堆積物を累積させるとともに、一時的な堆積の休止と離水をくり返す自然堤防の堆積物である。このことから、調査地点の堆積環境は後背湿地から自然堤防へと変化したことがわかる。

また、放射性炭素年代測定から各堆積環境の数値年代が求められる。00E 区最下位の堆積相 Fsc では標高 0.36m で 3625, 3620, 3570 cal yrs BP(PLD-2230)、標高 0.65m で 2915, 2870, cal yrs BP(PLD-2232)、堆積相 Fsc で示される粘土層最上部の標高 1.23m では 2710 cal yrs BP から 2510 cal yrs BP(PLD-2232) までの年代較正值を得た。このことから、調査地点では約 3600 年前から約 2500 年前まで後背湿地であった。珪藻化石分析からは標高 0.64 ~ 1.32m (試料 7 ~ 21) で流水不定性・底生種の *Hantzschia amphioxys* の増加がみられた。*Hantzschia amphioxys* は陸上の好気的環境にも適応性があり、耐乾性のつよい陸生珪藻の A 群に分類されている (伊藤・堀内, 1991)。調査地点にひろがる後背湿地は離水して、一時的に好気的環境にさらされる時期もあったと推定される。

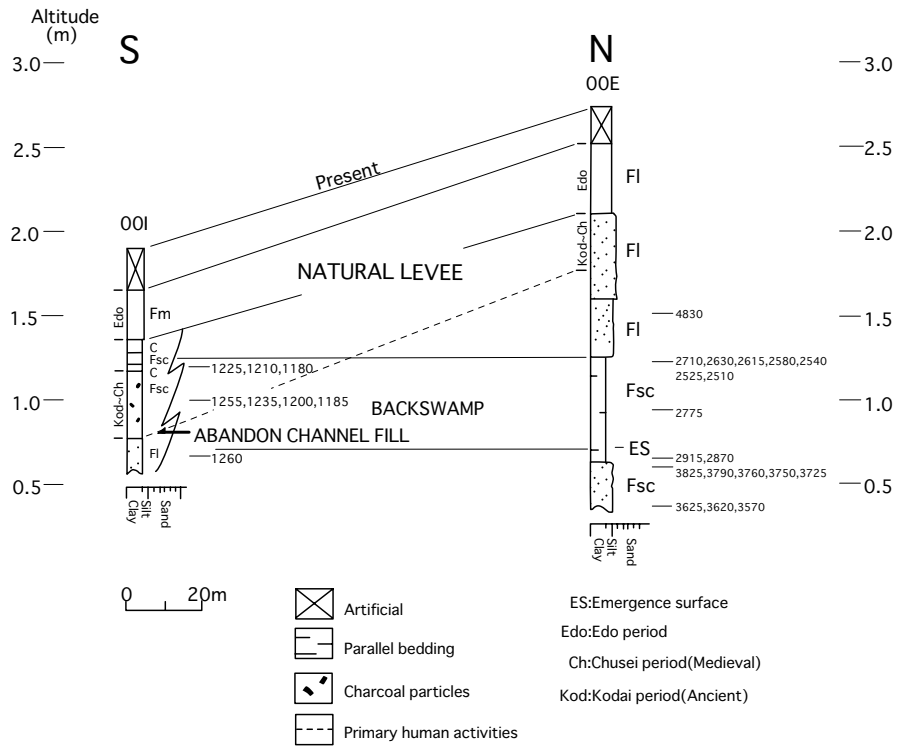
ところで、年代値に関して、濃尾平野沖積低地面のハンドボーリングの放射性炭素年代測定の結果では、岐阜県大垣市横曽根町の標高 -4.0m の植物片が 3975, 3940, 3930 cal yrs BP(PLD-977)、標高 -2.7m の泥炭が 3885, 3875 cal yrs BP(PLD-1058) であった (表 2)。濃尾平野西部では約 3500 年前よりも古い年代値が標高 0m より低い層準で得られるのに対し、濃尾平野中央部の上中・西屋敷遺跡の最下位層では標高 0.36m で 3625, 3620, 3570 cal yrs BP(PLD-2230) であった。完新統上部堆積物の堆積深度は、東で浅く西で深くなる、全体に西へ傾斜した地層であることがわかる。

その上位の自然堤防を構成する堆積相 FI について、堆積相 FI 直下の粘土層最上部 (標高 1.23m) で 2710 cal yrs BP から 2510 cal yrs BP(PLD-2232) までの年代較正值を得た。このことから、調査地点において後背湿地から自然堤防への堆積環境変化が生じたのが約 2500 年前以降である。

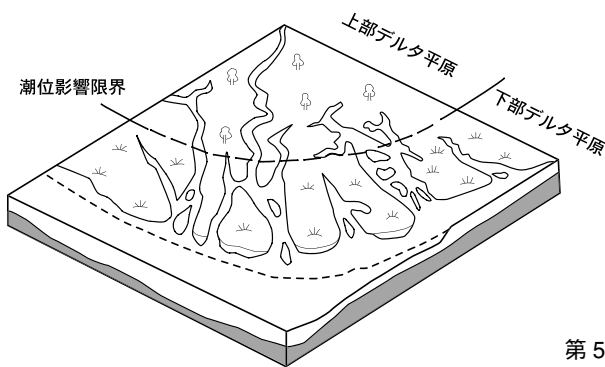
いっぽう、00I 区では堆積相 FI・Fsc・C・Fm の 4 つの堆積相が確認された。標高 0.80 ~ 1.20m の堆積相 Fsc に区分される緑灰色粘土層には木片や炭化物が無秩序に含まれ、標高 0.80m 付近には 6 ~ 8 世紀頃の考古遺物の出土もみられた。また、標高 1.24 ~ 1.30m の赤褐色粘土層には濃橙色のスラグ状のものも確認された。それらの観察事実から、00I 区深掘でみられる堆積物は人為的な影響を被った堆積物である。加えて、00I 区の各層準から得られた年代値は 00E 区に比べて新しい値を示した。例えば、00E 区の標高 0.65m の粘土層が 2915, 2870 cal yrs BP(PLD-2232) であるのに対し、標高 0.67m とほぼ同じ標高である 00I 区の極細粒砂混じり粘土層で 1260 cal yrs BP(PLD-2227)、00E 区の標高 0.95m で 2775 cal yrs BP(PLD-2233) に対し、00I 区の標高 1.00m の緑灰色粘土層で 1255, 1235, 1200, 1185 cal yrs BP(PLD-2228)、00E 区標高 1.23m の粘土層で 2710, 2630, 2615, 2580, 2540, 2525, 2510 cal yrs BP(PLD-2234)、00I 区の標高 1.22m の粘土層で 1225, 1210, 1180 cal yrs BP(PLD-2229) であった。00E 区で約 2900 年前から約 2500 年前の年代較正值をもつ層準は、00I 区のほぼ同じ標高では全体に約 1200 年前と新しい数値年代をもつ。00E 区の層準は側方へは連続せず、00I 区を不連続境界として、より新しい堆積物に覆われていることがわかる。これに関して考古学的所見では、00I 区およびその西側の調査区 00H 区にいたる南端に河道跡 (NR01) が検出されている (宮腰・織部, 2001)。河道跡の存在は、それ以前の堆積物が浸食を経験したことの証拠であり、00I 区で確認される河道跡縁辺が浸食面にあたる。00I 区の堆積物が約 1200 年前という、00E 区に比べると新しい年代値を示す事実は、考古学的に河道跡が検出されている事実と矛盾しない。

濃尾平野中央部における堆積環境

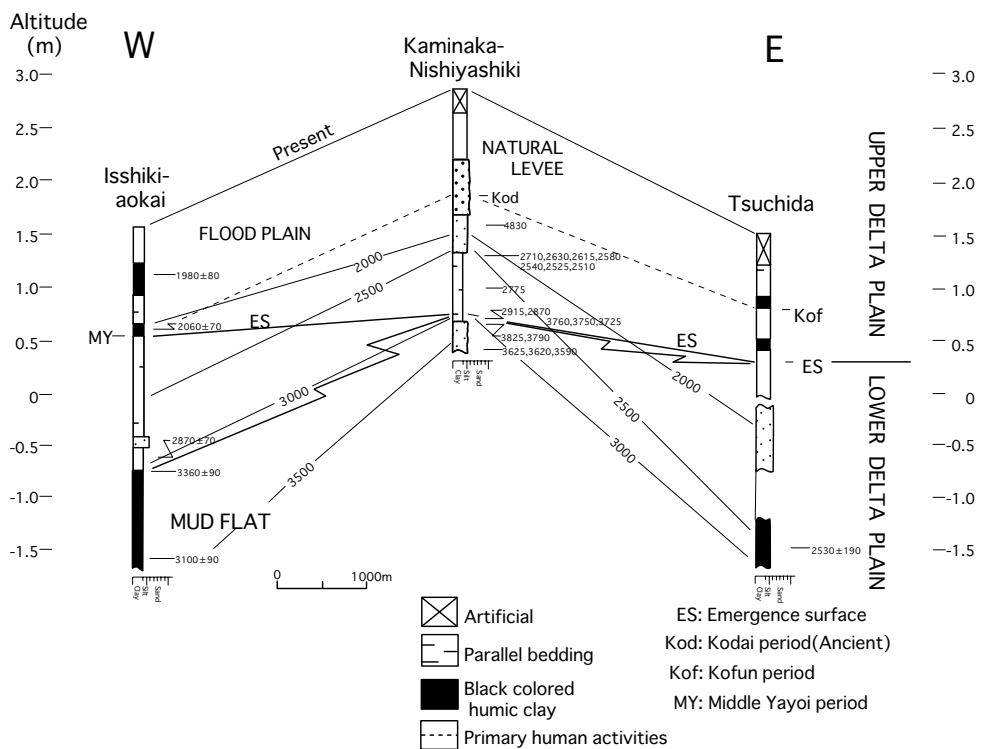
上中・西屋敷遺跡の深掘層序解析と珪藻化石分析の結果から、調査地点では約 3600 年前から約



第 58 図 上中・西屋敷遺跡における南北模式層序断面図



第 59 図 三角州における環境模式図



第 60 図 濃尾平野中央部における堆積環境模式図

500 年間隔の等時間線も記す。一色青海遺跡は鬼頭・堀木編(1998)、鬼頭ほか(1998a, 1998b, 2000)を、土田遺跡は森・前田(1991)の分析結果を基にした。

2500年前までが後背湿地で、約2500年前以降に後背湿地から自然堤防へと堆積環境が変化した。

さて、上中・西屋敷遺跡の周辺には調査地点の西方約3.5km、稲沢市儀長町・中島郡平和町の一色青海遺跡（蔭山編，1998）や、西方約3.0kmの稲沢市儀長町には儀長正楽寺遺跡（池本編，1996）、東方約3.4km、西春日井郡清洲町には土田遺跡（赤塚編，1987；城ヶ谷編，1991）がある。それらのうち、地下層序について自然科学的な考察が加えられたものとして、一色青海遺跡（鬼頭・堀木編，1998；鬼頭ほか，1998a, 1998b, 2000）と土田遺跡（森・前田，1991）がある。ここでは一色青海遺跡と土田遺跡、そして今回の解析結果を基にして、濃尾平野中央部における堆積環境の変遷について述べる。

鬼頭ほか（1998b）は一色青海遺跡の層序解析と珪藻化石分析を行ない、2870 ± 70 yrs BP（Gak-19717）を示す層準（標高 -0.65m）を境として、下位層では汽水生種が、上位層では淡水生種群が卓越する結果を報告した。とくに下位層からは汽水泥質干潟指標種群（小杉，1988）である *Diploneis smithii* が多産し、かつ、高潮位高度指標種（Tanimura and Sato, 1997）の *Pseudopodosira kosugii* がみられた。いっぽう、森・前田（1991）は土田遺跡の珪藻化石分析を行ない、標高 0 ~ 0.15m に *Pseudopodosira kosugii*（報告では *Melosira* sp. -A）の多産層準を報告した。*Pseudopodosira kosugii* は従来、*Melosira* sp. -n あるいは *Melosira* sp. -A として *Melosira* 属の種類とされていた珪藻（小杉，1988；Sato et al., 1996）で、Tanimura and Sato（1997）により新種記載がなされたものである。本種は干潟の潮間帯上部に発達した塩水湿地に出現し、生息する塩分濃度範囲は 2 ~ 12‰（小杉，1988）から最適 20%（Tanimura and Sato, 1997）とされる。また、第 59 図に示すように、三角州堆積物の上部を構成する頂置層は高潮位線を境として淡水河川の卓越する上部デルタ平原と、海水の影響、とくに潮汐の影響のつよい下部デルタ平原に分けられる（Coleman and Prior, 1980）。上で述べた層序解析と珪藻化石分析との結果から、一色青海遺跡の下位層から標高 -0.65m までの層準や、土田遺跡の標高 0m 付近までの層準は、潮位の影響を被る上限付近の下部デルタ平原であったと考えられる。対して、今回の調査地点では *Pseudopodosira kosugii* といった汽水生種が数%みられたものの、全体では淡水生種が卓越した。このように、一色青海遺跡や土田遺跡では潮汐要素が、上中・西屋敷遺跡では淡水環境の卓越する河川要素がつかったことがわかる。また、淡水は、説明するまでもなく人類の生命活動に必要な不可欠なものである。上中・西屋敷遺跡 00E 区の砂質シルト層（標高 0.36m）では 3625, 3620, 3570 cal yrs BP（PLD-2230）の較正年代値が得られており、一色青海遺跡や土田遺跡よりもはやい時期に、すでに淡水が卓越する環境であったことがわかる。

ところで、上中・西屋敷遺跡 00E 区では 6 層準の放射性炭素年代値が求められた。一色青海遺跡では 5 層準（鬼頭ほか，1998b）、土田遺跡では残念ながら 1 層準しか数値年代を得ていないが、標高 -1.5m の腐植質シルト層の ¹⁴C 年代は 2530 ± 190（GaK-14982）を示した（森・前田，1991）。それらの数値年代を参考に約 3500 年前から約 2000 年前までを 500 年間隔で結び、等時間線を描いた（第 60 図）。なお、年代値の少ない、あるいは得られていない層準については、堆積物の層相や確実に等時間線が描ける線分の傾斜角を目安に見積もった。等時間線は時間ごとの堆積面を示しており、それは当時の堆積地形の起伏差も示す。図をみると、今回の調査が行なわれた上中・西屋敷遺跡で等時間線はもっとも標高の高い層準を通る。この事実は、言い換えれば、上中・西屋敷遺跡を挟んで、その東と西方向へ標高を減じるような凸地形を形成しているといえる。また、堆積物の上方への累積変化量を Δh (mm)、時間の変化量を Δt (year) とすれば、堆積速度 (v mm/y) は $v = \Delta h / \Delta t$ となる。ここで、今回の場合では 500 年ごとの等時間線のため $\Delta t = \text{const}$ （一定：500 年）となり、堆積速度は累積変化量の大小、つまり等時間線間隔の大小として捉えられる。等時間線間隔がひろければ堆積速度が速く、せまければ遅くなる。そのようにしてみると、上中・西屋敷遺跡と土田遺跡では間隔

がせまく堆積速度は遅い。対して、一色青海遺跡では間隔がひろく、堆積速度が速かったことがわかる。このように、上中・西屋敷遺跡をはさんで東方では堆積速度は相対的に遅く、西方で相対的に速い。これは海側（伊勢湾）へ堆積物を運搬する主要なバイパスである活動的流路が、上中・西屋敷遺跡と一色青海遺跡の間に存在することを示唆するものである。

稲沢地域は木曾川から派生した三宅川が蛇行ループを描く場所であるとともに、典型的な自然堤防地帯である。例えば、稲沢市矢合町、法花寺町、堀之内町、井堀町に見出すことができる。それらの自然堤防の形成された時代について、井関（1994）は稲沢市稲島町石畑の東畑廃寺遺跡で7世紀中頃から平安時代後期の11世紀にかけての古瓦層の上に、層厚80cmほどの自然堤防をつくった褐色砂層が堆積している事実をあげた。加えて、砂層中に鎌倉時代の山茶碗がみられることから、地形としての自然堤防は11世紀以降に形成されたとした。以上のように、井関（1994）は自然堤防形成の証拠を考古遺物に求めた。いっぽう、堆積学的にみると、自然堤防堆積物として捉えられる堆積相FIが約2500年前から出現したことがわかり、調査地点における自然堤防形成の歴史は井関（1994）よりも古くなり、およそ2500年前以降から形成されてきたものであるといえる。

三角州帯は陸地と海水の交わる境界線（海岸線）をもつとともに、人類に必要な淡水環境を供給する地形要素でもある。そこは、漁労・海運や製塩といった生業活動が想定されるため考古学者にとっても興味のもたれる場所であろう。今後、調査地点周辺において深掘トレンチ調査を行なえる機会が増えれば、さらに詳細な堆積環境変化を提示できよう。

謝 辞

本論を作成するにあたり、濃尾平野の完新統堆積物について名古屋大学大学院環境学研究科地理学教室の海津正倫教授にはご教示・ご助言を賜った。放射性炭素年代測定では株式会社パレオ・ラボ東海支店の山形秀樹氏にお世話になった。ハンドボーリングによる掘削作業では金沢学院大学学生の石田 伸氏、天理大学学生の服部博樹氏にお手伝いいただいた。柱状図の整理作業では愛知県埋蔵文化財センター元研究補助員の尾崎和美氏と研究補助員の上田恭子氏、図面のトレース作業では研究補助員の岩本佳子氏、試料の保管・整理および図面作成では元整理補助員の服部恵子氏・田中和子氏・宇佐美美幸氏・山口きみ代氏、整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文 献

- 赤塚次郎編，1987，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第2集「土田遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，117p.
- Coleman, J. M. and Prior, D. B., 1980, Deltaic sand bodies. Amer. Assoc. Petrol. Geol. Continuing Education Course Note, No.15.
- 古川博恭，1972，濃尾平野の沖積層—濃尾平野の研究 その1—，地質学論集，7, 39-59.
- 池本正明編，1996，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第68集「儀長正楽寺遺跡」，愛知県埋蔵文化財センター，64p.
- 井関弘太郎，1956，日本周辺の陸棚と沖積統基底面との関係について，名古屋大学文学部研究論集，14, 85-102.
- 井関弘太郎，1994，自然堤防はいつ、車窓の風景科学—名鉄名古屋本線編—，名古屋鉄道株式会社，35-39.
- 伊藤良永・堀内誠示，1991，陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用，珪藻学会誌，6, 23-45.
- 城ヶ谷和広編，1991，愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集「土田遺跡Ⅱ」，愛知県埋蔵文化財センター，

58p.

- 蔭山誠一編, 1998, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集「一色青海遺跡 考古編」, 愛知県埋蔵文化財センター, 262p.
- 鬼頭 剛・堀木真美子編, 1998, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集「一色青海遺跡 自然科学・考察編」, 愛知県埋蔵文化財センター, 177p.
- 鬼頭 剛・尾崎和美・森 勇一, 1998a, 一色青海遺跡の地質と古環境, 鬼頭 剛・堀木真美子編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集「一色青海遺跡」自然科学・考察編, 愛知県埋蔵文化財センター, 1-8.
- 鬼頭 剛・尾崎和美・辻本裕也・伊藤良永・馬場健司, 1998b, 微化石分析による一色青海遺跡の古環境, 鬼頭 剛・堀木真美子編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集「一色青海遺跡」自然科学・考察編, 愛知県埋蔵文化財センター, 13-36.
- 鬼頭 剛・森 勇一・堀木真美子・尾崎和美, 2000, 弥生時代中期の乾燥環境を示す生物相: 濃尾平野一色青海遺跡を例として、日本文化財科学会第 17 回大会研究発表要旨集, 日本文化財科学会, 82-83.
- 小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 第四紀研究, 27, 1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 876p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 230p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.
- 松澤 勲・嘉藤良次郎, 1954, 名古屋付近の地質 同地質図, 愛知県, 35p.
- Miall, A. D., 1977, A review of the braided-river depositional environment, Earth-Science Rev., 13, 1-62.
- Miall, A. D., ed., 1978, Fluvial sedimentology, Canadian Society of Petroleum Geologists, Memoir 5, 859p.
- Miall, A. D., 1996, The geology of fluvial deposits, Springer-Verlag, New York, 582p.
- 宮腰健司・織部匡久, 2001, 上中・西屋敷遺跡, 平成 12 年度愛知県埋蔵文化財センター「年報」, 愛知県埋蔵文化財センター, 34-37.
- 森 勇一・前田弘子, 1991, 珪藻分析からみた愛知県土田遺跡における古環境, 城ヶ谷和広編 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 23 集「土田遺跡Ⅱ」, 愛知県埋蔵文化財センター, 17-25.
- Sato, H., Tanimura, Y. and Yokoyama, Y., 1996, A characteristic form of diatom *Melosira* as an indicator of marine limit during the Holocene in Japan, The Quaternary Research, 35, 99-107.
- Tanimura, Y. and Sato, H., 1997, *Pseudopodosira kosugii*: A new Holocene diatom found to be a useful indicator to identify former sea-levels, Diatom Research, 12, 357-368.
- 海津正倫, 1979, 更新世末期以降における沖積低地の古地理, 地理評, 52, 199-208.

第2節 昆虫化石にもとづく環境考古学—上中・西屋敷遺跡

森 勇一（愛知県立明和高等学校）・上田恭子（同）

1. はじめに

先史～歴史時代の地層中には、土器や石器、木製品など人が製作し廃棄した生活用具の断片が埋もれていることがある。こうした生活用具の形や表面模様、製作技法などの情報を集積し、時代や人々の暮らしなどについて考察するための取り組みが長期にわたり蓄積されてきた。考古学は、このような土に埋もれた人の製作物から過去を復元する作業であるといえる。

土の中には人の痕跡のみならず、人間生活を支えた自然、山や川や森、どんな木が生えていて地表面はどんな様子だったかとか、その当時よく雨が降り冬はことさら寒かったとか、しばしば地震や洪水が発生し人々を苦しめたとか、人を取り巻く自然環境に関わる情報も、人の製作物以上に土中に埋もれている。この種の研究分野は、環境考古学とか環境史学と呼ばれ、欧米諸国に比べ日本では著しく遅れていたが、近年ようやくその成果が実りつつある（辻編、2000；松井編、2003；安田編、2004）。

考古学が断片から時代や文化の諸相、集団の動きなどについて考究するのと同じく、環境考古学や環境史学の方法も、自然を構成する岩石や木片・貝・骨・昆虫などの断片を用いて、自然環境やその時代性、人の自然への働きかけなどについて明らかにし、これをできる限り普遍化しようという試みである。

筆者は、これまでこうした研究に多数たずさわってきた（森、1994,1999a,1999b,2000,2002,2003a,2003b,2004）。本論は、上中・西屋敷遺跡における昆虫分析にもとづく環境考古学の成果を示したものである。

2. 試料および分析方法

上中・西屋敷遺跡は、稲沢市中心部より南によった同市北島町に位置する古墳時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。本遺跡は木曾川水系の網状流（現大江川など）が乱流する沖積平野内に所在している。遺跡の現標高は、1.5～2.0mであり、遺跡全体が自然堤防上に位置している。

昆虫分析試料は、上中・西屋敷遺跡00C区 SX03とされる土坑（池ともいわれる）内から、愛知県埋蔵文化財センター科学分析室の鬼頭剛調査研究員により採取されたものである。分析試料は、土坑内堆積物の最下層（VI層）より採取されており、堆積物の層相は、暗緑灰色の砂質シルト層であった。土坑内堆積物の下位より、16世紀後半の天目茶碗が出土しており、そのためこの堆積物の相対年代は16世紀後半より新しく、おそらく江戸時代中期～後期と推定されている（愛知県埋蔵文化財センター、2001）。昆虫化石の抽出は、水洗浮遊選別法を中心に一部ブロック割り法を併用して実施した。なお、浮遊選別にあたっては、径200mm、500 μ mの篩を使用した。分析に供したサンプルの湿潤重量は、水洗浮遊選別法では2.0kg、ブロック割り法では8.2kgであった。これらは、同一試料を検出段階において、あらかじめ分割したものである。

昆虫化石の同定は、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ実施した。昆虫化石は、いずれも節片に分離した状態で検出されており、そのため、本論に記した産出点数は、昆虫の個体数を示したのではない。

3. 昆虫化石の分析結果

A. 水洗浮遊選別法

水洗浮遊選別法により、試料中より検出された昆虫化石は計 65 点であった (表 3)。これらのうちのいくつかについては、写真 5 に実体顕微鏡写真を掲げた。

水洗浮遊選別法の特徴として、検出される昆虫が節ごとに分離しいずれも小さいものばかりであるという難点がある。そのため、種の同定まで至らず、科や属単位の同定にとどまったものが多い。

出現昆虫を分類群ごとにみると、目レベルまで同定したものが 2 目 3 点、科レベルまで分類できたものの 10 科 39 点、属レベル 5 属 13 点、種まで同定できたものは 5 種 10 点であった。

主な出現種では、陸生の食植性昆虫で畑作害虫として知られるヒメコガネ *Anomala rufocuprea* が 6 点、同じく陸生・食植性昆虫で畑作害虫の一種ドウガネブイブイ *A. cuprea* が 1 点、両種を含み日本に現在 16 種生息するサクラコガネ属 *Anomala* sp. なる分類群が計 8 点認められた。サクラコガネ属に分類した昆虫化石は、脛節だったり前胸背板片だったり、種まで同定するにはいささか心許ない微小体節片であるため、このように属レベルの同定にとどめることになった。おそらくその大半は、ヒメコガネの体節に由来すると考えられる。なお、ヒメコガネ・ドウガネブイブイともに人間の介在した植生の存在を強く示唆する昆虫である。

水生昆虫では、止水域に多いキベリクロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicallis*、稲作害虫として知られるイネネクイハムシ *Donacia provosti* がそれぞれ 1 点ずつ検出された。

地表性歩行虫では、人為度の高い裸地的環境下の人糞や獣糞に集まるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp. が 2 点検出され、これ以外に主に獣糞に飛来するマグソコガネ *Aphodius rectus* が 1 点確認された。このほか、湿潤地表面を示唆するツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp.、ほぼ同様の地表環境に生息するミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp.、主に畑作地の人為度の高い乾燥地表面上に多いアオゴミムシ属 *Chlaenius* sp. がそれぞれ 1 点ずつ見いだされた。

ほかに、陸生・食植性のゾウムシ科 Curculionidae (3 点)、同じくハムシ科 Chrysomelidae (2 点)、コガネムシ科 Scarabaeidae (6 点)、オトシブミ科 Attelabidae (1 点)、カメムシ目 Hemiptera (2 点)、テントウムシ科 Coccinellidae (1 点) をはじめ、食植性昆虫の産出が目だった。

これ以外に、水生・食植性のガムシ科 Hydrophilidae (1 点)、水生・食肉性のゲンゴロウ科 Dytiscidae (1 点) などが発見された。

オサムシ科 Carabidae の産出点数は 19 点と大変多かった。本分類群に含まれる昆虫の種数は狭義のオサムシ亜科 Carabinae を除き日本に約 1200 種にも達する。含まれる種数が多いために、塵芥や汚物などで汚染された人為度の高い地表面上から森林内の落葉層中、河川敷やがれ場、水田周辺、畑・ゴミ捨て場・腐葉土内など、多様な地表環境を想定することとなり、古環境推定には必ずしも有効ではない。ハネカクシ科 Staphylinidae (2 点) についても同様である。

B. ブロック割り法

上中・西屋敷遺跡の分析試料中よりブロック割り法により抽出された昆虫化石は、計 58 点であった (表 4)。なお、産出した昆虫化石のうち、主なものについては、写真 5 に実体顕微鏡写真を掲げた。

特徴的な種についてみると、まず地表性歩行虫では、湿潤地表面上や水田内においてウンカなどの稲作害虫を捕食するヤマトトクリゴミムシ *Lachnocrepis japonica* (1 点) をはじめ、雑食性の地表性歩行虫で湿潤地表面上に多いヒラタゴミムシ族 Platynini が 1 点、主に乾燥地表面上に生息し、小昆虫やミズ・生ゴミなどを食する食肉性のアオゴミムシ属 (1 点)、ナガゴミムシ属 *Pterostichus* sp. (1 点) などが見いだされた。

また、裸地的環境下の人糞や獣糞に集まるエンマコガネ属 *Onthophagus* sp. が 1 点検出されたほかは、

表3 上中・西屋敷から産出した昆虫化石（水洗浮遊選別法）

No.	昆虫名	学名	部位	食性	生態
1	アオゴミムシ属	<i>Chlaenius</i> sp.	右上翅	食肉性	地表性
2	マグソコガネ	<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)	左上翅	食糞性	地表性
3	ハネカクシ科	Staphylinidae	上翅片	雑食性	地表性
4	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
5	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	上翅片	食植性	好植性
6	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	上翅片	食肉性	水生
7	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
8	ハネカクシ科	Staphylinidae	上翅片	雑食性	地表性
9	双翅目	Diptera	困蛹	雑食性	地表性
10	オトシブミ科	Attelabidae	前胸背板	食植性	好植性
11	イネネクイハムシ	<i>Donacia provosti</i> Fairmaire	右上翅	食植性	水生
12	ゾウムシ科	Curculionidae	右上翅	食植性	好植性
13	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	雑食性	地表性
14	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	腹部	食糞性	地表性
15	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
16	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
17	オサムシ科	Carabidae	胸部	雑食性	地表性
18	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
19	オサムシ科	Carabidae	上翅片	雑食性	地表性
20	ハムシ科	Chrysomelidae	上翅片	食植性	好植性
21	カメムシ目	Hemiptera	上翅片	食植性	好植性
22	コメツキムシ科	Elateridae	上翅片	食植性	好植性
23	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	雑食性	地表性
24	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
25	コメツキムシ科	Elateridae	上翅片	食植性	好植性
26	ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.	左上翅	雑食性	地表性
27	コガネムシ科	Scarabaeidae	右上翅	食植性	好植性
28	コガネムシ科	Scarabaeidae	腹部背板	食植性	好植性
29	オサムシ科	Carabidae	腿節	雑食性	地表性
30	オサムシ科	Carabidae	頭部	雑食性	地表性
31	オサムシ科	Carabidae	胸部	雑食性	地表性
32	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	脛節	食植性	好植性
33	コガネムシ科	Scarabaeidae	小楯板	食植性	好植性
34	ガムシ科	Hydrophilidae	頭部	食植性	水生
35	カメムシ目	Hemiptera	腹部	食植性	好植性
36	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	腹部	食植性	好植性
37	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	腿節	食糞性	地表性
38	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	脛節	食植性	好植性
39	コメツキムシ科	Elateridae	右上翅	食植性	好植性
40	オサムシ科	Carabidae	頭部	雑食性	地表性
41	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	雑食性	地表性
42	オサムシ科	Carabidae	中胸腹板	雑食性	地表性
43	ハムシ科	Chrysomelidae	右上翅	食植性	好植性
44	ゾウムシ科	Curculionidae	前胸背板	食植性	好植性
45	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	前胸背板片	食植性	好植性
46	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	前胸背板片	食植性	好植性
47	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
48	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
49	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸腹板	食植性	好植性
50	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
51	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	脛節	食植性	好植性
52	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	雑食性	地表性
53	オサムシ科	Carabidae	腹部	雑食性	地表性
54	オサムシ科	Carabidae	胸部	雑食性	地表性
55	テントウムシ科	Coccinellidae	上翅片	食肉性	好植性
56	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
57	キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	上翅片	食肉性	水生
58	ゾウムシ科	Curculionidae	右上翅	食植性	好植性
59	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
60	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
61	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	前胸背板片	食植性	好植性
62	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	上翅片	食植性	好植性
63	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板片	食植性	好植性
64	ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	右上翅	雑食性	地表性
65	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性

表4 上中・西屋敷から産出した昆虫化石（ブロック割り法）

No.	昆虫名	学名	部位	食性	生態
1	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	腹部腹板	食植性	好植性
2	サクラコガネ	<i>Anomala daimiana</i> Harold	上翅片	食植性	好植性
3	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
4	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
5	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
6	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
7	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
8	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
9	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
10	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	脛節	食植性	好植性
11	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板片	食植性	好植性
12	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
13	ヒラタゴミムシ族	Platynini	前胸背板	雑食性	地表性
14	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	脛節	食植性	好植性
15	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
16	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
17	ナガゴミムシ属	<i>Pterostichus</i> sp.	前胸背板	食肉性	地表性
18	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	前胸背板	食植性	好植性
19	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
20	オサムシ科	Carabidae	頭部	食肉性	地表性
21	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
22	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	腿節	食植性	好植性
23	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
24	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
25	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	左上翅	食植性	好植性
26	ナガゴミムシ属	<i>Pterostichus</i> sp.	前胸背板	食肉性	地表性
27	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板	食植性	好植性
28	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸背板片	食植性	好植性
29	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	前胸背板片	食植性	好植性
30	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
31	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	腹部腹板	食植性	好植性
32	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	上翅片	食植性	好植性
33	不明甲虫	Coleoptera	腿節	不明	不明
34	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	前胸腹板	食植性	好植性
35	ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae	後胸腹板	食肉性	水生
36	アオゴミムシ属	<i>Chlaenius</i> sp.	前胸背板	食肉性	地表性
37	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	腹部腹板	食糞性	地表性
38	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
39	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	腿脛節	食植性	好植性
40	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	腿節	食植性	好植性
41	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
42	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	腿節	食植性	好植性
43	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	脛節	食植性	好植性
44	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	脛節	食植性	好植性
45	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
46	イネネクイハムシ	<i>Donacia provosti</i> Fairmaire	左上翅	食植性	水生
47	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	前胸背板	食植性	好植性
48	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
49	コガネムシ科	Scarabaeidae	上翅片	食植性	好植性
50	オサムシ科	Carabidae	腹部腹板	食肉性	地表性
51	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
52	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
53	キベリクロヒメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	上翅片	食肉性	水生
54	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	上翅片	食植性	好植性
55	ヤマトトックリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> Bates	左上翅	雑食性	地表性
56	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	腹部腹板	食植性	好植性
57	ルリハムシ	<i>Linaeidae aenea</i> (Linne)	右上翅	食植性	好植性
58	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	上翅片	食植性	好植性

とくに人為度の高い場所に生息する種群は確認されていない。

陸生の食植性昆虫では果樹や畑作物などを加害するヒメコガネが29点と多数産出した。これに、種を同定することができないものの同種と考えてよいサクラコガネ属 *Anomala* sp. の体節片が計10点伴われた。このほか、ドウガネブイブイ(3点)、サクラコガネ *A. daimiana* (1点)、コガネムシ *Mimela splendens* (1点)、ルリハムシ *Linaeidae aenea* (1点) など、畑作地に多い昆虫が認められた。

水生昆虫では、食肉性のヒメゲンゴロウ亜科 Colymbetinae (1点)、キベリクロヒメゲンゴロウ (1点) が発見され、稲作害虫のイネネクイハムシも1点確認されている。

4. 上中・西屋敷の古環境

A. 古環境復元の方法

昆虫はあらゆる生物のなかで最も多くの種を有し、環境による棲み分けと種の分化が顕著にみられる生物の一つである。なかでも鞘翅目はすべての目を通じて最多の種数を誇り、生息環境も多岐にわたっている。遺跡から発見される昆虫化石に鞘翅目の出現頻度が高いのは、こうした鞘翅目の種数や個体数の多さ、その生活史上の特性に加え、鞘翅目特有の硬化した外骨格が土中に埋もれたのち残りやすく、かつまた発見されやすい理由の一つになっている。その結果、本論で扱った昆虫化石もその大部分が鞘翅目で占められた。

鞘翅目を生息環境によって分類すると、森林や草原内の樹葉・草本植生・朽ち木などの植生に依存するもの(好植性昆虫)、畑や砂地・腐植土中・動物の糞やその屍体などの地表面上に認められるもの(地表性歩行虫)、池沼や河川・水溜り・水田・湿地帯などの水中ないし水面上に生活するもの(水生昆虫・湿地性昆虫)などがあり、その生息地はきわめて変化に富んでいる。また、食性についても食植性から食肉性・雑食性・食糞性・腐食性・食菌性など多様な食物に依存して生活している。

日浦ほか(1984)は、遺跡をとりまく古環境の復元に有効な昆虫化石の指標性について、「水域環境の指標昆虫」・「植生環境の指標昆虫」・「栽培及び農耕の指標昆虫」・「汚物集積の指標昆虫」・「地表環境の指標昆虫」の5項目をあげている。その後、森(1994)は遺跡産出の昆虫分析を通じ、栽培及び農耕の指標昆虫・水域環境の指標昆虫を含め、表4に示したような指標性昆虫を特定し古環境の復元を行った。

B. 昆虫群集が示す古環境とその意義

上中・西屋敷遺跡の試料中よりから見いだされた昆虫化石は必ずしも多くない。もとよりこれらは当時、生きていた昆虫の体節片の一部である。そのため、まずこのことに由来する同定上の問題点について明らかにしておかなければならない。端的に言えば、同定結果にどの程度信頼性があるかという点であろう。この種の疑問には、土中より発見された昆虫片と現生標本を顕微鏡下で見比べてみるのが一番である。上翅や前胸背板など現生標本の体節が形態や大きさのみならず、表面構造・点刻列・しわの様子など驚くほど多様であり、体節片のみで種を識別するに十分な特徴を備えていて、これらと遺跡から見つかった昆虫化石を照合することにより、種レベルの分類・同定が可能である。仮りに種が特定できない場合には、属 Genus や科 Family など、同定精度をより大きな分類群でとどめることになるのである。

次に見つかった昆虫が、どの程度遺跡の古環境とフィットしているかという疑問に答えなければならない。このことについても、幸い昆虫が死後体節片に分離し地層中に挟み込まれるまでの間に、時間のうえでも空間のうえでもほとんどギャップがないことが多くの実例をもとに示されている(森、1994)。つまり、珪藻や花粉などの微化石に比べ格段に現地性化石の割合が高いのである。

とは言っても昆虫化石が見つからなければ古環境の推定ができないのも確かなことである。つまり発見された昆虫化石からは情報が得られても、見つからないために分からない周辺環境は想像するし

かないのである。以上のような前提条件を考慮したうえで、古環境の復元を試みる。

上中・西屋敷からはオサムシ科・エンマコガネ属・マグソコガネ・ハネカクシ科・ツヤヒラタゴミムシ属・ミズギワゴミムシ属など、地表性昆虫の出現率が高い。このことは、本遺跡周辺に、彼らの生息を許容する餌資源が豊富に存在したことを示している。試料中に含有されるエンマコガネ属やマグソコガネからは、人の集中居住に伴い環境汚染が及んでいたことが考えられる。

また、稲作害虫のイネネクイハムシの発見は、遺跡の近傍に水田が想像した可能性を示唆している。ヒメコガネ・ドウガネブイブイ・サクラコガネ属・コガネムシ科などの食植性昆虫は、元来畑作地に多い種群であり、このため、遺跡の背後に果樹や各種畑作物などが植栽されていたことを示すものとして重要である。オトシブミ科やゾウムシ科・ハムシ科などの食植性昆虫などの出現も、こうした推定を補強するものといえる。

水域に関する情報では、ゲンゴロウ科・ガムシ科などの水生昆虫の出現、水深の浅い止水域に生息するキベリクロヒメゲンゴロウの産出から、遺跡内かこの周辺にため池や水田湿地などが存在したことを示している。

5. まとめ

上中・西屋敷遺跡の遺物包含層中より産出した昆虫化石を同定・分析し、その群集組成から江戸時代中期から後期にかけての古環境を復元した。昆虫群集には、エンマコガネ属やマグソコガネなど人糞や獣糞に集まる食糞性昆虫が認められた。このほか、地表面上に存在するエサを求めて徘徊する地表性歩行虫が多く検出され、遺跡周辺は人為による環境汚染が進行していたことを示している。

植生環境に関する情報では、稲作害虫として著名なイネネクイハムシが検出されたことから、上中・西屋敷遺跡周辺に水田が存在したことが考えられる。このことは、湿地や湿潤地表面の存在を示すキベリクロヒメゲンゴロウやミズギワゴミムシ属・ツヤヒラタゴミムシ属など水田周辺に多い昆虫化石の出現によっても示される。

また、イモ類やマメ・果樹等を食害するヒメコガネ・ドウガネブイブイ・サクラコガネ属・コガネムシ科などの食植性の畑作害虫の出現からは、上中・西屋敷遺跡付近に人為度の高い畑作空間が展開していたことが考えられる。

文 献

- 愛知県埋蔵文化財センター（2001）愛知県埋蔵文化財センター年報（平成12年度）。34-37。
- 辻誠一郎編（2000）考古学と植物学。考古学と自然科学③、同成社、247p。
- 松井 章編（2003）環境考古学マニュアル。同成社、401p。
- 安田喜憲（2004）環境考古学ハンドブック。朝倉書店、706p。
- 森 勇一（1994）昆虫化石による先史～歴史時代における古環境の変遷の復元。第四紀研究、33（5）、331-349。
- 森 勇一（1999a）第7章、昆虫。考古学と自然科学②考古学と動物学、同成社、119-150。
- 森 勇一（1999b）昆虫化石よりみた先史～歴史時代の古環境変遷史。国立歴史民俗博物館研究報告第81集、311-342。
- 森 勇一（2000）第3章、珪藻。考古学と自然科学③考古学と植物学、同成社、43-77。
- 森 勇一（2002）第VI章第2節、昆虫は語る。青森県史別編三内丸山遺跡、青森県、264-277。
- 森 勇一（2003a）コラム・珪藻。環境考古学マニュアル、同成社、147-152。
- 森 勇一（2003b）昆虫・珪藻。文化財科学の事典、朝倉書店、448-449、454-456。
- 森 勇一（2004）28。昆虫考古学。環境考古学ハンドブック、朝倉書店、351-366。

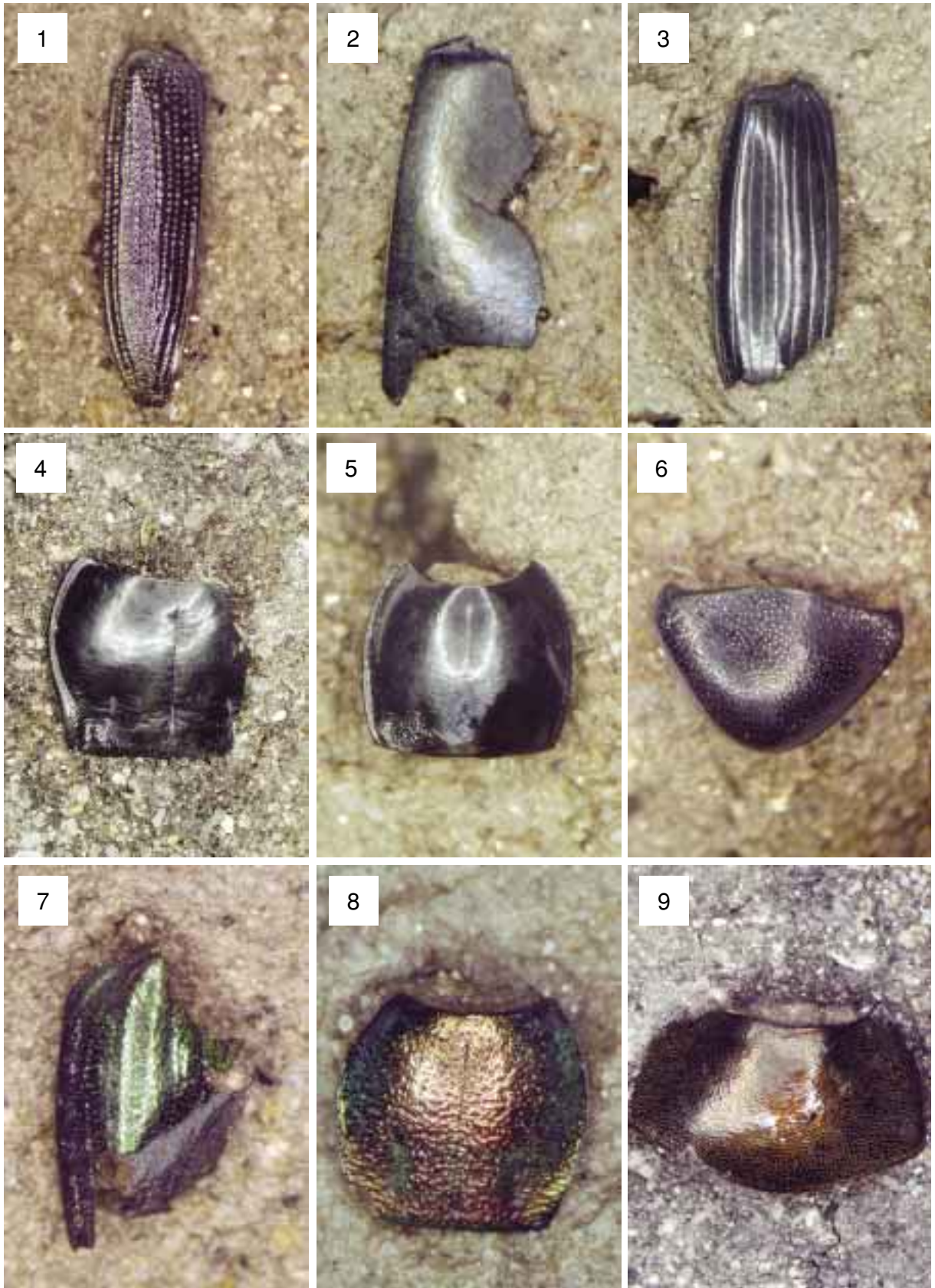


写真5 上中・西屋敷遺跡から産出した昆虫化石の顕微鏡写真

- | | |
|--|--|
| <p>1. イネネクイハムシ <i>Donacia provosti</i> Fairmaire
左上翅 長さ5.3mm (標本46)</p> <p>2. キベリクロヒメゲンゴロウ <i>Ilybius apicalis</i> Sharp
上翅片 長さ3.4mm (標本53)</p> <p>3. ヤマトトックリゴミムシ <i>Lachnocrepis japonica</i> Bates
左上翅 長さ5.0mm (標本25)</p> <p>4. ナガゴミムシ属 <i>Pterostichus</i> sp.
前胸背板 最大幅5.8mm (標本17)</p> <p>5. ヒラタゴミムシ族 <i>Platynini</i> genus et species indet.
前胸背板 高さ3.1mm (標本13)</p> | <p>6. エンマコガネ属 <i>Onthophagus</i> sp.
腹部腹板 最大幅4.5mm (標本37)</p> <p>7. ヒメコガネ <i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky
左上翅 長さ5.0mm (標本25)</p> <p>8. アオゴミムシ属 <i>Chlaenius</i> sp.
前胸背板 最大幅3.0mm (標本36)</p> <p>9. ドウガネブイブイ <i>Anomala cuprea</i> Hope
前胸背板 最大幅11.0mm (標本18)</p> |
|--|--|

第5章 まとめ

第1節 古墳時代（第61図）

古墳時代・古代の遺構としては竪穴住居が9棟検出されている。そのうち明瞭に確認できるものは6棟である。これらの竪穴住居は調査範囲でも最も標高の高い地帯である、D・E区に作られている。1棟（E区SB04）が4世紀後半の松河戸I式になり、S字状口縁台付甕の影響を受けたく字状口縁甕（170）が出土している。D区SB01・02、E区SB01・02・03の竪穴住居は、7～8世紀に属すると考えられる。

またG a・G b・H・I区でも、比較的まとまった数の古墳時代～古代の須恵器が出土しており、なんらかの遺構があったと想定される。I区の南側にある落ち込みでは、放射性炭素年代測定値が7世紀末から8世紀代を示すひょうたん・木片・土壌が出土しており（第4章第1節）、この時期には落ち込みは次第に埋没しつつあり、そこに北側より遺物が落ち込んだものと思われる。

第2節 中世（第62図）

調査区の高位部から低地部に移り変わる、低位部のB・C区に遺構が広がる。B区では13基の方形土坑が検出されており、平面形が長方形のものから方形のものへと変化したことが考えられる。

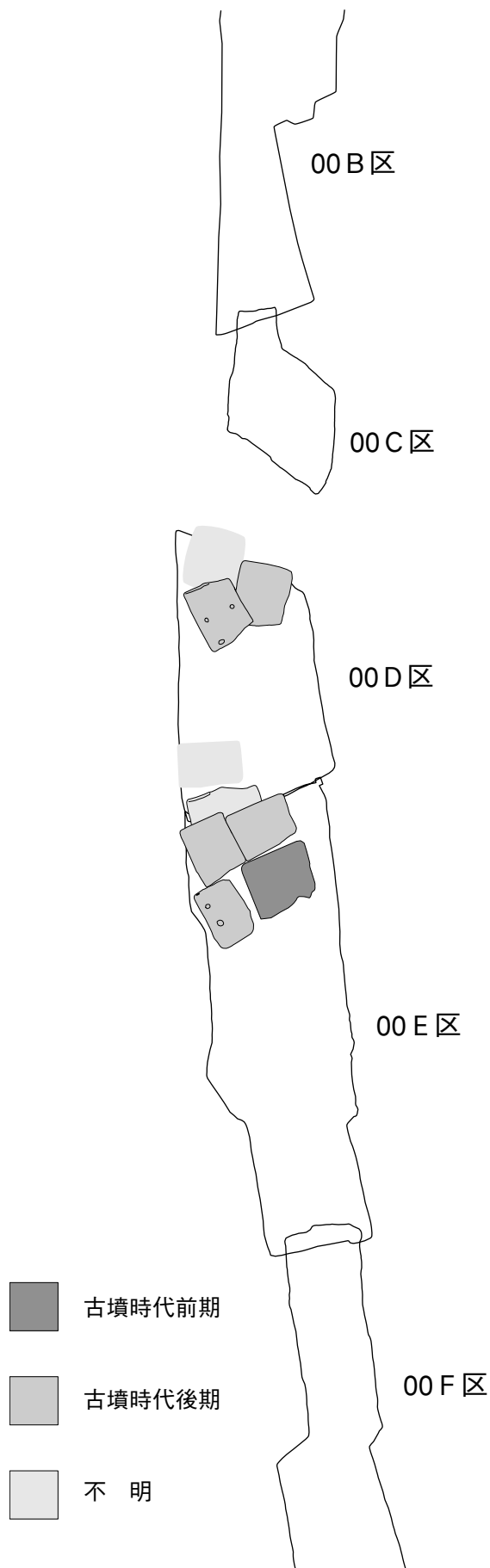
またC区では中国銭を11枚出土したSK07を含め、連続して並ぶ土坑群とそれに平行する溝、近接して井戸が検出されている。井戸の存在は不明であるが、土坑群は高位部から低位部への境界に作られており、付近からSK07出土分を含め、全出土17点中16点の銭貨がみつまっていることからみて、何らかの祭祀が行われていたことが想定でき、中世にはB・C区一帯が墓域空間であったと考えられる。

第3節 江戸時代（第63図）

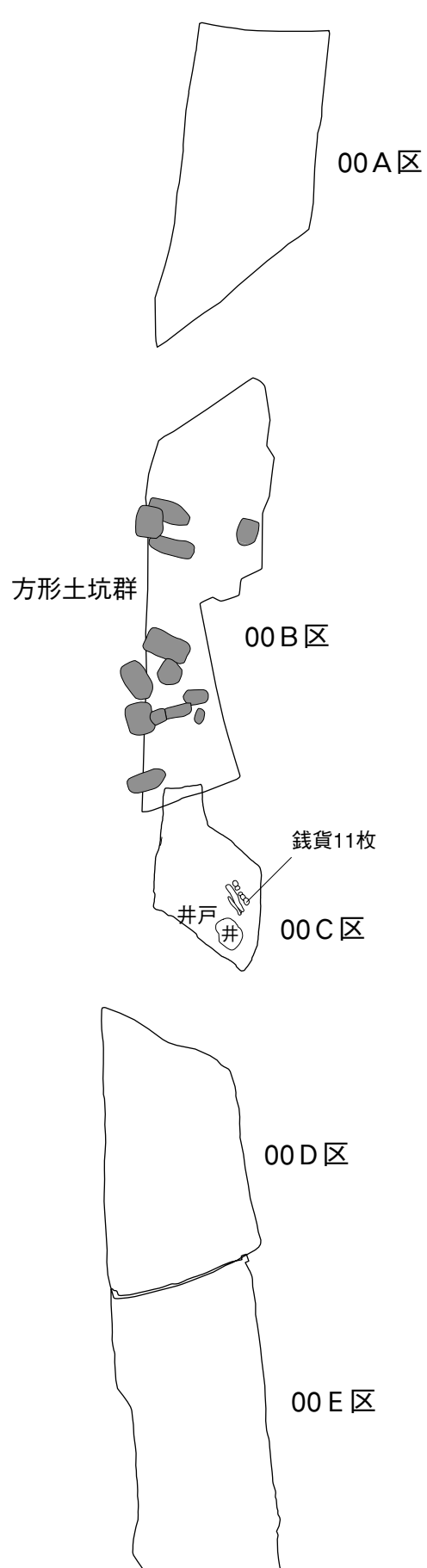
上中・西屋敷遺跡は江戸時代前後に大きく変化している。このことは加工円盤の出土分布からも伺え、古い時期の須恵器類・中世陶器類も江戸期のものと同様に低地部で集中的に出土しており、戦国期から江戸時代にかけて大規模な開削・埋め立てが行われたことを示している（第66図）

江戸時代の遺構で注目されるのは、B区SD01である。B区SD01は大規模な土坑であるB・C区SX03に接続する可能性が高く、下層より出土した完形品の16世紀後半の天目椀（119）より、この時期に下限が設定できる。B・C区SX03は埋没時期が18世紀後半から19世紀前半であることは確認できるが、掘削時期は不明である。B区SD01とB・C区SX03が連続しているとすれば、同時期に掘削されたと考えるのが自然である。119の天目椀が示す16世紀代は、『尾張徇行記』によると永正元年（1504年）に矢合村から北島村に「青宮寺」を移した時期にあたる（註1）。今回検出された大規模な土坑や溝もこの移転に伴い開削されたことが想定でき、出土した天目椀はまだ遺構が機能していた16世紀後半に投棄されたと思われる。またさらに想像をたくましくすれば、B・C区SX03は、寺院の庭園に伴う池のような施設が推定されるが、石組みや漆喰等の明確な遺構は確認されていない。

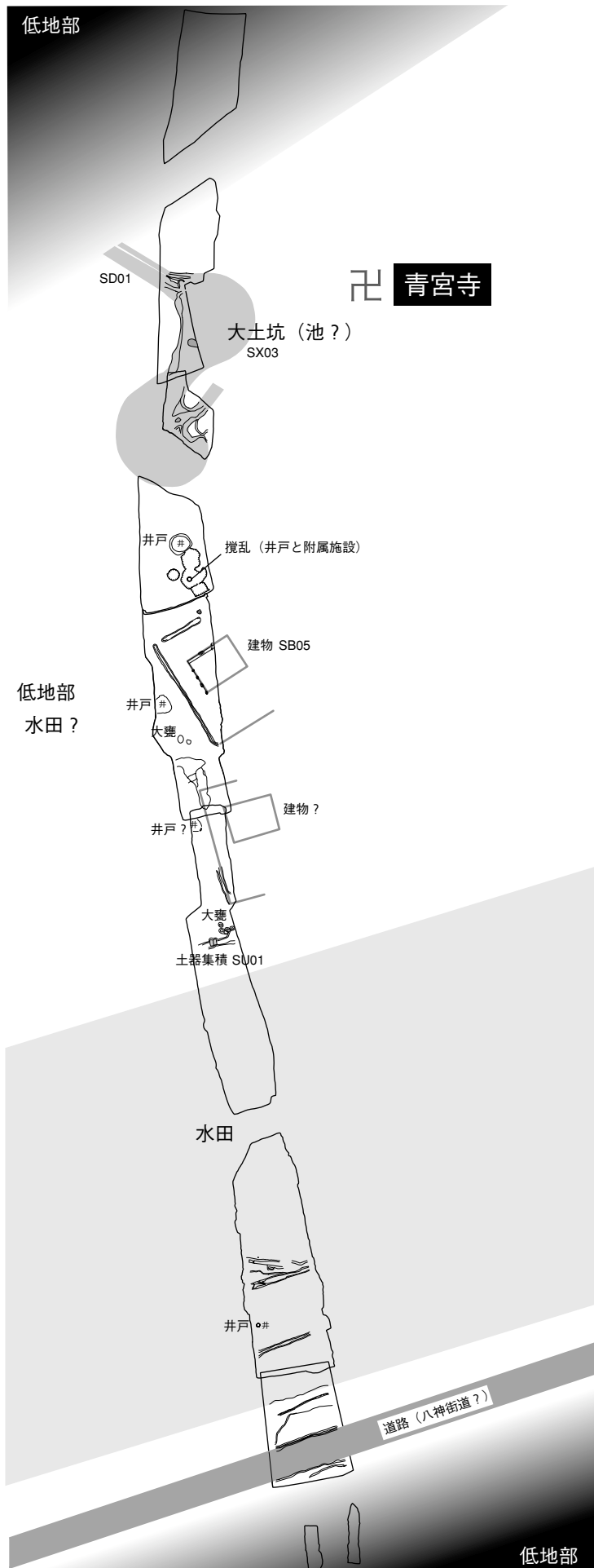
次にE区において掘立柱建物（E区SB05）が確認されている。この建物は西北側に細い溝が掘削され、規模は4×2間以上となる。この建物の西側には井戸と常滑甕を正位で設置した遺構があり、同時期に存在した可能性が高い。また建物の北側には、攪乱として扱った近現代（太平洋戦争以前）



第 61 図 古墳時代遺構分布図 (S=1/500)



第 62 図 中世遺構分布図 (S=1/500)



第 63 図 江戸時代遺構分布図 (S=1/1000)

まで機能していた井戸・常滑甕（SK110）・水廻り施設がみられ、さらにその北側にも江戸時代後期の井戸があることから、水廻り関連の施設が長期間営なまれたことが考えられる。また建物（E区SB05）の南西で、F区にあたる部分でも正位に設置された常滑甕（F区SK01～04）と井戸の可能性のあるF区SK07が検出されている。E区SB05でみられたように井戸と常滑甕をセットとして考えるならばF区部分にも別建物が建つことが想定され、F区SD02が外周の溝とすれば、E区SB05とは軸線が異なる建物の存在が考えられる。またそうであれば前述したE区SB05の北にある井戸（D区SK28）にも常滑甕が伴い、別の建物が想定されるかもしれない。さらにB・C区SX03で出土した昆虫の分析でも人為的な環境汚染が指摘されている（第4章第2節）。

またG b区南側で、4.8 mの間隔をおいて平行して走る溝で区画された道路遺構（G b区SF01）が確認された。上中・西屋敷遺跡の南側には、徳川林政史研究所所蔵の天保12年（1841年）作製の北島村絵図（第64図、註2・3）に記載されている「八神道」が通っている。八神街道（八神道）は江戸時代初期に八神（現岐阜県羽島市桑原町八神）城主であった毛利氏が名古屋登城の道筋として開いたとされ、八神から木曾川を渡り祖父江町（下沼・下祖父江・山崎・森上）を経て、稲沢市域に入り（片原一色・矢合・北島・高重・増田等）、清州（迫間・西市場）を経て清州付近で美濃路と合流するという経路をたどる（註4・5）。村絵図をみると、北島地内において八神街道は、白山宮で北に上って西に折れ、定福寺の南西角付近で北に向かい、寺域が切れるあたりでまた西に折れるという複雑な走り方をする。この経路は現在の道路にほぼトレースされるが、定福寺より西側は北西―南東方向に斜めに走り、それに直交するように北東―南西に折れ、名古屋祖父江線に合流しており、直角に曲るように描かれる村絵図とは異なっている（第65図）。今回の調査で確認された道路遺構は、街道が定福寺の北西角から西に折れ橋に至るまでの部分にあたると思われる。ただ道路の幅も当初は六尺（約1.8 m）で、幕末から明治20年にかけて二間（約3.6 m）に拡幅されたとされるが、検出された道路遺構は4.8 mと規模が大きくなる。上記の八神街道とE・F区で確認された建物との間は、水田が広がっていたと思われ、すでに機能を失い埋没しつつあったB・C区SX03で出土した江戸時代に属する昆虫の分析でも、付近には水田の存在が指摘されている（第4章第2節）。調査では、個々の水田の規模及びその同時性についてははっきりしなかったが、9～10 m間隔で八神街道に平行して走る溝によって区画されていたことが伺える。また調査区の西側にも広がっていたことが想定される。ただG b区南端部では、最終的には八神街道を切って水田が作られており、江戸時代末以降水田域が拡大していった可能性もあり、八神街道の軸線とは異なる軸線をもつ掘立柱建物（E区SB05）もこの新しい時期になる可能性もあり、F区で推定される居住地から北に移動したことも考えられる。

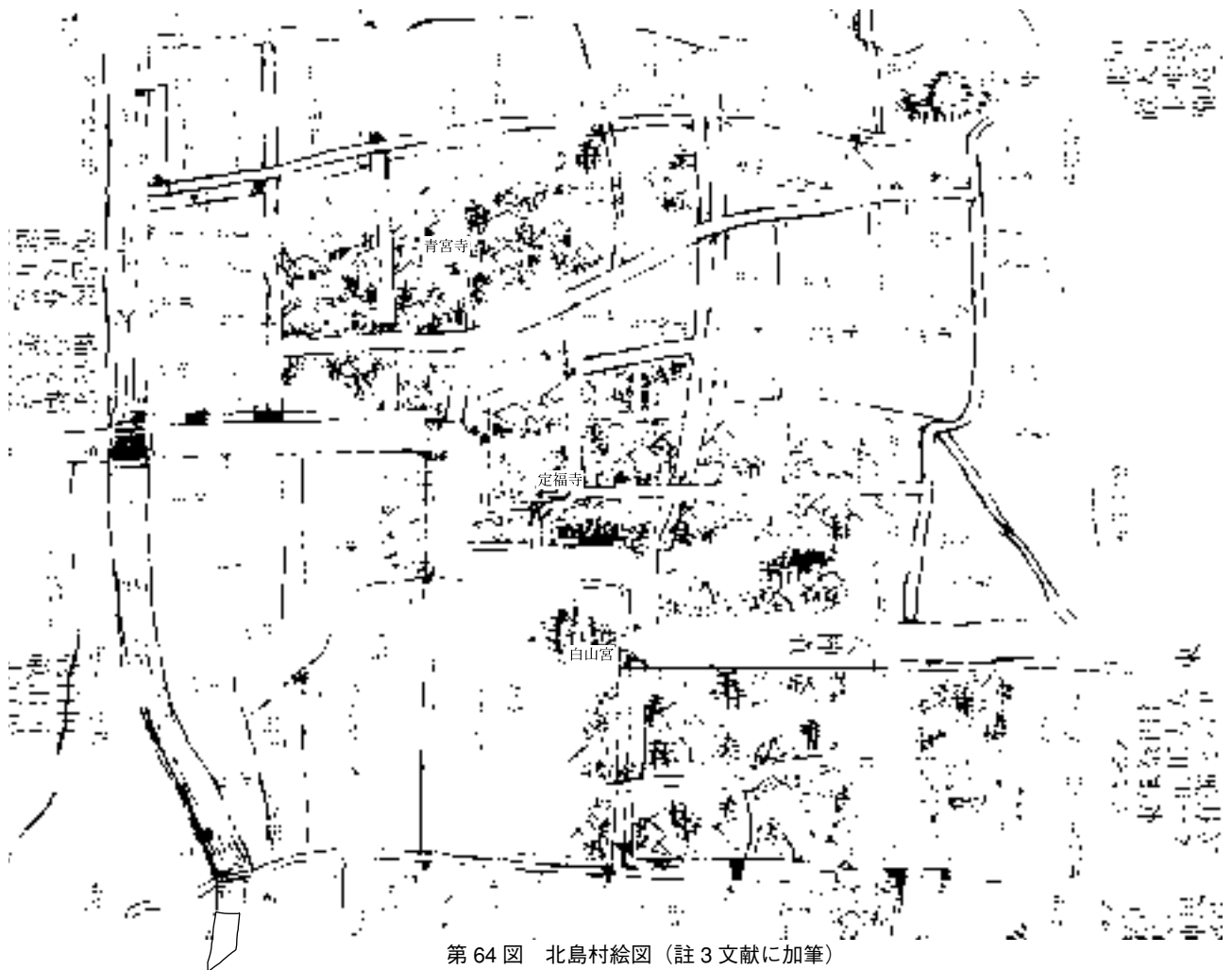
註1 稲沢市教育委員会 1985『稲沢市史資料第21編 真宗寺院什物調査報告書』

註2 稲沢市教育委員会 1979『新修 稲沢市史 資料編一 村絵図上』

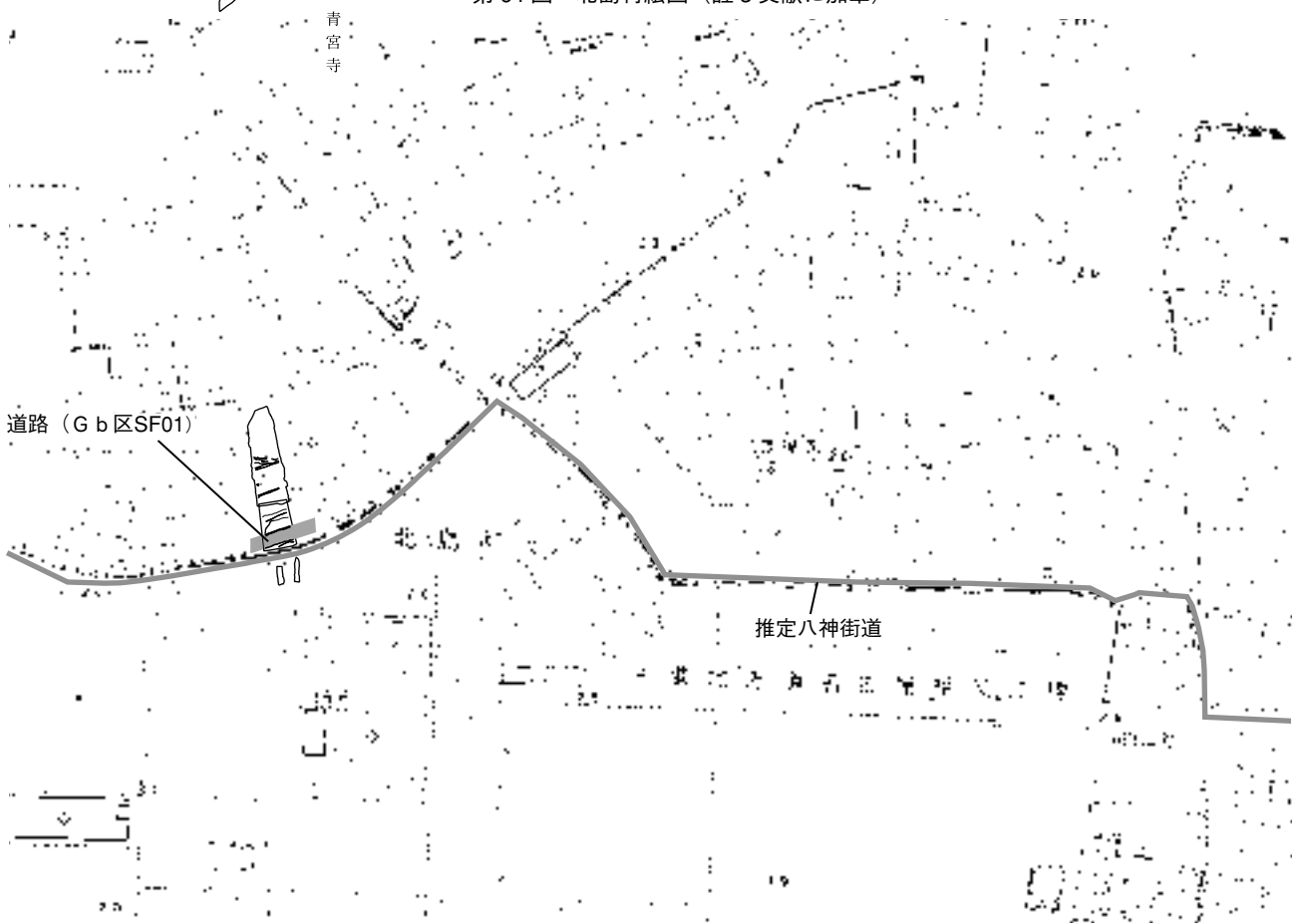
註3 稲沢市教育委員会 1982『近世村絵図 解説図』

註4 稲沢市教育委員会 2001『稲沢市史資料第36編 稲沢の街道 III―八神・巡見・清州津島街道』

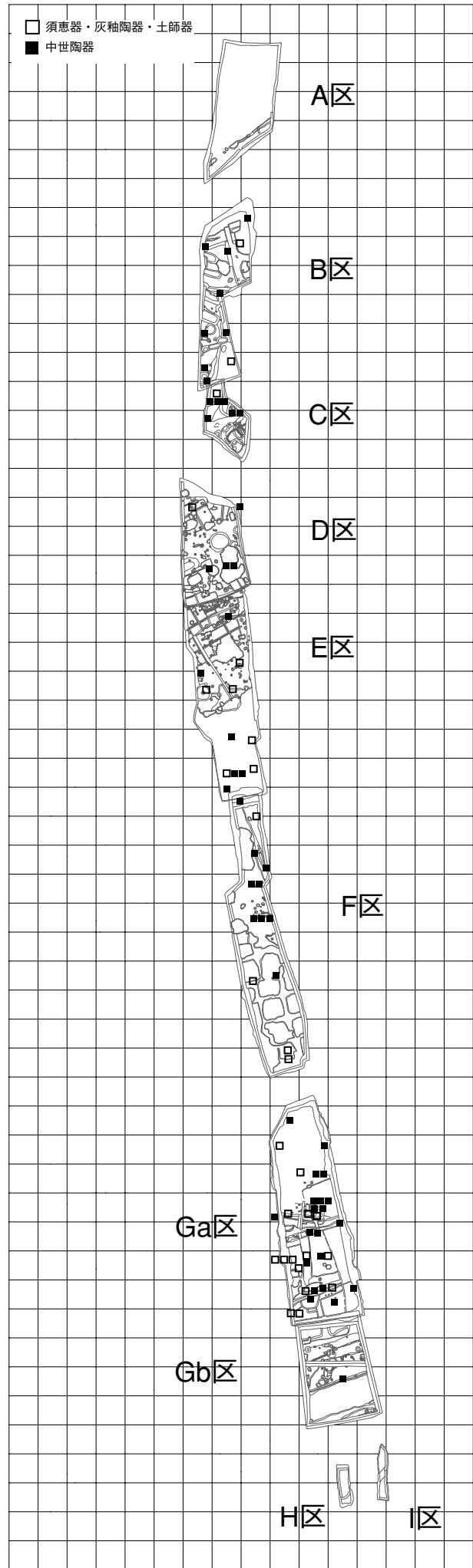
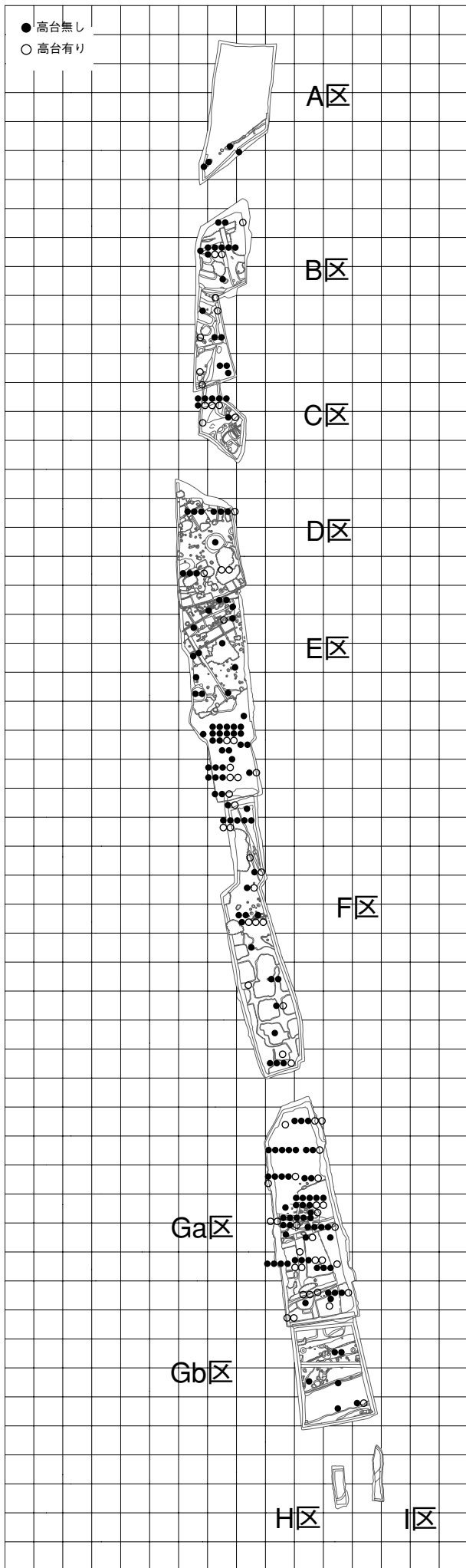
註5 松井義門 2000『北島の歩み』

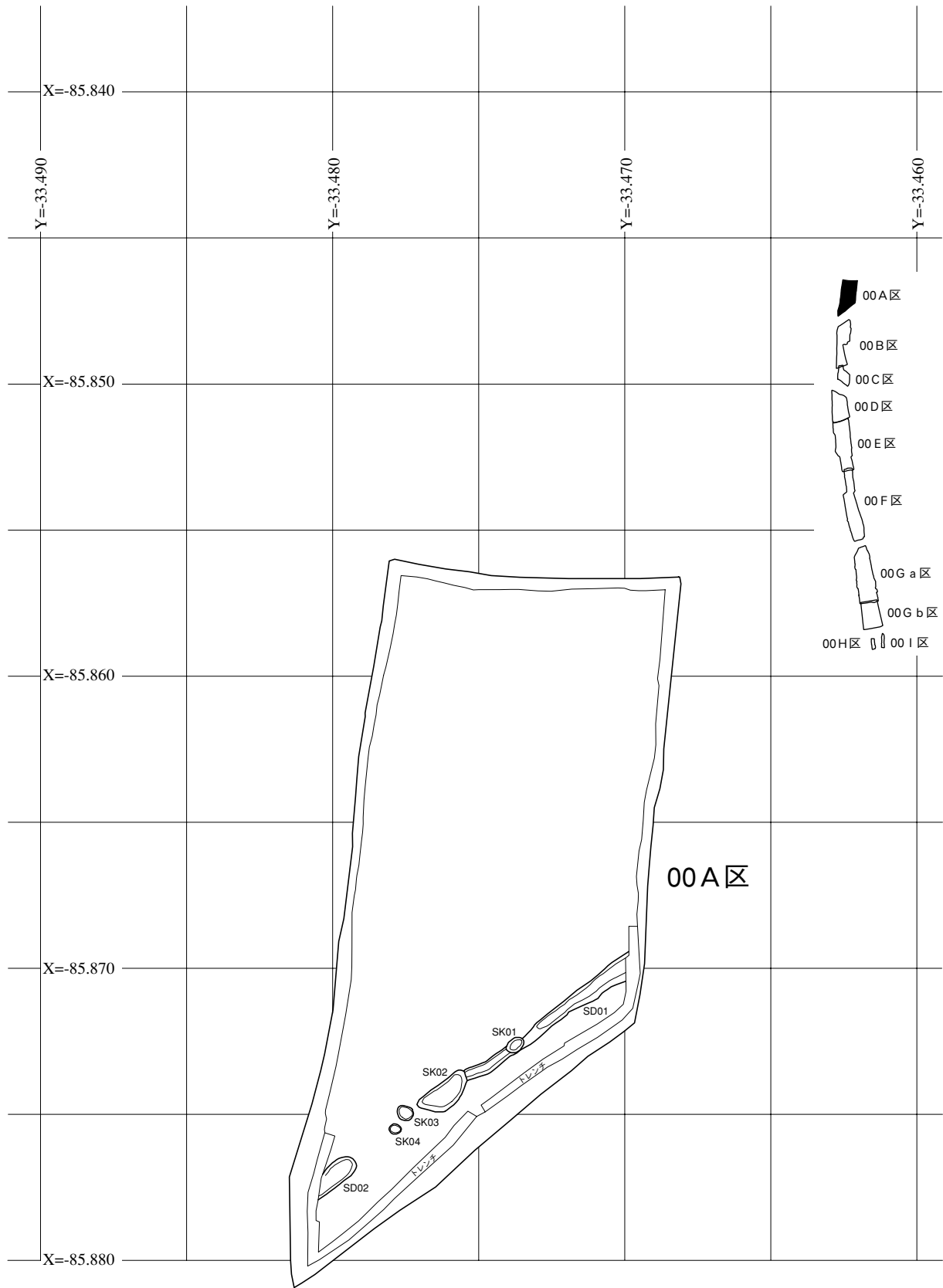


第 64 図 北島村絵図（註 3 文献に加筆）

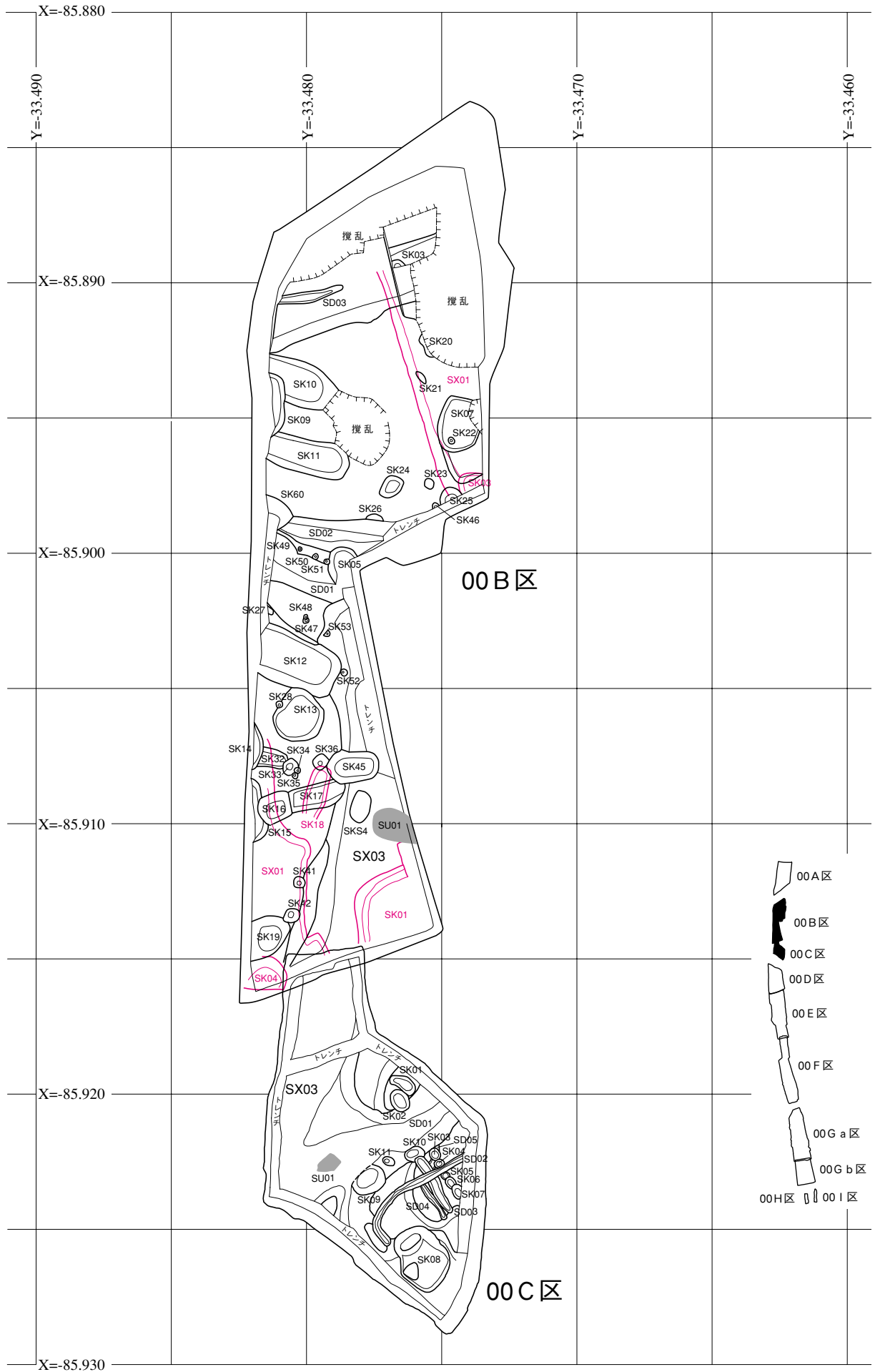


第 65 図 推定「八神街道」と Gb 区 SF01 (S=1/3000)



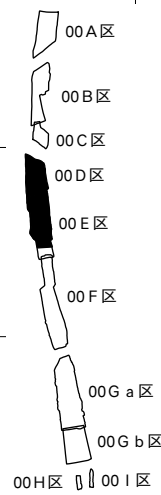
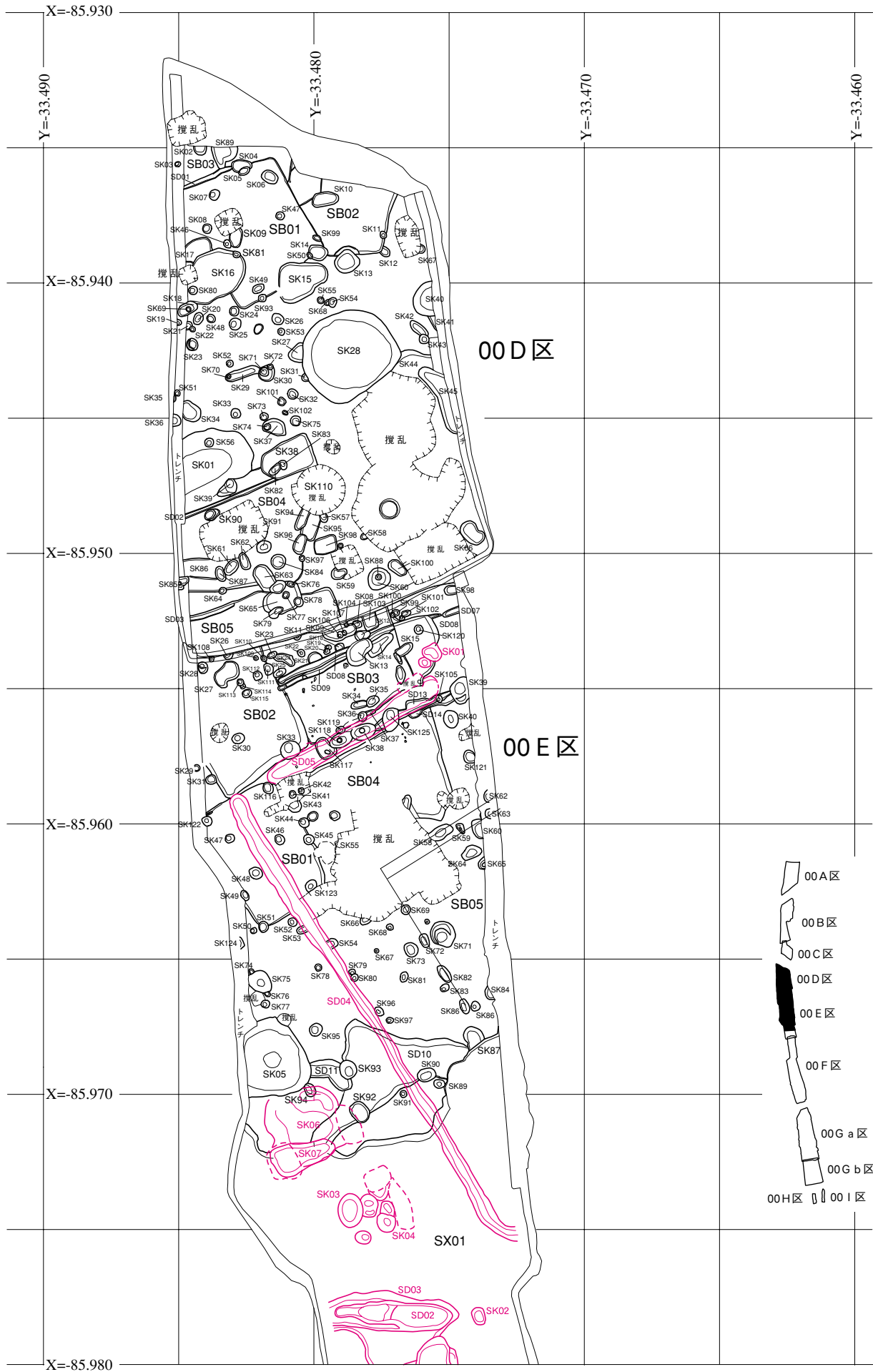


図版1 00 A区遺構平面図 (S=1/200)



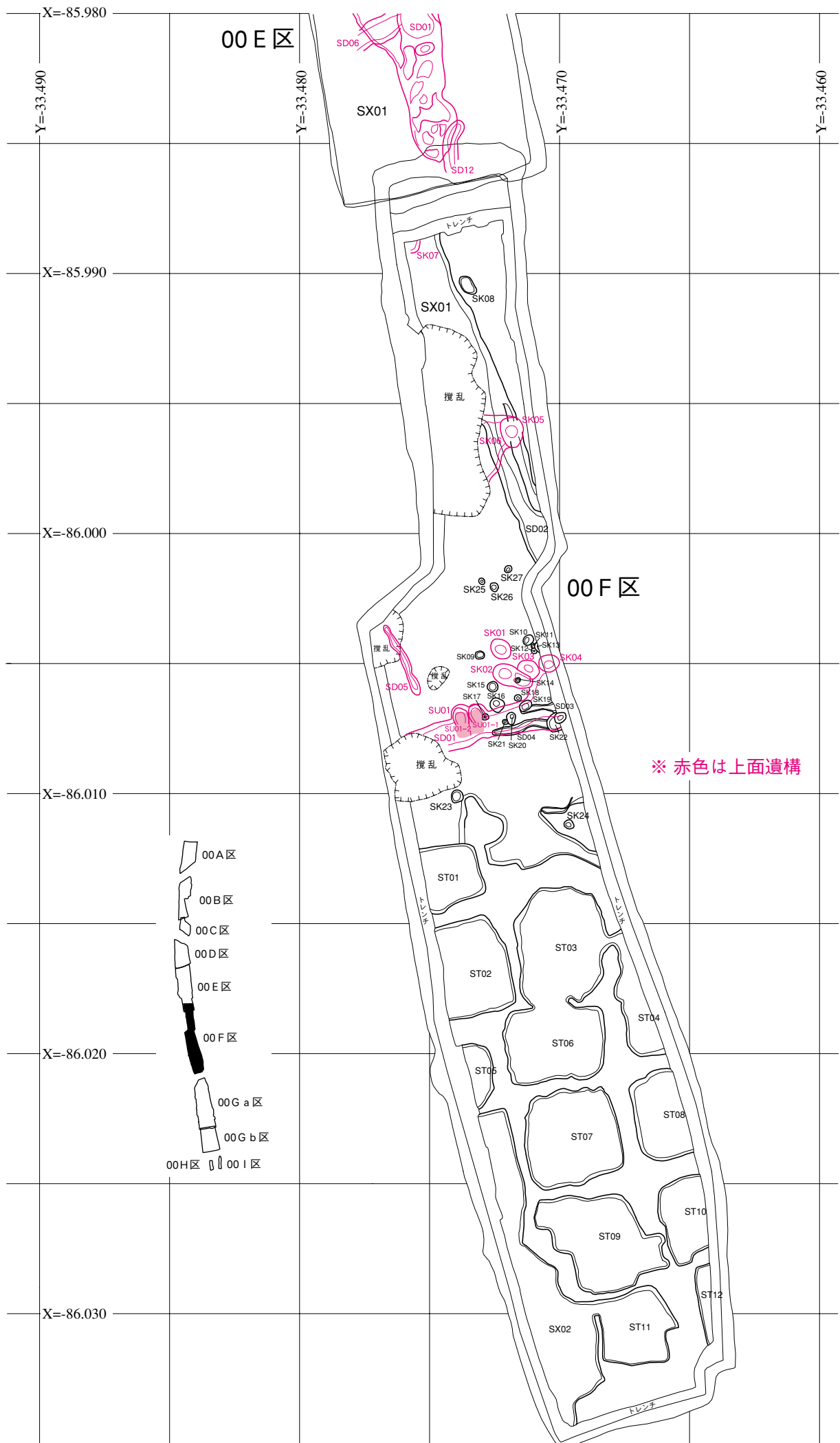
図版2 00B・C区遺構平面図 (S=1/200)

※ 赤色は上面遺構

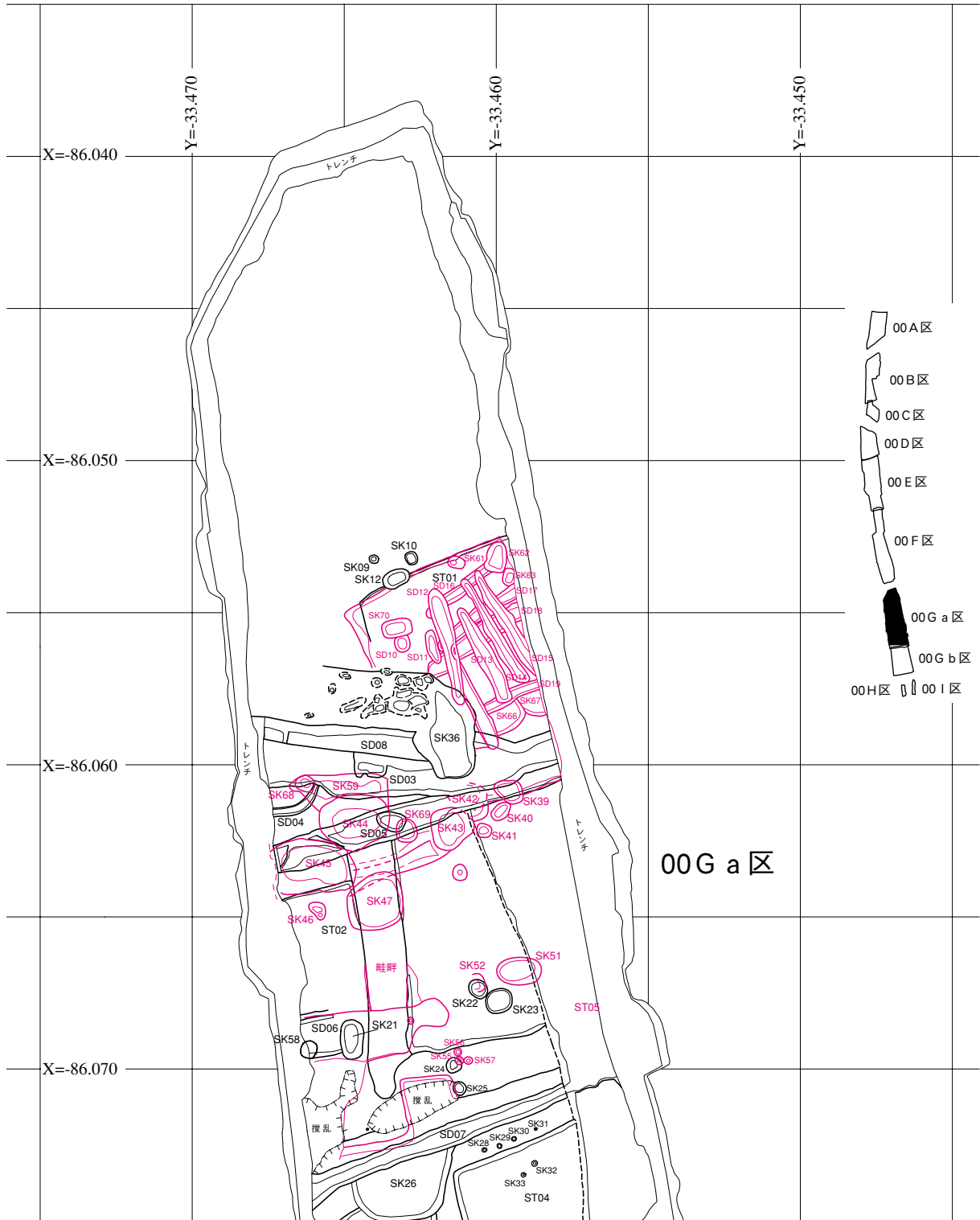


※ 赤色は上面遺構

図版3 00D・E区遺構平面図 (S=1/200)

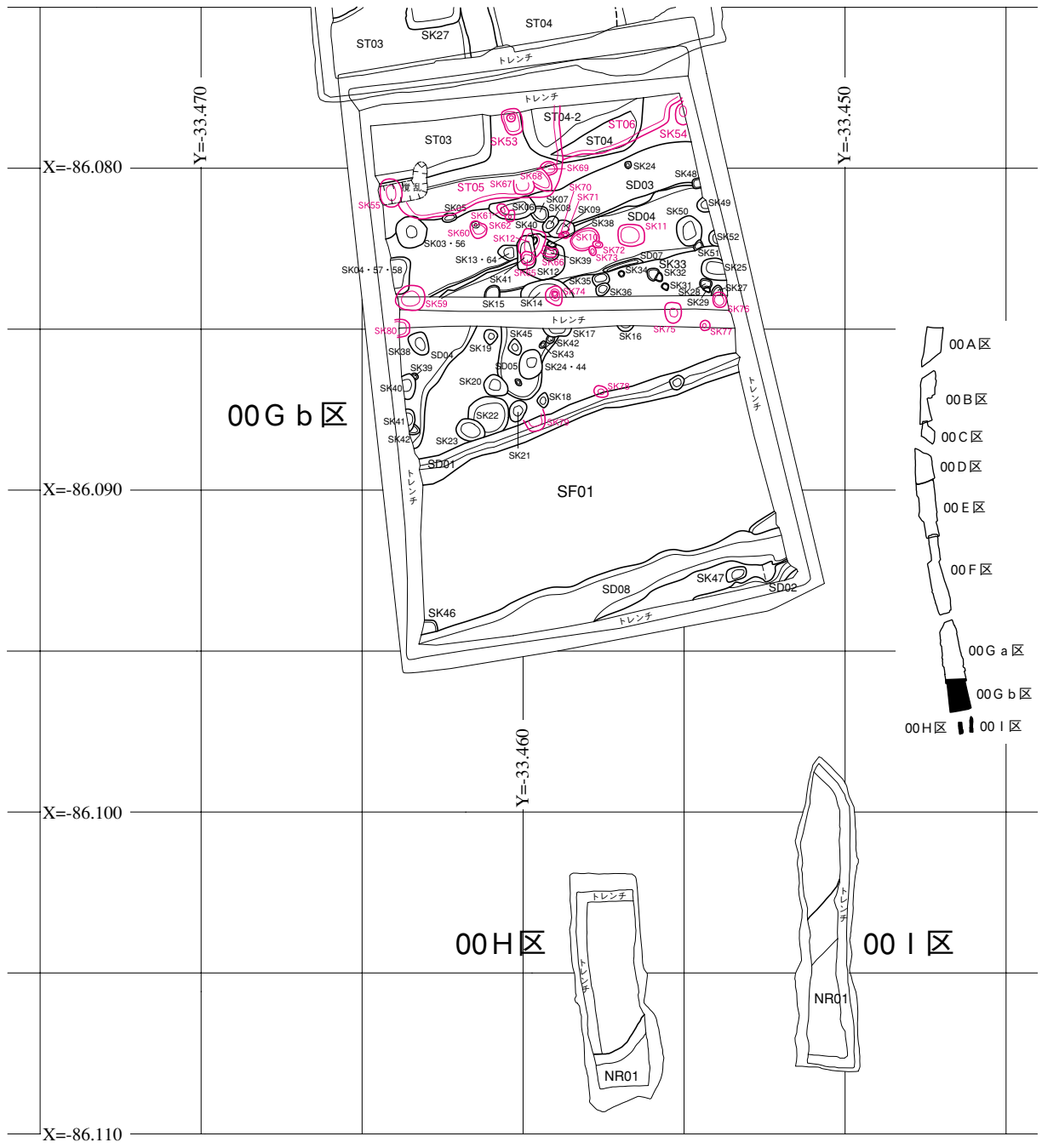


図版 4 00 E・F 区遺構平面図 (S=1/200)

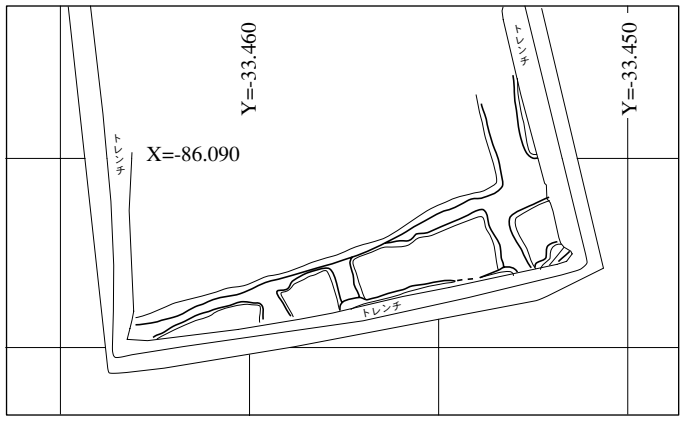


※ 赤色は下面遺構

図版 5 00G a区遺構平面図 (S=1/200)



※ 赤色は3面遺構



1面遺構

図版6 00G a・G b・H・I区遺構平面図 (S=1/200)



遺跡遠景（南から）



遺跡遠景（南東から）



00 B区から北部遠景



00 F区から南部遠景



00 D区（上が北）



00 E区（左が北）

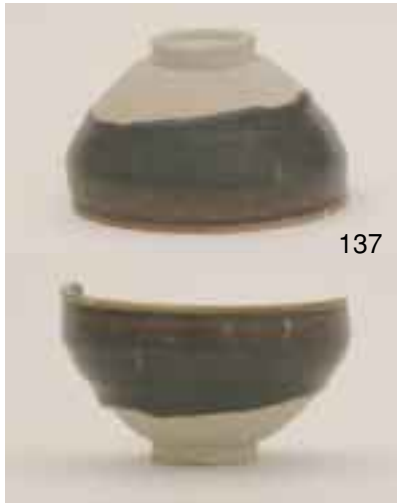


00 F区（右が北）

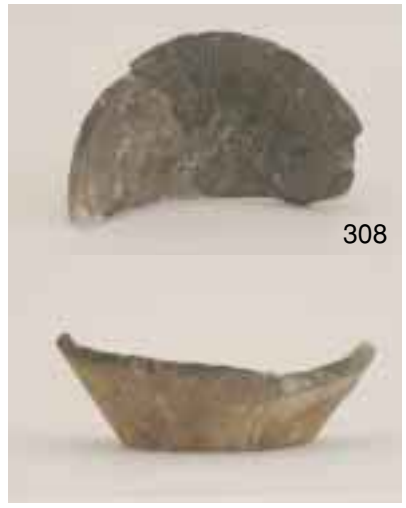


00 G a区（右が北）













調査前風景 (00 A区から南)



調査前風景 (00 D区から南)



調査前風景 (00 G b区から北)



表土剥ぎ前風景 (00 G b区から南)



00 A区 (東から)



00 A区 (南西から)



00 B区全景 (北から)



00 B区全景 (南から)



00 B区 SK07 検出状況 (南東から)



00 B区 SK13 半裁状況 (南から)



00 B区 SD01 セクション (東から)



00 B区 SD01 遺物 (119) 出土状況 (南西から)



00 B区 SX03・SU01 検出状況 (西から)



00 B区 SX03・SU01 検出状況 (南から)



00 C区 (右が北)



00 C区 (北から)



00 C区 (南西から)



00 C区 SX03・SU01 (南から)



00 C区 SX03・SU01 (北西から)



00 D区北部 (北から)



00 D区南部 (南から)



00 D区 SK28 (西から)



00 E区 SK05 (北東から)



00 E区 SK03 遺物出土状況 (南から)



00 E区 SK04 遺物出土状況 (東から)



00 E区 (北から)



00 E区 SB03 遺物 (163) 出土状況 (南から)



00 E区 SB03 遺物 (165・166) 出土状況 (北から)



00 E区 SB04 遺物 (169・170) 出土状況 (南東から)



00 E区 SB04 遺物 (169・170) 出土状況 (北から)



00 F区 SD01・SU01、SK01～04 検出状況（南から）



00 F区 SU01 検出状況（西から）



00 F区 SU01 検出状況（南から）



00 F区 SU01 断ち割り（南から）



00 F区 SU01 完掘状況（南東から）



00 F区南部（北から）



00 F区 SK01 ~ 04 検出状況（北西から）



00 F区 SK01 ~ 04 遺物出土状況（北西から）



00 F区北部（北から）



00 F区 SK01 ~ 04 遺物出土状況（南から）



00 F区 ST10 部分深堀状況（西から）



00 G a 区 SD03・05・08 付近 (東から)



00 G a 区 SD03 遺物出土状況 (南から)



00 G a 区 SK23 遺物出土状況 (北から)



00 G a 区 SD03 遺物出土状況 (北から)



00 G a 区 SK58 上段桶出土状況 (東から)



00 G a 区 SK58 上段桶出土状況 (北東から)



00 G a 区 SK58 上段桶半裁状況 (東から)



00 G a 区 SK58 下段桶出土状況 (東から)



00 G b 区 2 面遺構・SF01 (南から)



00 G b 区 1 面遺構 (北から)



00 G b 区 2 面遺構 (北から)



00 G a 区 ST01 東壁セクション (西から)



00 G a 区 下面遺構 (東から)



00 I 区 (北から)



00 G b 区 3 面遺構 (南東から)



00 G b 区 3 面遺構 (北から)



00 I 区 (南西から)



00 H 区 (北東から)



00 I 区 東壁南部セクション (北西から)

報告書抄録

ふりがな	かみなか・にしやしき							
書名	上中・西屋敷遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第120集							
編著者名	宮腰健司・鬼頭 剛・森 勇一・上田恭子							
編集機関	財団法人愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498-0017 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24							
発行年	西暦2004年8月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみなか・ にしやしき 上中・ 西屋敷	いなざわし きたじまちょう かみなか・に しやしき 稲沢市北島 町上中及び 西屋敷	23220	09210	35° 13' 38"	136° 47' 46"	2000年 4月 2000年 12月	4600m ²	県道須成 七宝稲沢 線建設に 伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上中・ 西屋敷	集落 墓 水田	古墳 古墳～平安 鎌倉～室町 江戸	竪穴住居 水田 土壇 井戸 区画溝	土器 土製品 須恵器・土師器 銅銭 木製品 石製品 瓦				

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第120集

上中・西屋敷遺跡

2004年8月31日

編 集 (財)愛知県教育サービスセンター
発 行 愛知県埋蔵文化財センター

印 刷 サンメッセ株式会社